

学校の組織力を高める校内研修の展開



茨城県教育研修センター

はじめに

今日、グローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、高度化・複雑化する諸課題への対応が必要となっており、学校教育においても、求められる人材育成像の変化への対応が迫られております。さらに、このような諸課題に対応できる教員の養成と、学び続ける教員像の確立が求められております。

中央教育審議会（答申）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（平成24年8月）において、「これからの社会で求められる人材像を踏まえた教育の展開、学校現場の諸課題への対応を図るためには、社会からの尊敬・信頼を受ける教員、思考力・判断力・表現力等を育成する実践的指導力を有する教員、困難な課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する教員が必要である。」と提言され、「教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である（「学び続ける教員像」の確立）。」ことが示されました。

学び続ける教員であるためには、校内研修の位置付けが重要であり、必要不可欠です。校内研修を通して、教員一人一人の多様な資質能力が育まれるだけでなく、教職員集団が、連携、協働することで、組織全体として充実した教育活動が展開され、学校としての組織力が高まり、先に述べたような複雑化する諸課題に対応できると考えます。

今回、作成した冊子「学校の組織力を高める校内研修の展開」は、実践プログラムの事例、研修の手法例を提供するとともに、理論研究のまとめ、校内研修を企画・運営するファシリテーターの役割などを示すことで、効果的な校内研修が実施されるように支援することをねらいとしています。校内研修の充実を通して、同僚性が生まれ、教職員一人一人の資質能力が向上し、教職員集団としての力や協働体制が構築され、学校の組織力が高まることを期待して編集いたしました。

各学校におかれまして、この冊子が、学校の組織力を高める校内研修の充実の一助となることを願っております。

また、教育研修センターでは、「校内研修支援事業」として、小中学校及び市町村教育委員会からの要請を受け、指導主事等による訪問を通して校内研修を支援するとともに、その成果を教育研修センターの講座や研究及び県の教育施策に反映させ、本県教育の充実を図っております。さらに、各学校が「一人一人が輝く活力ある学校づくり」のための取組を推進されますことを期待いたします。

平成25年3月

茨城県教育研修センター所長

谷田部 佳見

◆ 目次 ◆

第1章 理論編

1 学校の組織力と校内研修	2
(1) 学校の組織力とは	2
(2) 学校の組織力を高める必要性	2
(3) 学校の組織力を高める校内研修	3
(4) 学校の組織力の向上と各組織の校内研修	4
(5) 校内研修の運営上の課題	4
(6) 中学校、高等学校における校内研修の工夫例	5
2 校内研修を充実させるファシリテーター	6
(1) ファシリテーターとは	6
(2) ファシリテーターの役割	6
3 校内研修を企画・運営する ファシリテーターが進める八つのステップ	9
(1) 研究主題の設定	10
(2) ねらいや目指す児童生徒の姿の設定	11
(3) 具体的な方策の設定	12
(4) 研修計画の設定	14
(5) 授業研究を中心とした研修の設定	16
(6) 研修成果の検証	18
(7) 研修成果のまとめ	20
(8) 研修を進める上で必要な組織体制づくり	20
4 校内研修の実態（アンケート結果より）	22
(1) 校内研修の実施状況等	22
(2) 「学校の組織力を高める」ための方策等	25

第2章 実践編

1 校内研修の手法例	27
(1) 研修手法を行うに当たって	27
(2) 研修の手法例	27
① ブレインストーミング	27
② ブレインライティング	28
③ マトリクス法	28
④ KJ法	29
⑤ 概念化シート	29
⑥ 特性要因分析図（フィッシュボーン）	30
⑦ ウェビング	30
⑧ インシデントプロセス法	30
⑨ 指導案拡大法	31
⑩ ロールプレイング（役割演技法）	31

実践プログラムの項目と内容の見方	33
[国語] 言語活動を通してつくる国語科の授業づくり (小)	34
[国語] 各教科に広げる「書く力」を育てる研修 (中・高)	36
[社会] 身近な地域の観察や調査を取り入れた社会科の授業づくり (小)	38
[社会, 地理歴史・公民] 資料を選択し活用する学習活動を重視した授業づくり (中・高)	40
[算数] 説明し伝え合う活動の充実を図る算数科の授業づくり (小)	42
[数学] 数学的な思考力・表現力を育成する数学科の授業づくり (中・高)	44
[理科] 児童が主体的に問題解決する授業づくり (小)	46
[理科] 観察, 実験の結果を整理し考察する活動の充実を図る授業づくり (中・高)	48
[生活] 気付きの質を高める授業づくり—学校探検を通して— (小)	50
[音楽] 思いや意図をもって表現する音楽科授業づくり (小)	52
[図画工作] よさや面白さを感じ取る力を育てる図画工作科の授業づくり (小)	54
[家庭] 基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける家庭科の授業づくり (小)	56
[体育] 発達の段階を踏まえた体育科の授業づくり (小)	58
[外国語(英語)] 4技能の総合的な育成を目指した英語科の授業づくり (中・高)	60
[道徳] 協働作業による学習指導案作成 (小・中・高・特)	62
[道徳] 指導案拡大法による授業実践の振り返り (小・中・高・特)	64
[外国語活動] 外国語活動の「授業力」向上のための研修 (小)	66
[総合的な学習の時間] 地域の特色を生かしたカリキュラムの開発 (小・中・高)	68
[特別活動] 特別活動の評価の進め方 (小・中・特)	70
[特別活動] 目指す児童生徒像の具現化を図る特別活動 (小・中・高)	72
[情報教育] 茨城県教育情報ネットワークの利活用〈校務の情報化〉 (小・中・高・特)	74
[情報教育] 授業で使うICT〈授業におけるICT活用〉 (小・中・高・特)	76
[情報教育] 教職員自身が知っておきたい「情報モラル教育」 (小・中・高・特)	78
[食育] 食に関する指導の進め方 (小・中)	80
[キャリア教育] キャリア教育の視点から自分の授業を捉え直す (小・中・高)	82
[キャリア教育] 自校ならではのキャリア教育の年間指導計画をデザインする (小・中・高・特)	84
[人権教育] 人権学習プログラムを利用した職員研修 (小・中・高・特)	86
[人権教育] 人権教育指導資料を利用した模擬授業 (小・中・高・特)	88
[教育相談] 子ども同士の望ましい人間関係づくり〈構成的グループエンカウンター〉 (小・中・高)	90
[教育相談] 教師と子どもの望ましい人間関係づくり〈「私」メッセージスキル〉	92
[教育相談] 気になる子どもへの教育相談	94
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒の理解と対応	96
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議の進め方	98
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業づくり	100

[道徳] 協働作業による学習指導案作成 (小・中・高・特)	
資料分析表 -----	103
学習指導案作成用紙【B4】 -----	104
[道徳] 拡大指導案を使った授業実践の振り返り (小・中・高・特)	
「導入, 展開, 終末」それぞれの役割と工夫チェックプリント (例) ----	105
授業参観シート (例) -----	106
[特別活動] 特別活動の評価の進め方 (小・中・特)	
目指す児童像の設定までの流れ (例) -----	107
[特別活動] 目指す児童生徒像の具現化を図る特別活動 (小・中・高)	
特別活動改善シート (記入例) -----	108
特別活動改善シート -----	109
[キャリア教育] キャリア教育の視点から自分の授業を捉え直す (小・中・高)	
発達の段階におけるキャリア発達課題・発達の特徴 -----	110
発達の段階において育成すべき基礎的・汎用的能力 -----	111
[キャリア教育] 自校ならではのキャリア教育の年間指導計画をデザインする (小・中・高・特)	
キャリア教育の年間指導計画 (ワークシート) -----	112
[教育相談] 子ども同士の望ましい人間関係づくり <構成的グループエンカウンター> (小・中・高)	
望ましい人間関係づくりの進め方 -----	113
構成的グループエンカウンター (SGE) -----	114
構成的グループエンカウンター (SGE) 演習資料 -----	116
構成的グループエンカウンター (SGE) [ppt資料] -----	118
[教育相談] 教師と子どもの望ましい人間関係づくり <「私」メッセージスキル>	
「私」メッセージスキル <デモンストレーション シナリオ例> -----	120
「私」メッセージのシナリオを考えてみましょう -----	121
ポイント -----	122
振り返り用紙 -----	123
教師のためのソーシャルスキルトレーニング [ppt資料] -----	124
[教育相談] 気になる子どもへの教育相談	
気になる子どもへの教育相談 -----	125
〔演習1〕, 〔演習2〕, 〔演習3〕 -----	128
気になる子どもへの教育相談 [ppt資料] -----	134
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒の理解と対応	
国立特別支援教育総合研究所発達障害教育情報センター 研修講義一覧 ---	137
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議の進め方	
インシデントプロセス法によるケース会議の流れ (50分間) -----	138
特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議ワークシート -----	139
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業づくり	
特別支援教育の視点から学級経営や授業をチェックしてみよう -----	141
多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リスト -----	142

第1章 理論編

1 学校の組織力と校内研修

(1) 学校の組織力とは

「組織」とは、2人以上の人々の協働体系のことであり、次の三つの要素がそろうところに成立するとされています。

- ①共通目的：共有化された目標やビジョンの達成を目指していること。
- ②協働意欲：共通目的を達成するために協働する意欲をもっていること。
- ③コミュニケーション：コミュニケーションが十分にとれていること。

学校は、児童生徒を対象に、一定の教育課程によって計画的、継続的に教育活動を行う組織であり、公教育機関としての社会的使命を踏まえて、学校独自の共通課題に基づいて学校教育目標（「①共通目的」）を定め、個々の教職員が互いにその目標の達成に向けて貢献する意欲（「②協働意欲」）を高めるべく、意思伝達（「③コミュニケーション」）を図っている組織、といえます。なかでも、コミュニケーションは、共通目的と協働意欲をつなぐものであり、学校の組織としての力を高めるうえで要となります。

また、学校におけるコミュニケーションの向上は、教職員一人一人の自己省察、そして組織的な省察（ワークショップ型研修などによる、自己省察と他者の省察との交流）の充実につながります。学校における省察は、教育実践を振り返り、再構築していく過程となります。

「組織力」とは、組織がもっている実行力や対応力の総体であり、「協働によってものを達成する力」のことです。学校における協働とは、学校教育目標の実現のために、教職員一人一人が責任と役割を分担し、成果を共有することです。

以上のことから「学校の組織力」を、「教職員が、コミュニケーションを向上させることで、協働意欲を高め、省察を充実させ、学校教育目標を実現する力」と捉えます。

(2) 学校の組織力を高める必要性

学校を取り巻く環境が大きく変化する中で、高度化、複雑化する学校の諸課題へ対応するためには、教職員一人一人の経験や知識だけで対応することが難しくなりつつあります。

また、教職員の大量退職に伴う大量採用の時代を迎え、教職員の年齢構成は急激に変化しており、若手教職員やミドルリーダーの育成など、現職教職員の質の確保が課題となっています。

さらに、教科指導や生徒指導など、教職員としての本来の職務を遂行するためには、

教職員間の学び合いや支え合い，協働する力が重要ですが，昨今，教職員の間には学校は一つの組織体であるという認識が希薄になっていることや，学びの共同体としての学校の機能（同僚性）が十分に発揮されていないことが指摘されています。

以上のような課題を解決するために，各学校においては，学校の組織力を高めることが必要不可欠となります。

（３） 学校の組織力を高める校内研修

校内研修とは，学校内の教職員が直面する課題を解決し，自らの資質能力を向上させるために，全校で計画し組織的に取り組む活動です。組織的に取り組む校内研修により，以下のような効果が期待でき，学校の組織力を高めることとなります。

○ 児童生徒の期待されるべき成長と発達を促す

教職員が校内研修に意義を見だし，有効性を感じることで，教職員の研修への満足度を高め，それが教育活動の実践や意欲を高め，児童生徒の成長と発達を促す。

○ 学校の協働体制が向上する

校内研修を通して，教職員同士が学び合い，高め合っていくという同僚性が育まれ，教職員の協働体制が向上する。

○ 組織として機能するための校内体制づくりの一助となる

個々の教職員の知識・経験を他の教職員と共有し，学校が組織として機能するための校内体制づくりの手立てとなる。

また，一つの研究主題を設定して校内研修に取り組むことにより，必要な組織体制づくりをするための手段として効果が高い。

○ 大量採用の時代に備え，若手教員を育成する機会となる

校内研修の場面で，先輩教職員が培ってきた教育理念や教育技術，知識などを伝えることで，若手教員を組織として育て，組織力の維持と向上を図る。

○ ミドルリーダーを育成する機会となる

中堅教職員が研修の企画・準備・運営等の役割を担うことを通して，ミドルリーダーとしての資質能力が向上する。

○ 教職員の関係性が向上する

校内研修を通して，教職員が良好な人間関係を築き，その関係性を向上させることができるようなコミュニケーションしやすい環境が整う。

校内研修に対して期待することや意欲には個人差があります。そのため，組織として，継続的，計画的な校内研修の体制づくりをすることが重要です。また，校長が明確なビジョンを示し，教職員が共通目的をもてるようにマネジメントすることは不可欠です。

(4) 学校の組織力の向上と各組織の校内研修

学校組織を構成する各校務分掌等は、学校の課題解決の一助となるよう研修の目標、内容を設定し、校内研修を企画することになります。そして、各校務分掌等による校内研修を相互に、また学校全体での校内研修と有機的に関連させることで、研修効果が一層高まります。

例えば、各教科等においては信頼と妥当性のある観点別学習状況の評価の推進が、学校にとって対処すべき課題の一つとなっています。その解決のためには、校内研修を行うことが大切です。各教科等の教職員が組織として動かなければ、学習評価に差が生じることが起こり得るので、各教科ごとに示された評価規準の設定等について、それぞれの各教科等の教職員による校内研修で共通理解を図ることが考えられます。さらに学校全体での校内研修を通してそれぞれの組織が互いに共通理解を図り、総合的な視点から、学校全体として評価を見直し、改善することで、客観性や信頼性を高めていくことが重要です。

このように、各組織等による校内研修を、学校全体での校内研修と関連させることで、学校全体の組織力の向上が期待できます。

(5) 校内研修の運営上の課題

校内研修の実施に当たって、参加している教職員に校内研修の意義や目的が十分に理解されていないことから、研修が活発に行われていない実態があります。また、授業研究後に協議をする際、同僚であるからこそ相互に批判がしにくく、参加者の発言が少なくなることで、進行役の負担が大きくなり、協議に深まりがなくなってしまうなどの課題があります。

校内研修がもつ本来の役割を発揮するためには、教職員が校内研修に意義を見だし、その有効性を感じ、達成感を味わうことができる校内研修を企画し、運営する必要があります。

(6) 中学校、高等学校における校内研修の工夫例

教科担任制の中学校や高等学校では、学校全体で校内研修を実施するには工夫が必要となる場合があります。

○ 学校の研究主題を踏まえて各教科ごとにテーマを設定する

学校で設定された研究主題を踏まえて、各教科の課題や特性に合わせ、各教科ごとに研修を実施することも考えられます。例えば、学校の研究主題を「思考力、判断力、表現力豊かな生徒の育成」と設定している場合、数学であれば「思考力を育てる数学的活動の在り方」をねらいとして、校内研修を実施するということが考えられます。また、教科ごとの研修に他教科の教職員の参加を促し、その意見や感想を参考とすることも大切な検討要素であるといえます。小規模校においては、関連する教科等を組み合わせて、研修することも可能です。

○ 学校の研究主題を各教科に共通したものを設定する

研究主題をより各教科に共通したものを設定することで、教科の枠を越えた研修を深めていくことが可能になります。例えば、教科内容そのものではなく、「授業形態」、「特別な配慮を必要とする生徒への対応」、「教育課程の方向性」、「学力観」、「評価観」などを踏まえた研修では、教科が異なっても共通する要素が多く、全教職員参加での研修の実施が求められています。

2 校内研修を充実させるファシリテーター

(1) ファシリテーターとは

校内研修を充実させるためには、研修のリーダーの果たす役割が重要です。研修のリーダーが、教職員にとって必要性を感じる内容で研修を企画し、研修の意義について共通理解を図り、円滑に運営することが大切です。このような研修のリーダーをファシリテーターといいます。

(2) ファシリテーターの役割

ファシリテーターには、研修の場において個々の教職員の力を引き出し、多様な教職員の思いや考えをまとめていくといった「参加者の主体的な研修を支援する」ことと、「参加者同士の相互作用を促進する」ことが求められます。校務の一環として義務的に設定された校内研修では、活気ある研修にはなりにくいものです。教職員が主体的に研修するからこそ研修が活気付くのです。しかし、主体性があるだけでは、個人のモチベーションは高くても研修のまとまりに欠ける場合があります。参加者全員に、適切に動機付け、研修意欲を引き出していくのがファシリテーターの役割です。

また、研修の場において、参加者が当たり障りのない発言に終始してしまうことがあります。ファシリテーターが自由闊達に話し合える雰囲気をつくることで参加者同士の相互作用が生まれ、それによって能力や新たな考え方が引き出されることが期待できます。

ファシリテーターの役割を、研修の流れの中で捉えると、以下の三つになります。

- | | |
|------|--------------------|
| <事前> | 研修の企画・準備 |
| <研修> | 研修の運営 |
| <事後> | 研修の在り方や方法に対する評価と改善 |

また、研修の運営においては、さらに次のような役割を果たします。

- | | |
|---|---------------------------------|
| ① | 協働的な雰囲気の研修を進行する。(場のデザイン) |
| ② | ワークショップで出された課題を焦点化する。(構造化) |
| ③ | 焦点化した課題に対する改善策について思考を促す。(合意形成) |
| ④ | 研修の内容を整理し、課題や改善策等の成果を提示する。(共有化) |
| ⑤ | 参加者全員が成果を共有できるようにする。(省察) |

ワークショップ等で小グループに分かれる研修では、それぞれのグループにもファシリテーターとなる教職員を配置し、①～⑤の役割を果たせるようにすると、さらに効果

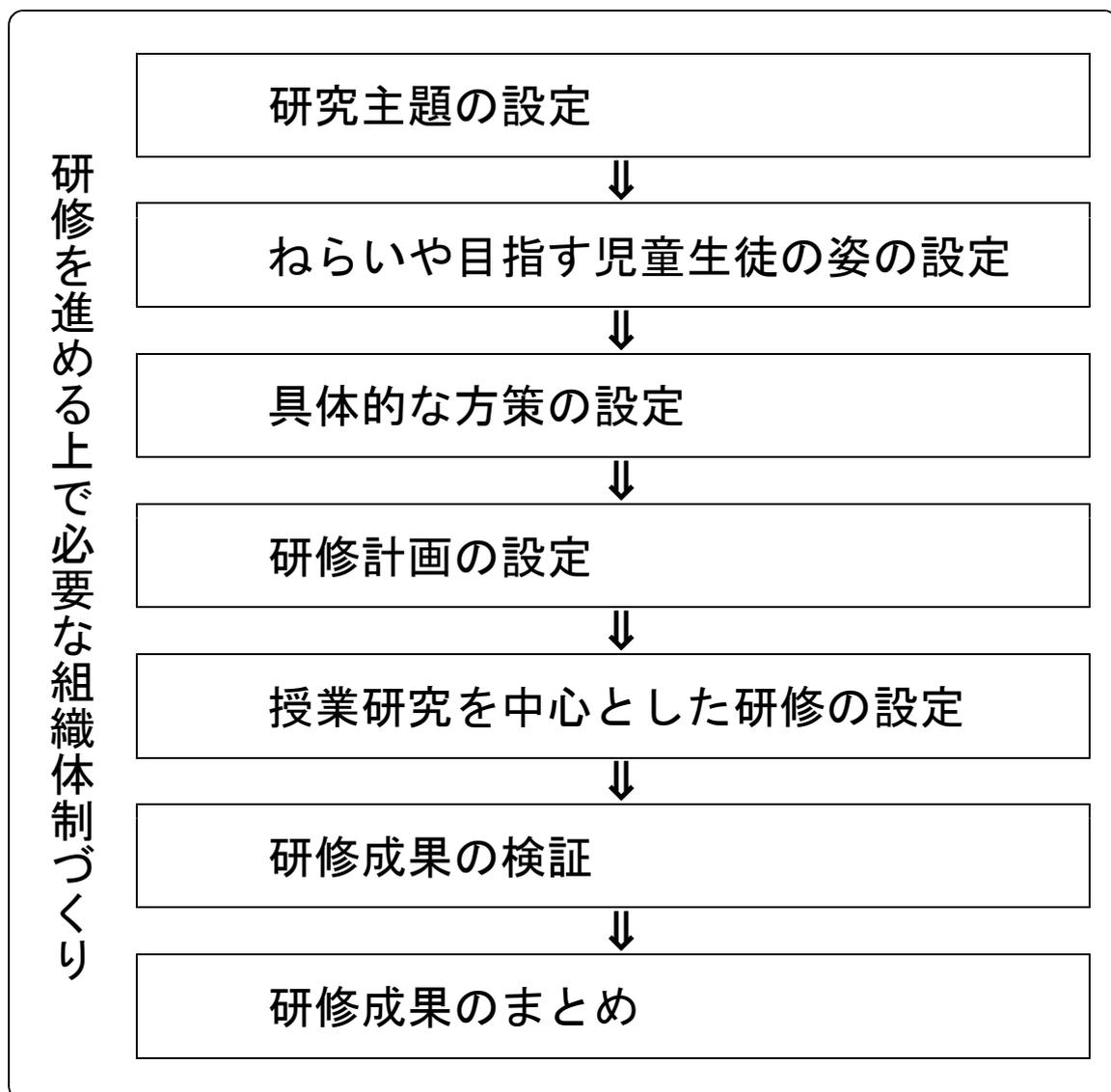
的な研修となります。

このように、ファシリテーターは、研修の企画・準備・運営・評価・改善を行います
が、ファシリテーターとなった教職員だけでは負担が大きくなることも考えられますの
で、管理職、教務主任、研究主任、教科主任等と連携を図り、各学校の実態に応じた役
割分担をすることが必要です。

3 校内研修を企画・運営する ファシリテーターが進める八つのステップ －研究主題を設定して、校内研修を実施していく場合の例－

校内研修は、様々なねらいの下に実施されます。ここでは、「研究主題を設定して、校内研修を実施していく場合」を例にして、ファシリテーターのやるべきことは何か、どのように機能していけばよいか、八つのステップを述べます。

これらのステップを通して、全教職員が組織として機能していくことが求められることとなり、学校の組織力が高められていきます。また、研修を深めていくことで、おのずと教職員一人一人の資質能力も高められていきます。



(1) 研究主題の設定

まず、研究主題を設定します。研究主題の設定には、次の3点を考慮していく必要があります。ア 学校教育目標、イ 児童生徒の実態、ウ 今日的な課題等の3点です。これらを十分に考慮しながら、研究主題を設定していきます。研究主題の設定の過程では、教職員全体で話し合う場を用意し、教職員一人一人が主体的に研修に参加していこうとする意欲を高めていくことが大切です。また、研究主題を設定する際には、研修を進めていく重点教科等の一つないし複数設定することもあります。

ファシリテーター ここでは、これから始まる1年間の校内研修を充実したものにしていくために、ファシリテーターは、最初の重要な役割を果たさなければなりません。具体的には、前述した3点を教職員全員で検討できるように準備していくことが求められます。そのときの留意点は、以下のとおりです。

ア 学校教育目標及び学校経営方針について、校長の考えを十分に理解し、そこから関連する研究主題等の案を複数用意する。

イ 児童生徒の実態を把握するための具体的な資料（学力診断のためのテスト結果や、実態調査結果など）を準備する。

ウ 今、どのようなことが学校教育に関する今日的な課題となっているのか、教職員全員が共通に理解できる資料を準備する。

「研究主題を設定する際に重要なことは何か」

校内研修は、学校教育目標を達成するために学校経営方針に基づく校長のリーダーシップの下に行われます。そのため、研究主題の設定においては、学校教育目標と学校経営方針を十分に反映していく必要があります。また、校内研修への教職員全員の意欲を高めていくためには、上記の3点を基に十分に検討し、今何が必要な研修であるのか、教職員一人一人の課題意識をしっかりと高めた上で研究主題を設定していくことが最も重要です。

<研究主題の設定の例>

研究主題を設定する場合、(ア) 目指す児童生徒の姿に目を向ける表し方と(イ) 学習指導の在り方に目を向ける表し方があります。いずれの場合も、どんな能力を高めていきたいのか、どんな児童生徒を育てたいのかが、テーマから見えることが必要です。

(ア) 目指す児童生徒の姿

- ・筋道を立てて考え、表現する **児童の育成**

(イ) 指導の在り方

- ・自ら考え表現し、豊かに学び合う **国語科学習指導の在り方**

また、具体的な重点教科や何を通して、そのテーマに迫っていくのかが分かるように副題を設定します。

- ・筋道を立てて考え、表現する児童の育成

～算数科における言語活動の充実を通して～

- ・自ら考え表現し、豊かに学び合う国語科学習指導の在り方

～単元を貫く言語活動の充実を通して～

(2) ねらいや目指す児童生徒の姿の設定

次に、ねらいや目指す児童生徒の姿を設定します。これらを設定することで、校内研修に研究的な視点をもたせ、研修を行った成果が児童生徒に還元されることをより意識化することができます。さらには、学校としてどのような児童生徒の姿を目指すのか、児童生徒の姿から研修の達成状況を検証することが可能になります。

ファシリテーター ここでは、設定した研究主題に基づき、どのような児童生徒を目指していくのか、教職員全員が児童生徒の姿として共通に理解できる言葉で、ねらいや目指す児童生徒の姿を整理し設定していくことが、ファシリテーターには求められます。

<言葉の定義の例>

研究主題に基づき、ねらいや目指す児童生徒の姿を設定する際に、ファシリテーターが準備しなければならないのは、研究主題で使っている言葉の定義です。教職員が共通理解の下で研修を深めるために、分かりやすく定義することが大切です。

その際、学習指導要領、解説等の内容に照らし合わせて表していきます。また、年間の研修計画の早い時期に研究主題についての研修を行い、全員が共通に理解しておく必要があります。

(例) 研究主題「筋道を立てて考え、表現する児童の育成」

～算数科における言語活動の充実を通して～

- 研究主題のとらえ … 「筋道を立てて考え、表現する」とは、
 - ・問題を解決するための新しい方法をつくり結果を得ようとするとき、見通しをもち筋道を立てて、考えることが必要になる。
 - ・考える能力と表現する能力は、互いに補完し合う関係である。
(「考えながら表現する」「表現しながら考える」)
 - ・児童が具体物を用いたり、言葉、数、式、図、表、グラフなどを用いたりして、自分の考えたことを表現したり説明したりする。
- 副主題の捉え … 「算数科における言語活動」とは、
 - ・算数科における言語とは言葉だけではなく、数、式、図、表、グラフといった数学的な表現のすべてである。
 - ・思考力、判断力、表現力等を育成するため、数、式、図、表、グラフを用いて考えたり、説明したり、互いに自分の考えを表現し合ったりするなどの学習活動を積極的に取り入れるようにする。

(3) 具体的な方策の設定

研究主題に迫るためにどのような方策で取り組むのか、具体的な方策を立てていきます。ここでも児童生徒の実態をよく考慮し、どのように研修を通して改善していきたいのか、また、そのためにはどのような方策を立てる必要があるのか、考えていきます。その際、次のような視点で幅広く考えることが大切です。

- ア 授業改善の視点
- イ 学級経営などの日常的な取組の改善の視点
- ウ 環境整備などの視点
- エ 研修組織の在り方などの視点

ファシリテーター ここでは、これらの視点に合わせて、どのような取組が必要なのか、教職員からの意見をまとめて、ファシリテーターは案を提示していきます。具体的な方策として重点教科等を設定した場合などは、授業改善の視点で、どのようなことが必要なのか設定していくことになります。また、授業改善の視点とその他の視点とを関連付けていくことも大切です。

「授業改善の視点をどのようにつくっていくのか」

研究主題やねらいに基づいて、具体的な方策を設定する際に中心になるのが、授業改善の視点です。授業の「何をどのような視点で、具体的に改善していくのか」が特に重要です。授業には、様々な要素が含まれますが、その中心は活動です。「どんな活動を通して単元や本時の目標に迫っていくのか」、その善し悪しによって児童生徒の理解に差が生まれてきます。特に、小・中学校では、基本的に児童生徒は活動を通して学んでいると言えます。「どんな活動を手立てとして仕組んでいくのか」その視点や方向性を設定しましょう。この部分が明確になることで、研修の方向性がはっきりとしてきます。また、活動の方向性が明確になることで、以下に挙げる部分も関連して変化していきます。

しかし、ここで気を付けなければならないのは、活動の手法を初めから限定しないことです。活動の方向性を設定するだけで、具体的な手法はその単元や本時の内容、目標に合わせて、より効果があるものを考えていきます。「〇〇カードの活用」「〇〇型話し合い」などと限定してしまうと、広がりのない研修になってしまったり、単元（題材）や本時に無理に当てはめてしまったりすることになり逆効果です。

「関連して変化していく授業の要素」

- ・教材教具
- ・学習課題
- ・場の設定
- ・まとめの在り方
- ・板書
- ・発問
- ・個に応じた指導
- ・評価

＜四つの視点に対応した方策の設定例＞

以下は，研究主題の具現化に向けて，具体的な方策を設定する場合の例です。

(例) 研究主題 「筋道を立てて考え，表現する児童の育成」
～算数科における言語活動の充実を通して～

四つの視点	具体的な方策
ア 授業改善としての視点	◇ねらいを明確にした授業づくりを行う。 ◇目標や内容に応じて，考えたり，説明したり，互いに自分の考えを表現し合ったりするなどの学習活動を工夫する。
イ 学級経営などの日常的な取組としての視点	◇学習習慣の定着を図るための日常的な取組を工夫する。
ウ 環境整備等の視点	◇家庭学習の充実を図るために家庭との連携を工夫する。 ◇学習に応じた学級環境づくりを工夫する。
エ 研修組織の在り方などの視点	◇研修推進委員会，各専門部などの研修組織が，互いに補完し合いながら機能していくように工夫する。

※授業改善としての視点に絞って研修を進めることが考えられますが，どこまで研修の対象としていくかによって，イ，ウ，エの視点に対応した方策を設定することになります。

(4) 研修計画の設定

次に具体的な研修計画を立てていきます。1年間を見通して校内研修を計画的に配置していくことが大切です。その中に、授業研究を中心とした研修とそれ以外の研修が、バランスよく配置されるよう配慮する必要があります。

ファシリテーター ここでは、学校の年間行事計画を考慮して、研修計画を位置付けていくことが求められます。そのためには、教務主任との連絡調整を十分に行い、無理のない校内研修計画を設定していきます。特に授業研究を中心とした研修を設定する場合は、学習指導案作成、学習指導案検討などの研修も計画の中に必ず位置付けていき、授業を公開する教師だけが学習指導案を作成するのではなく、指導案作成から授業研究までの一連の流れそのものが、研修となるように企画していきます。

「研修計画のチェックシート」

※自校の研究主題や研修計画等をこのチェックシートを基に見直してみましょう。

研究主題の設定	①	研究主題は、ア 学校教育目標、イ 児童生徒の実態、ウ 今日的な課題等を考慮して設定されているか。
	②	どんな能力を高めていきたいのか、どんな児童生徒を育てたいのかが見える「研究主題」になっているか。
	③	具体的な重点教科や何を通してその研究主題に迫っていくのかが分かる副題が設定されているか。
ねらいや目指す児童生徒の姿の設定	④	どのような児童生徒を目指していくのか、教職員全員が児童生徒の姿として共通理解できる言葉で、「ねらいや目指す児童生徒の姿」が整理され設定されているか。
具体的な方策の設定	⑤	研究主題の具現化に向けての方向性が分かる「具体的な方策」が設定されているか。
	⑥	授業改善の視点から、「具体的な方策」が設定されているか。
研修計画の設定	⑦	研究主題について共通に理解するための研修が年間の早い時期に位置付けられているか。
授業研究を中心とした研修の設定	⑧	授業研究が、計画的に研修計画に位置付けられているか。
	⑨	学習指導案の作成、学習指導案検討の研修が計画的に位置付けられているか。
研修を進める上で必要な組織体制づくり	⑩	教職員全体で研修を進めていくために、研修組織などに工夫が見られるか。

< 研修計画の例 >

校内研修計画

研究主題 分かる喜びを感じ、思考力・判断力・表現力を身に付けた生徒の育成
—学び合い、言語活動の工夫を通して—

1 主題設定の理由

学習指導要領改訂の基本的な考え方では、確かな学力を育成するためには、各教科等においての基礎的・基本的な知識・技能の習得と、それらを活用するための思考力・判断力・表現力その他の能力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うとし、その際、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣が確立するよう配慮しなければならないとしている。

本校は、昨年度、テーマ「基礎的・基本的な知識・技能を習得し、成就感を味わえる生徒の育成」のもと、各教科においての基礎・基本を明確にし、それらの習得のための工夫を取り入れた授業や学び合いを取り入れた授業を行ってきた。さらに、授業の相互参観、研究協議を重ねてきた。

本校の生徒は、生徒会活動や学校行事において生徒主体で活動することができ、表現力も豊かである。体育祭や茨野祭、創立50周年記念事業において十分にその力を発揮することができた。学習面においては、学力診断のためのテスト結果等から、教科や教科の領域によってやや違いはあるが、県平均レベルかやや上回るレベルである。基礎的・基本的な知識・技能をほぼ身に付け、思考力・判断力を要する問題でも力を発揮することができている。しかし、個人差が見られ、思考の問題の正答率が低かったり、記述式の無答率が高かったりする傾向も見られた。授業では、学習に素直に落ち着いて取り組むことができる。しかし、自分の考えを表現したり、話し合いで考えを深めたりすることに苦手意識を感じている生徒が見られ、学習面においては生徒の主体性が十分に発揮できていないと言えない。

これらから、本校の教育目標の一つ「自ら学ぶ意欲、思考力・判断力・表現力を身に付けた生徒」を目指し、生徒が共に学び合う中で、主体的に学ぶ力をつけさせることが大切であると考えた。学び合うことで一人一人の生徒に「わかった」「できた」「そうだったのか」という分かる喜びを味わわせたい。分かる喜びは、学ぶ楽しさ、学ぶ意欲へとつながると捉えた。また、習得した知識や技能を活用する学習活動を通して、言語に関する能力を高める。すなわち言語活動を充実させることで、思考力・判断力・表現力が身に付けられるものと捉えた。

そこで、学び合う授業、言語活動を工夫した授業を通して、分かる喜びを感じ、思考力・判断力・表現力を身に付けた生徒を育成したいと考え、本主題を設定した。

2 研究のねらい

各教科における、学び合いや言語活動を工夫した授業を通して、生徒が関わり合って分かる喜びを感じ、思考力・判断力・表現力を身に付けることができる指導の在り方を究明する。

3 研究の仮説

- (1) 各教科において、学習課題や形態を工夫し、学び合うことで、生徒は課題解決の喜びを感じることができるだろう。
- (2) 各教科において、言語活動を工夫した授業を展開することで、関わり合いを生み、思考力・判断力・表現力が身に付くであろう。
- (3) 授業の相互参観や研究協議を通して、生徒の姿や学びの成立について話し合いをすれば、自分の授業を見つめ直すことができ、教師の授業力が向上するだろう。

4 基本的な考え

- (1) 分かる喜びとは
「わからなかったところがわかった」「自分の力でできた」「そうだったのか」と自分の進歩や達成感を感じ、さらに学習への意欲が高まっていく姿を目指している。
- (2) 思考力・判断力・表現力、それらの力を身に付ける（育む）とは
○ 習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用し、課題を解決するために必要な力と捉える。
○ 思考力・判断力・表現力を育む観点から、基礎的・基本的な知識・技能の習得と各教科の知識・技能を活用する学習活動の工夫を重視する。そして、これらの学習活動の基盤となるのが、言語に関する能力であり、各教科等において言語活動を充実することが必要であると捉える。

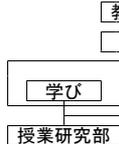
(3) 学び合いとは

- ア 自分の考えをしっかりと持ち
- イ 友達と思いや考えを理解し
- ウ 自分の考えを広げたり深め
- エ 分からなかったところが解

5 研究の内容

- (1) 言語活動に重点をおいた授業
ア 全職員での共通理解
イ 各教科における取り組み
① 各教科が目指す「思考力」
② 単元・領域における効果
③ 言語活動を工夫した学習
・一人一人が理解できる
・発表の場の工夫
- (2) よりよく学び合うための授業
ア 学習課題・形態・発問の工夫
イ 評価の工夫…生徒にも評価
- (3) 基礎的・基本的な知識・技能
ア 年間指導計画の検討
イ 「一中Study NAVI」、
「D」
- (4) 教職員の学び合い・高め合い
ア 授業の相互参観
イ 研究協議の工夫

6 研究組織



7 年間研究計画

月	研究内容	
4	全体計画立案	
5	学習指導要領の評価規準の研究の共通理解、全国学習教科部員研修（言語活動の洗い出し等）	
6	教科部員研修（評価の共通理解）、授業研究・研究協議	管理訪問（27日）
7	授業研究・研究協議、教科部員研修（授業の構想）	
8	教科部員研修（全国学習学力調査の分析、学習指導案の検討）	
9	授業研究・研究協議、教科部員研修	所・課長訪問（26日）
10	授業研究・研究協議、教科部員研修	
11	授業研究の反省を踏まえての取組（公開授業）	市計画訪問（21日）
12	教科部員研修（研究のまとめ）、授業研究・研究協議	
1	研究のまとめ 校内授業研究	
2	次年度の研究構想 校内授業研究	
3	次年度の研究構想	

(5) 授業研究を中心とした研修の設定

授業改善を主たる目的として、研究主題を設定した場合、おのずと授業研究を中心とした研修が必要となってきます。互いに授業を見合うことで授業の中での課題を見出し、方策として設定した具体的な手立てが、どのくらい有効であったのか、検証することができます。その場合、次の5点に配慮する必要があります。

- ア 具体的な方策を具現化した学習指導案をどのように作成していくのか
- イ 公開授業をどのように設定するのか
- ウ 公開授業をどのような視点で参観していくのか
- エ 授業の検証をどのように行うのか
- オ 授業後の研修（研究協議）をどのように行うのか

これらを設定するに当たり、外部から講師を招聘することも考えられます。また、校内研修の実践プログラム（p. 32～）を、積極的に活用してください。

ファシリテーター ここでは、より積極的なファシリテーターとしての役割が、求められます。特に重要なことは以下の6点です。

- (ア) 研修推進委員会など、校内研修を推進する協働体制を形成する。教科部会などに分かれて研修する際には、各推進委員がそれぞれにファシリテーターとして、機能するようにする。
- (イ) 学習指導案作成や検討において、多様で柔軟なアイデアが出るような場の設定や手立てを用意する。
- (ウ) 学習指導案作成においては、研究主題や方策に基づく、最も有効だと考える具体的な手立てを検討していけるようにする。
- (エ) 授業研究後の協議では、その具体的な手立てがどのように有効であったのか、協議の柱として検証する。
- (オ) 自由な発言ができる雰囲気を誘導し、同僚性を発揮できるようにする。
- (カ) 教育研修センター等の外部との連携を図る場合は、その内容等について、連絡調整を行う。

このように授業研究を中心とした校内研修を運営する際にも、教職員の意欲を高め、協働的な活動となるように支援し、より充実した研修とするために、その研修の内容に応じたファシリテーターの役割が求められます。それらについては、実践編の中で紹介します。

「学習指導案検討をどのように行うのか」

充実した授業研究を行うためには、学習指導案作成の段階から、授業者だけでなく、複数の教職員が協働的に関わっていくことが大切です。目標に迫るためにどのような具体的な「手立て」が有効なのか工夫をしていくことで、授業がよりよいものへと改善されていきます。この「手立て」を検討していくことが、学習指導案検討の中心になります。指導案検討を「ワークショップ形式」で実施し、校内研修として位置付けていくことも可能です。全員で学習指導案検討ができない場合は、教科部会や研究推進委員会などの少人数で検討していくことも考えられます。

また、学習指導案の中に「手立て」が分かるように位置付けることも大切です。そうすることで、本時の目標や「手立て」が、どのように有効だったのか、授業を参観する視点が明らかになり、研究協議の視点も共有することができるようになります。おのずと授業後の研究協議は、児童生徒がどのように活動していたか、その視点を軸に有効性を検証していくこととなります。

「学習指導案検討の際のポイント」

- ① 研究主題に迫る「具体的な方策」の中の「授業改善の視点」から、授業研究を行う単元（題材）や本時の目標が設定されているか。
- ② 目標に迫るための具体的な「手立て」が設定されているか。
- ③ 「手立て」が十分に機能するように本時は展開されているか。

「授業をどのような視点で参観するのか」

前述したように本時の「手立て」が、どのように有効であったのか、児童生徒の様子を参観していくことが大切です。その際には、学級全体の様子と個々の児童生徒の様子と二つの見方で、見取っていくことが大切です。参観者が個々に、注目する児童生徒を決めていくことも可能ですが、役割を分担し、何人かの児童生徒を抽出して記録を取り、研究協議の際の資料として活用することもできます。

また、研修推進委員会等で学習指導案検討をした場合、学習指導案作成の際に特に検討を必要とした点や、授業を参観する際に注目してほしい点を、ファシリテーター役が簡単にまとめて、全員に参観前に伝えておくことが、授業研究をより有意義なものにしていくためには必要です。

「授業を参観する際のポイント」

- ① 「手立て」が、どのように有効だったか、児童生徒の姿を記録する。
- ② ファシリテーターが、参観する視点を参観者に明示する。

(6) 研修成果の検証

研究主題に基づき、ねらいや目指す児童生徒の姿を設定した場合、研修を進めていく過程で、どのように目指す児童生徒の姿に迫ることができたか、検証する必要があります。客観的な方法で検証することで、効果が見られたのはどんな手立てだったのか、より効果を高めるためには更にどんな手立てが必要なのか、教職員全員で考えることができます。

ファシリテーター ここでは、どのような方法で検証を行うのか、その案を提示します。その際、それぞれの長所や短所も含めて提示することが大切です。なぜなら、完全な客観的な検証方法は存在しないからです。また、児童生徒の変容は、すぐ現れるものと、時間を経て徐々に現れるものがあることは、周知のとおりです。それらをよく理解した上で、手立てが有効であったかを検証していくことが大切です。くれぐれも早急な検証結果を求めることがないように、配慮することが重要です。

例えば、授業研究を基に検証する場合は、授業記録を取ったり、抽出児童生徒を設定して授業の様子を記録したりするなどの役割分担をしていき、協働体制をつくります。また、児童生徒の実態調査を年度初めと年度末に行うことで、全体的な変容の傾向を検証することもできます。

「授業研究の検証をどのように行うのか」

授業研究の検証を進めていく際には、以下のような点を明確にし、実施していきます。

- ア どの場面で検証するのか
- イ どのような観点で検証するのか
- ウ どのような方法で検証するのか
- エ 検証結果をどのように解釈するのか

このとき必要なことは、授業実践前のデータを用意しておくことです。実践後の変化を実践前の児童生徒の姿と比較することで、検証は、より確かなものになります。

そして、授業の中で、どのような児童生徒の姿が見られたのか、目指す児童生徒の姿や付けたい能力に照らし合わせて、検証していきます。例えば「思考力、判断力、表現力」に関わる内容を設定しているのであれば、授業の中で児童生徒がどのように考え、判断し表現しているのかを記録して検証していきます。この場合は、授業中の発表だけでは十分に判断できないため、児童生徒のノートなどの記述を中心に行います。

また、目指す児童生徒の姿や付けたい能力を段階的に設定しておくことで、それぞれの児童生徒が、目指している姿のどこまで達することができたか判断することができます。

「授業研究の検証方法」

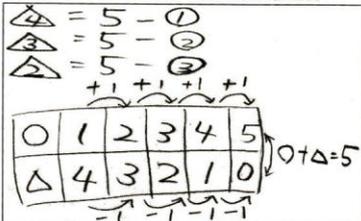
それぞれの授業研究での「手立て」の有効性を検証し、その成果をまとめる場合、複数の方法を組み合わせることで、その検証をより確かなものに行うことができます。

- (ア) 授業における「手立て」の有効性についての見取り
- (イ) 抽出した児童生徒の変化をたどることからの見取り
- (ウ) 全員のノート等の記述を、視点を設けて整理
- (エ) アンケート等による実態調査

<検証の例>

児童生徒のノートなどの記述から検証する場合の例

資料1 $\Delta=5-\bigcirc$ について表に表した記述例



資料2 $\Delta=5-\bigcirc$ について式を並べた記述例

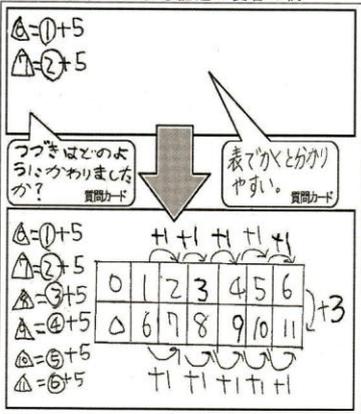
5-○=Δ 〇の数が増えればなるほど
 5-○=Δ Δの数は小さくなっていく
 5-○=Δ
 5-○=Δ

資料3 $\Delta=100\times\bigcirc$ について式を並べた記述例

$$\begin{array}{r} 100 \\ \times 1 \\ \hline 100 \end{array} \quad \begin{array}{r} 100 \\ \times 2 \\ \hline 200 \end{array} \quad \begin{array}{r} 100 \\ \times 3 \\ \hline 300 \end{array} \quad \begin{array}{r} 100 \\ \times 4 \\ \hline 400 \end{array} \quad \begin{array}{r} 100 \\ \times 5 \\ \hline 500 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} 100 \\ \times 6 \\ \hline 600 \end{array} \quad \begin{array}{r} 100 \\ \times 7 \\ \hline 700 \end{array} \quad \begin{array}{r} 100 \\ \times 8 \\ \hline 800 \end{array} \quad \begin{array}{r} 100 \\ \times 9 \\ \hline 900 \end{array} \quad \begin{array}{r} 100 \\ \times 10 \\ \hline 1000 \end{array}$$

資料4 見直しによる記述の変容の例



目指す児童生徒の姿を段階的に設定し、検証する場合の例

表3 目指す児童の姿に関する検証の視点

- ① 式の中の二つの数量に対応する値の組を幾つも求め、順序よく表などに表すことができる。
 A: ○とΔの組を幾つも求め、表などに表すことができた。
 B: ○とΔの組を求めたが、表などに表すことができなかった。
 C: ○とΔの組を求めることができなかった。
- ② 変化の特徴を、式や言葉などで表すことができる。
 A: ○とΔの変わり方を言葉や式などで表すことができた。
 B: Δの変わり方だけを言葉や式などで表すことができた。
 C: ○とΔのどちらの変わり方も表すことができなかった。
- ③ 式から具体的な場面を選んだ理由について、自分の考えを表や言葉と関連付けて説明することができる。
 A: 式から場面を選んだ理由について、○とΔの対応や変化の仕方の特徴を使って、表などと関連付けて説明できた。
 B: 式から場面を選んだ理由について、○とΔの組を使って、説明できた。
 C: 式から場面を選んだ理由について、説明できなかった。

児童の姿 番号	目指す児童の姿の①			目指す児童の姿の②			目指す児童の姿の③		
	C	B	A	C	B	A	C	B	A
1									
2									
3									
4									
5									
6									
7									
8									
9									
10									
11									
12									
13									
14									
15									
16									
17									
18									

□: 事前 ⊙: 検証授業の説明の見直し後 ●: 事後
 A: 抽出児童A B: 抽出児童B C: 抽出児童C

図7 数量の関係を考察する能力に関する変容

児童生徒の記述を取り上げていき、記述の内容を読み取っていきます。

実践前の様子と比較していくことで、児童生徒の変容を検証していきます。

(7) 研修成果のまとめ

研究主題を設定した研修では、1年間の研修の成果を整理しまとめることが大切です。そうすることで、これまでの研修によって得られた成果を教職員全員で共有したり、他に発信したりすることができます。また、研修の成果を研究紀要としてまとめることで全教職員が研修の成果を共有することができます。研究発表として公開する場合がありますが、この場合幅広く研修の成果を発信するだけでなく、授業公開後の協議を工夫し、充実させていくことで、さらに研修を深めることができます

ファシリテーター ここでは、研修の成果を教職員全員が、十分に共有できるようにしていきます。まとめ方を工夫し、教職員全員が何らかの形で、その成果を記述することができるようにすることで、教職員一人一人が達成感や充実感をそれぞれがもてるようにするとともに、研修で見えてきた課題を明らかにし、次年度以降に引き継いでいきます。

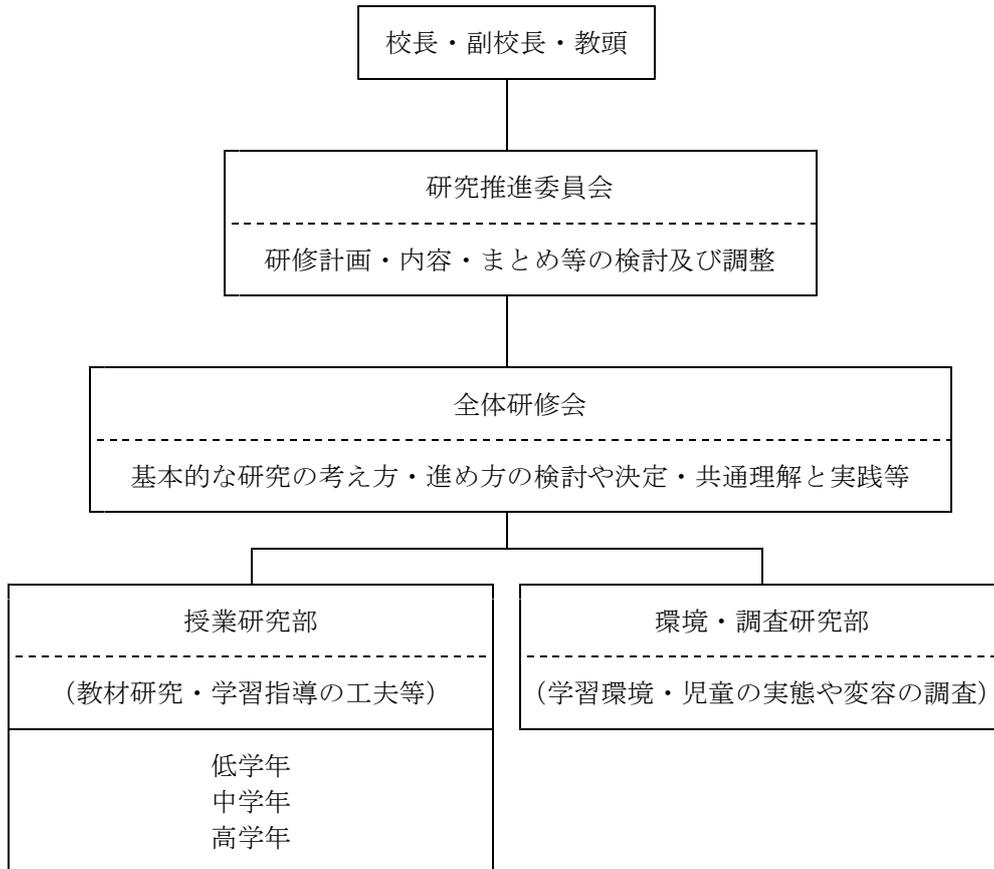
(8) 研修を進める上で必要な組織体制づくり

このように研究主題を設定して、研修を進める場合、研究主題の内容に合わせた研修組織をつくる必要があります。ある程度の規模の学校では、研究主任を中心とした研修推進委員会など研修の中核となる集団をつくり、ここまで述べてきた視点（ステップ）について検討することが有効です。

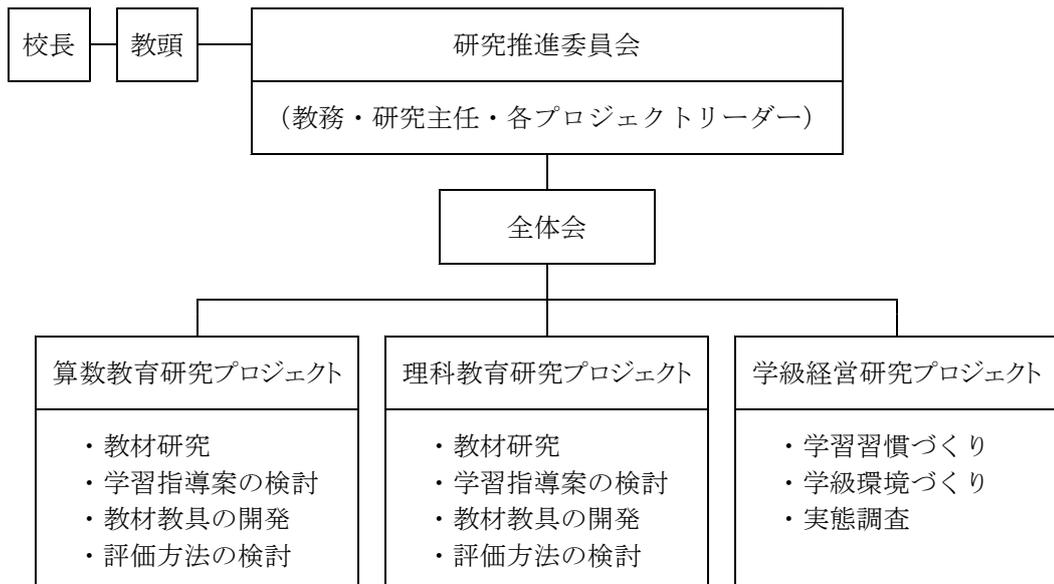
さらに具体的な手立てを作成したり、企画・運営したりしていくために、いくつかの専門部会を設定することも可能です。複数の重点教科を設定した場合は、それぞれの教科の専門部会に教職員が分かれて属するなどの工夫も必要になります。また、学級経営などの日常的な取組や環境整備などの視点に合わせた専門部会も設けることで、授業改善だけではなく、学校の教育活動全体を通じた取組に広げることが可能になります。

このように研究主題を設定して取り組む際には、その過程で教職員全員が組織として機能していくことが求められ、学校の組織力が高められていきます。また、研修を深めていくことで、おのずと教職員一人一人の資質能力も高められていきます。

< 研修組織の例 1 >



< 研修組織の例 2 >



4 校内研修の実態（アンケート結果より）

現在、各学校で取り組まれている校内研修の状況を把握するとともに、課題を明らかにするために、無作為抽出した公立学校の管理職を対象に、アンケート調査を実施（平成24年9月）しました。

校内研修の実施状況等、「学校の組織力を高める」ための方策等について、次のような実態を捉えることができました。

抽出学校（実施対象校数）

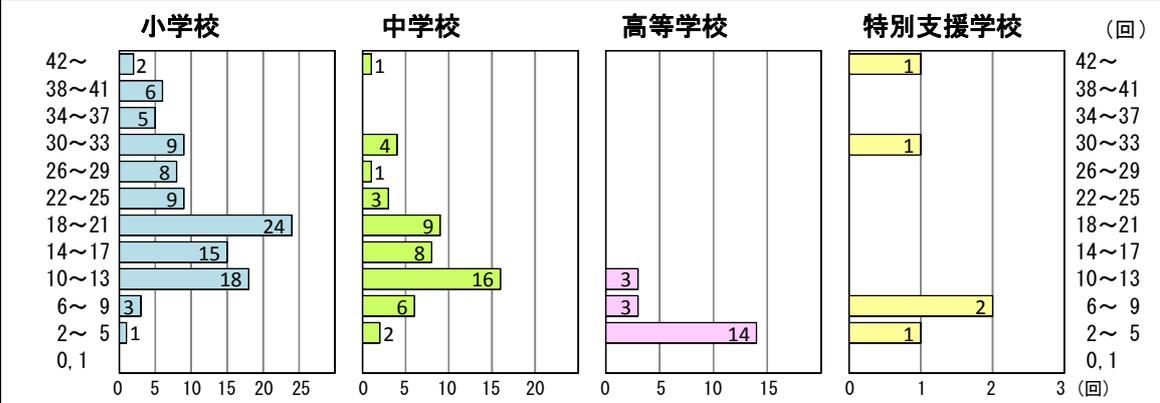
校種	校数	県内学校数(構成比)
小学校	100	549 (18.2%)
中学校	50	231 (21.6%)
高等学校	20	99 (20.2%)
特別支援学校	5	21 (23.8%)
合計	175	900

[平成24年5月1日現在（中等教育学校を除く）]

(1) 校内研修の実施状況等

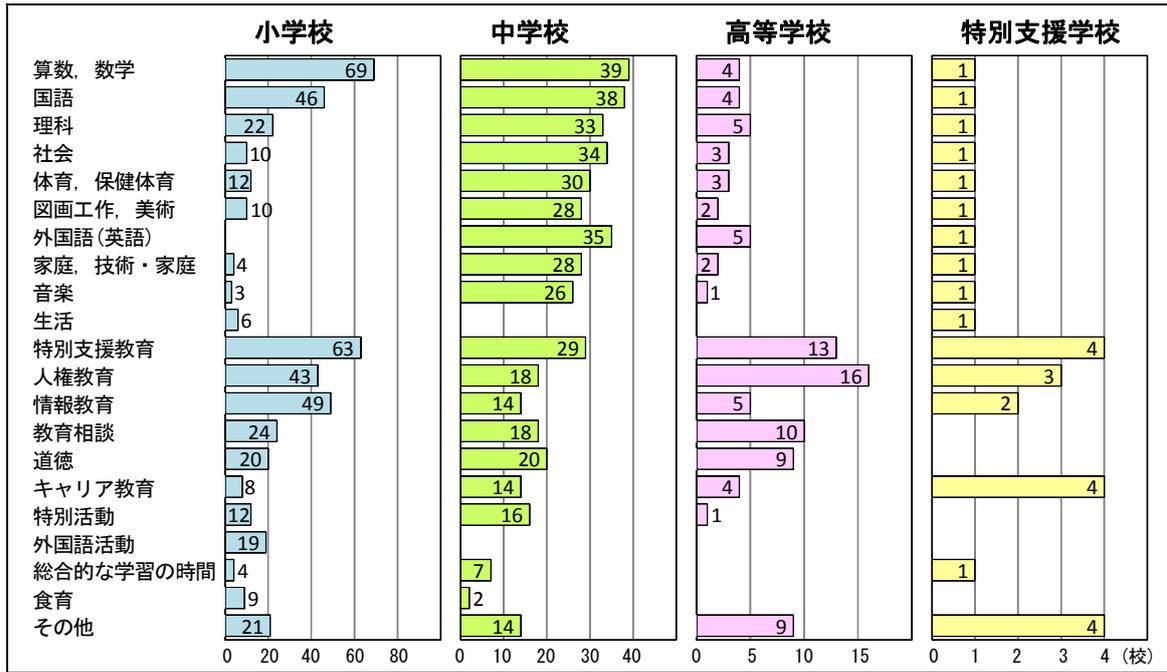
① 昨年度、実施した「校内研修」の回数（日数）と頻度

- ◆小学校◆平均約21回，隔週か毎月の実施が多い。
- ◆中学校◆平均約16回，毎月か不定期の実施が多い。
- ◆高等学校◆平均約5回，不定期の実施が多い。
- ◆特別支援学校◆毎週のように頻繁に実施と不定期に年間数回実施に分かれる。



② 昨年度、実施した「校内研修」の内容（分野）【複数回答】

- ◆小学校◆教科では、算数、数学、国語の実施が多く、特別支援教育、情報教育、人権教育は、それぞれ約半数の学校で実施されている。その他、小中一貫教育、生徒指導が多く実施されている。
- ◆中学校◆教科の校内研修の実施頻度が高く、約50%～80%の割合で実施され、特別支援教育は、半数以上の学校で実施されている。その他、生徒指導、学力向上に関することが実施されている。
- ◆高等学校◆人権教育、特別支援教育、教育相談、道徳などが多く実施されている。
- ◆特別支援学校◆キャリア教育が多く実施されている。



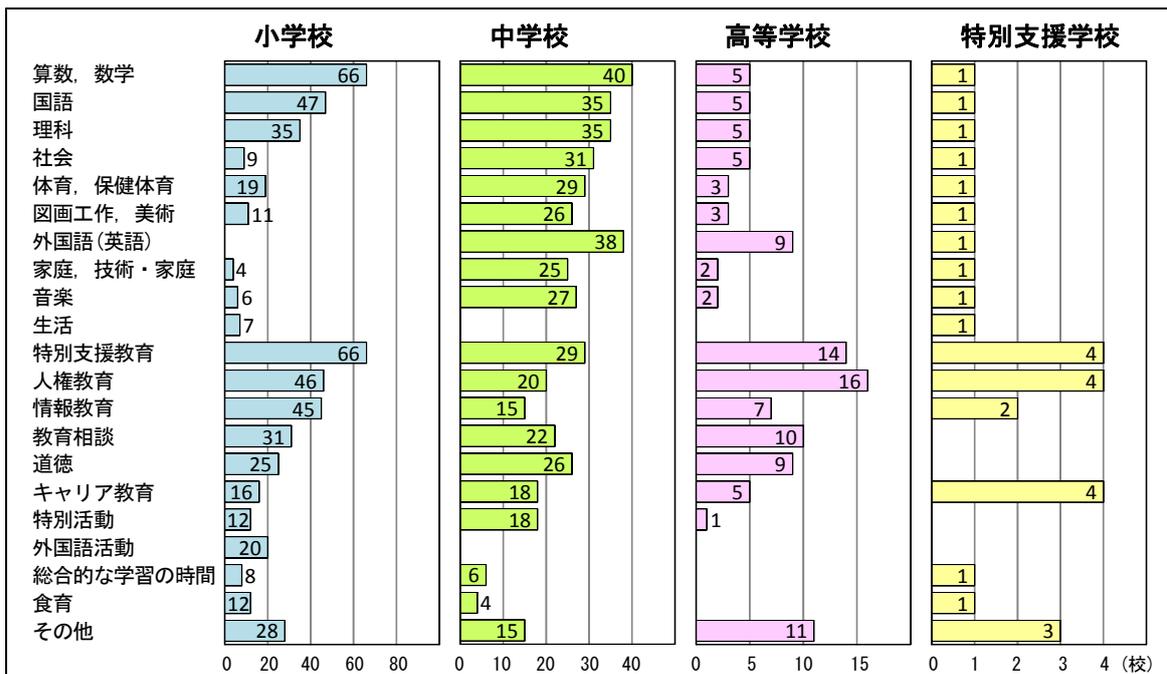
③ 今後（今年度も含む），実施を考えている「校内研修」の内容（分野）【複数回答】

◆昨年度の実施状況の回答②と比較◆

◇前年度と同じ内容（分野）での実施と回答した学校が41校（約23.4%）あり，109校（約62.3%）が1～4，残り25校（14.3%）が5以上の内容（分野）を変更して，実施を考えている。

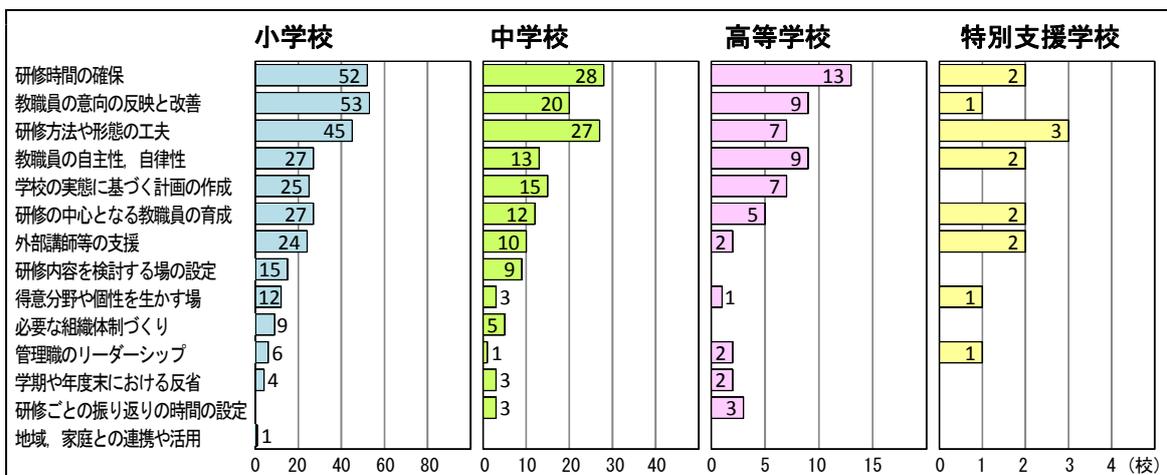
◇今後の実施予定で，増加が目立ったのは，理科（小+13），キャリア教育（小+8，中+4），道徳（小+5，中+6），教育相談（小+7，中+4），外国語（英語）（高+4）などである。

◇その他の内容で，健康安全，防災，危機管理等が新たに加わっている。



④ 「校内研修」を充実させるために、特に重視したいと考えている内容

- ◇約半数以上が「研修時間の確保」を選択しており、「教職員の意向の反映と改善」,
「研修方法や形態の工夫」も半数近くの学校が選択しており、現場での課題が明らか
になったといえる。
- ◇「教職員の自主性、自律性」,「学校の実態に基づく計画の作成」,「研修の中心となる
教職員の育成」も多く選択されており、教職員の資質能力の向上も課題である。
- ◇実践している取組として、「授業」に関連しての授業参観,授業研究(小26,中20,
高1,特3件),外部講師(教育研修センター校内研修支援など)の活用が挙げられ
ている。
- ◇ワークショップ型の研修を積極的に取り入れているなど、限られた条件の中で、校内
研修を充実させるための工夫も見られる。



(2) 「学校の組織力を高める」ための方策等

① 学校の組織力を高めるための「校内研修」の必要性について、具体的な理由

- ◇教職員一人一人の資質能力の向上（スキルアップ）のための「校内研修」が「学校の組織力を高める」ことに結び付くことになる。（同意見多数）
- ◇職員が一体となって研修に取り組むことで、組織力の向上を図る。
- ◇人間関係づくりとともに意図的な研修で、ベテランを生かし、若手を育てる。
- ◇授業力の向上が児童生徒の学力向上，社会力の向上につながる。
- ◇一人一人の教師力を高めるための校内研修は欠かせない。
- ◇教職員一人一人に学校運営に参画する意識をもたせる。
- ◇研修意欲の高揚は，組織マネジメントを実践していく上で重要である。
- ◇組織的・計画的に研修に取り組むことが，ミドルリーダーの育成にもつながる。
- ◇相互のコミュニケーションが促進され，協働の意欲が高まる。

② 学校の組織力を高めるために実践している取組

- ◇教員評価を活用し，課題を明確にして取り組む。
- ◇ミドルリーダーを育成する。
- ◇積極的に外部講師等を活用する。
- ◇学校経営のボトムアップ化を推進する。
- ◇何でも話し合える，相談できる教職員間の雰囲気づくりに努める。
- ◇学校の課題の共有とその解決に向けての方策の共通理解を図る。
- ◇校内研修で職員同士の連携を図り，職員の専門性や経験を生かす。
- ◇ランドデザインを基に，学校組織を生かし，計画的に学校評価に取り組む。
- ◇計画的な相互授業参観を実施する。
- ◇教職員のコミュニケーションを活性化し，関係性を向上させる。
- ◇教科等の主任に校内研修内容の企画立案させることで，自主性，自律性を育てる。
- ◇運営機構における明確な分担と協働体制を構築する。
- ◇若手教員とベテラン教員が融合し，課題に対処できる学校の雰囲気をつくる。
- ◇教頭と主任・主事等との連携による教職員への指導・助言体制を確立する。
- ◇学校課題に関して中核教員と定期的に意見交換する場を設定する。

第2章 実践編

1 校内研修の手法例

(1) 研修を行うに当たって

研修においては、一人一人の教員が主体的に研修に取り組み、活発な意見交換を通し、職員全体に共通理解や合意形成を図ることが重要です。組織として課題に当たるという視点です。そのためには、職員間で、十分なコミュニケーションを図ることが必要です。ここでは、実際に研修で用いる研修手法等の例について説明します。これらの研修手法を活用し、教員一人一人が主体的に研修に取り組み、そして、全教職員で課題解決に当たる学校組織を構築してください。

(2) 研修の手法例

①ブレインストーミング

課題について気楽な雰囲気、自由に思いつきやアイデアを出し合い、そこから想像と連想を働かせて多くのアイデアを出し合う手法です。

固定観念に囚われないように、気楽で自由に意見が出しやすい雰囲気をつくるのが大切です。以下の点に注意することが必要です。

- ※出されたアイデアを批判しない。(批判厳禁)
- ※できるだけ多くのアイデアを出す。(質より量)
- ※突飛なアイデアでもよい。(自由奔放)
- ※他のアイデアに乗った発言でもよい。(相乗り歓迎)

実施に当たっては、司会者、記録係を決め、意見が活発にできるように机をコの字などにしてから始めてください。ファシリテーターは、話し合いが活発になるようにすると同時に的外れにならないように軌道修正することが大切です。

② ブレインライティング

右のようなシートに記入しながら行うブレインストーミングです。6人ぐらいで、グループを作り、紙にアイデアを書き込んだら、次の人にシートを回し、次々とアイデアを増やしていく手法です。前の書かれた意見から発想したアイデアや前の意見を合成したアイデアでもかまいません。前の人を書いたアイデアを見て、次の人がアイデアを出すので、短時間で多くの意見が集まります。作業は、時間（5分程度）を区切って行ってください。

研修テーマ			
	アイデア1	アイデア2	アイデア3
1人目	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
2人目	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
3人目	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
4人目	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
5人目	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
6人目	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

ブレインライティングシート

◆実施例◆

- ステップ1 配布されたシートに研究協議題を記入する。
- ステップ2 シートの1段目の三つのマスにアイデアを一つずつ記入する。
- ステップ3 時間が経過したら、左の人にシートを渡す（右の人からシートをもらう）。
- ステップ4 2段目の三つのマスに、1段目と同様にアイデアを記入する。
以下、同様に時間が経過したら、左の人にシートを渡す。
- ステップ5 出てきたアイデアに優先順位を付ける。

※この例では、6人のグループで、合計で18意見×6人分で104個の意見になります。

《プログラム **[食育] 食に関する指導の進め方** (p. 80) 》

③ マトリックス法

縦軸と横軸に異なる条件を設定し、クロスしたマスに縦軸と横軸の条件を組み合わせたアイデアを入れていく手法です。

条件を基に、あらかじめ決められたマスに強制的に考えるので、アイデアが出しやすく、視覚的にもテーマ全体を把握しやすいのが特徴です。

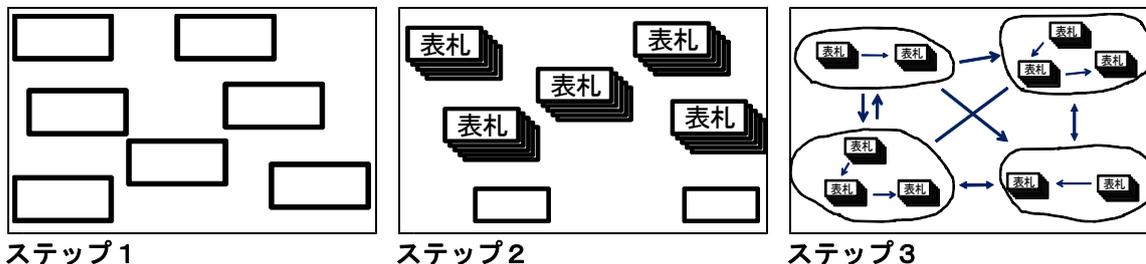
右は、授業研究を行うマトリックスの例です。授業研究用マトリックス条件がクロスしたマスに教師の指導のよかった点や板書の工夫の改善点を記載します。

	教師の指導	板書の工夫
よかった点	↓	
改善点		↓
助言		

授業研究用マトリックス

④ KJ法

KJ法は、文化人類学者の川喜田二郎氏が発案した収束思考の手法で、ブレインストーミングなどで得られた様々なデータを整理、分類、統合し、問題解決に結び付けていく手法です。KJ法は、キーワード収集、グルーピング、図解化、文章化の流れで進めて行きます。



◆実施例◆

ステップ1 キーワード収集
 ◇出されたアイデアや収集した情報をカード（付箋等）に記入する。
 ◇一枚につき一つのアイデアを記載する。
 ◇アイデアは、具体的に、簡潔に記載する。

ステップ2 グルーピング
 ◇共通するものが記載されたカードをまとめ、簡潔な言葉でタイトルを付けます。その後、中グループ、大グループとグループ化していく。

ステップ3 図解化
 ◇グループ間の関係（相互、対立、原因と結果）が分かるように関連を矢印で結んで可視化する。

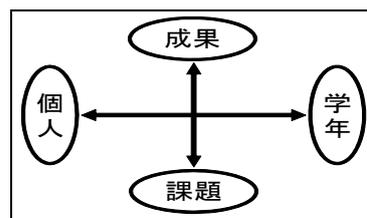
ステップ4 文章化
 ◇作業を通して分かったことを文章化し、まとめる。

《プログラム **【外国語(英語)】4技能の総合的な育成を目指した英語科の授業づくり** (p. 60)》

《プログラム **【特別支援教育】特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業づくり** (p. 100)》

⑤ 概念化シート

二対となる要素の縦軸と横軸の座標軸を設定し、ワークシートを4事象に分割し、アイデアを貼り、関連付け、まとめていくことで、アイデアを概念化し、問題解決に結び付けていく手法です。



◆実施例◆

あらかじめ、ブレインストーミング等の手法を用い、多くのアイデアを出し合い、付箋に記載してから実施する。

ステップ1 ワークシートの二対となる要素の縦と横の座標軸を設定し、4事象に分ける。

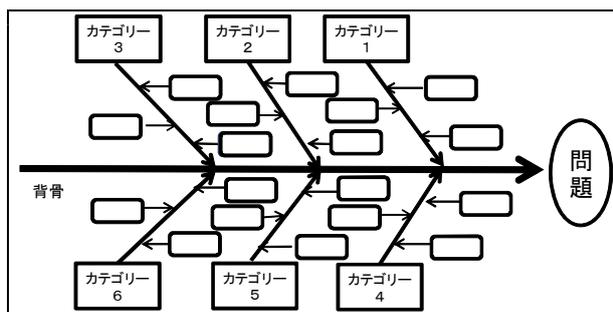
ステップ2 4事象にそれぞれ該当すると思われる内容の付箋を貼っていく。

ステップ3 まとまりごとに小見出しを付け、関連付けていく。

ステップ4 作業で得られた成果と課題を共有し、今後の方向性を探る。

⑥ 特性要因分析図（フィッシュボーン）

特性要因分析図とは、問題にどのような原因があるかを図解化を通し、詳しく分析、検討して、解決の方向性を探る手法です。図が魚の骨に似ているところから、フィッシュボーン（魚の骨）とも呼ばれます。



◆実施例◆

- ステップ1 大骨を記載する。
- ステップ2 分かり易い言葉で大骨の先に問題を記載する。
- ステップ3 付箋を用いてブレインストーミング等を行い、出たアイデアを中骨や小骨に位置付ける。
- ステップ4 似た内容をまとめ、簡潔に言い表したカテゴリー名を中骨の先に記載する。
- ステップ5 図から問題の要因を洗い出していきます。

⑦ ウェビング

ある一つのキーワードから、参加者が思い付く言葉を書き出し、くもの巣のように次々と思考を広げる手法です。参加者が連想ゲームのように、どんどんアイデアを広げていく手法です。

《プログラム **【総合的な学習の時間】地域の特色を生かしたカリキュラムの開発** (p. 68) 》

⑧ インシデントプロセス法

事例提供者が悩んでいることや解決したいことなどを提案し、参加者が質問を通して事例の概要を明らかにしながら、対応策を討議していく手法です。

◆実施例◆

- ステップ1 情報の提供
◇事例提供者は、事例の概要を簡潔（年齢、性別、特徴的な行動など）に発表する。
- ステップ2 事例提供者への質問
◇問題を解決する上で必要と思われることを事例提供者に質問する。
- ステップ3 個人での対応策検討
◇当事者になったつもりで、対応策を検討する。
- ステップ4 グループでの対応策検討
◇司会者、記録者を決め、グループで対応策を検討する。
- ステップ5 対応策の発表
◇グループで決めた対応策を発表する。
- ステップ6 事例提供者の感想
◇事例提供者は、指導の実際や感想について話す。

《プログラム **【特別支援教育】特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議の進め方** (p. 98) 》

⑨ 指導案拡大法

あらかじめ拡大コピーしておいた学習指導案の展開部分に付箋を貼りながら、検討を加え、授業の改善等を協議し、進めていく手法です。

◆実施例◆

- ステップ1 学習指導案の展開部分を拡大コピーする。
- ステップ2 学習指導案で気付いたことを付箋に記入する。
※一枚の付箋につき、一つのアイデアを記載する。
- ステップ3 記入した付箋を貼る。
- ステップ4 付箋を整理し、小見出しを付ける。
- ステップ5 小見出しの関係を分析し、課題を焦点化した上で達成手段を検討する。

《プログラム **【道徳】指導案拡大法による授業実践の振り返り** (p. 64) 》

⑩ ロールプレイング(役割演技法)

現実に近い場面を設定し、特定の役割を演じる疑似体験を通し、実際に起こった時に適切に対応できるようにするための手法です。一般的には次の手順で実施します。

◆実施例◆

- ステップ1 説明
◇進め方とねらい（相手の考えや感情の動きをつかむこと、傾聴と共感の重要等）を説明します。
- ステップ2 ウォーミングアップ
◇アイスブレイク（下段参照）等を行い、自由な雰囲気を始められる環境をつくります。
- ステップ3 役割の決定
◇通常三つの役割があります。
 - ・進行係＝ロールプレイング全体の進行を行います。
 - ・演技者＝登場人物を演技します（児童・生徒役と教師役など）。
 - ・観察者＝演技を観察します。
- ステップ4 ロールプレイング
◇役割分担にそって演技を行います。
- ステップ5 分析・討議
◇演技終了後、演技者はロールプレイングによってどのような気付きがあったかを話し、観察者は演技者に対するコメントを述べ、話し合いを通し、行ったロールプレイングについて評価します。

《プログラム **【教育相談】教師と子どもの望ましい人間関係づくり** (p. 92) 》

◎アイスブレイクとは

研修前の堅い雰囲気を和らげる活動です。初対面同士や立場が異なる人が集まると、初めは緊張から意見を言うことにためらいが生じます。そこでゲーム的な要素を取り入れ、緊張をほぐし、互いに意見が出し合えるような雰囲気づくりをすることです。

【他己紹介】

◇知らない人とペアを組んでもらい、3分から5分の時間でインタビューを行う。インタビュー終了後、その人を全体に紹介する。

【隣人の証言】

◇円を作り、両側の方に自己紹介。この作業を複数回行う。（5回程度）このとき、同じ人と両隣にならないように注意する。複数回の作業終了後、ファシリテーターの指示で、両隣の相手は誰か、記憶をたどりながら、1回目からの円を再現していく。

2 校内研修の実践プログラム

実践プログラムの項目と内容の見方	33
[国語] 言語活動を通してつくる国語科の授業づくり (小)	34
[国語] 各教科に広げる「書く力」を育てる研修 (中・高)	36
[社会] 身近な地域の観察や調査を取り入れた社会科の授業づくり (小)	38
[社会, 地理歴史・公民] 資料を選択し活用する学習活動を重視した授業づくり (中・高)	40
[算数] 説明し伝え合う活動の充実を図る算数科の授業づくり (小)	42
[数学] 数学的な思考力・表現力を育成する数学科の授業づくり (中・高)	44
[理科] 児童が主体的に問題解決する授業づくり (小)	46
[理科] 観察, 実験の結果を整理し考察する活動の充実を図る授業づくり (中・高)	48
[生活] 気付きの質を高める授業づくりー学校探検を通してー (小)	50
[音楽] 思いや意図をもって表現する音楽科授業づくり (小)	52
[図画工作] よさや面白さを感じ取る力を育てる図画工作科の授業づくり (小)	54
[家庭] 基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける家庭科の授業づくり (小)	56
[体育] 発達の段階を踏まえた体育科の授業づくり (小)	58
[外国語(英語)] 4技能の総合的な育成を目指した英語科の授業づくり (中・高)	60
[道徳] 協働作業による学習指導案作成 (小・中・高・特)	62
[道徳] 指導案拡大法による授業実践の振り返り (小・中・高・特)	64
[外国語活動] 外国語活動の「授業力」向上のための研修 (小)	66
[総合的な学習の時間] 地域の特色を生かしたカリキュラムの開発 (小・中・高)	68
[特別活動] 特別活動の評価の進め方 (小・中・特)	70
[特別活動] 目指す児童生徒像の具現化を図る特別活動 (小・中・高)	72
[情報教育] 茨城県教育情報ネットワークの利活用 <校務の情報化> (小・中・高・特)	74
[情報教育] 授業で使う I C T <授業における I C T活用> (小・中・高・特)	76
[情報教育] 教職員自身がおきたい「情報モラル教育」 (小・中・高・特)	78
[食育] 食に関する指導の進め方 (小・中)	80
[キャリア教育] キャリア教育の視点から自分の授業を捉え直す (小・中・高)	82
[キャリア教育] 自校ならではのキャリア教育の年間指導計画をデザインする (小・中・高・特)	84
[人権教育] 人権学習プログラムを利用した職員研修 (小・中・高・特)	86
[人権教育] 人権教育指導資料を利用した模擬授業 (小・中・高・特)	88
[教育相談] 子ども同士の望ましい人間関係づくり <構成的グループエンカウンター> (小・中・高)	90
[教育相談] 教師と子どもの望ましい人間関係づくり <「私」メッセージスキル>	92
[教育相談] 気になる子どもへの教育相談	94
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒の理解と対応	96
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議の進め方	98
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業づくり	100

実践プログラムの項目と内容の見方

[分野] 研修テーマ

プログラムの [分野] , 研修テーマ

小・中・高・特

該当する校種
(小学校・中学校・高等学校・特別支援学校)

第3学期 [1月] 約70分 ワークショップ 全教職員

実施時期 [月] , 実施時間, 研修運営の方法 (型) , 参加者

期待される効果

校内研修で実践プログラムを実施することによって、学校の組織力を高めるためにどう結び付けることができるかを踏まえ、どのようなことが期待でき、どのような効果が得られるのか？

ファシリテーターの事前準備

研修を企画・運営するファシリテーター（研究主任等）が、研修を実施する前の役割として、「誰に」、「何を」、「何のために」、「どのように」準備するのか？

【キャリア教育】キャリア教育の視点から自分の授業を捉え直す

期待される効果

- ◇キャリア教育の視点から授業を捉え直し、各教科の指導内容とキャリア教育で育成する「基礎的・汎用的能力」との関連を意識することで、今後の授業実践に向けて新たな視点を得ることができ、教職員一人一人の授業力の向上を図ることができる。
- ◇キャリア教育の視点で授業を捉え直すことで、教育課程の改善を促進することができ、組織全体が目指す方向を共有することができる。

研修の流れ

- 【ねらい】
- ◇各教科の指導内容と社会的・基礎的・汎用的能力との関連について、キャリア教育の視点から授業を捉え直すことができる。

【準備物】

- ◇「キャリア教育の手引き」、各教科指導案、付箋

【展開】

内容(時間)	指導案に添ったグループ
1 研修のねらいを確認する。(5分)	・共通し、進んでいく。
2 各自用意した指導案をキャリア教育の視点で見直す。同じグループ内(教科)で話し合いを行い、検討する。(30分)	・キャリア教育の視点から捉え直した内容を発表する。
3 各グループ(教科)からの報告、情報交換を行う。(15分)	・他教科について、目的や目標を共有する。
4 各教科における学習との関連付けについて、話し合いを行う。(15分)	
5 研修のまとめを行う。(5分)	

【評価】

- ◇キャリア教育の視点から学習指導案を見直し、協議することによって、学校全体でキャリア教育との関連を意識した授業づくりについて理解を深めることができる。

【自校化へのヒント】

- ◇若手教員がいる学校や専門的な教職員がいない場合は、あらかじめ検討する教科を絞って、研修内容に深まりをもたせる方法が考えられる。また、時間が十分にとれない場合は、上記の展開4の内容を別の機会で行うことが可能である。

自校化へのヒント

学校の実態に則した研修にするためのヒントは何か？
より深まりのある研修にするための応用の仕方何か？

研修の流れ

項立ては、【ねらい】
【準備物】
【展開】
【評価】

【展開】に、「ファシリテーターの役割」を明確に位置付け、どうやって効果的な研修にするのか？

ファシリテーターの事前準備

- ◇研究主任や教科主任と共に、話し合いのための小グループを、教科や学年及び経験年数等を考慮して編成する。
- ◇教職員に、校種ごとの「キャリア教育の手引き」の各教科等における取組（特に実践のポイント）について、理解を深めておくように周知する。また、各教科等のねらいや指導内容を踏まえた上で、キャリア教育との関連を図りたい単元や題材を考えておくようにし、各教科等のねらいや指導内容をキャリア教育の「基礎的・汎用的能力」の視点から整理しておくように周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇各教科を通したキャリア教育の実践についての基本的な考え方として、各教科の目標やねらいを踏まえ、キャリア教育の視点から各教科において育むことのできる能力を捉える。
- ◇学習指導案を捉え直す際は、進め方の検討や、どの能力をどの程度で育むかを明確にする。

研修のポイントと進め方

実践プログラムを活用して研修をスムーズに運営するに当たって、欠かせない視点や留意点は何か？
効果的な研修とするためのポイントは何か？

準備に実施すること

- ◇各学習指導案で検閲されたものを「基礎的・汎用的能力」のそれぞれの能力ごとに一覧にまとめる。このことが、教科を越えた単元や題材のつながり、関連付けを考えたためのヒントとなる。
- ◇学習指導案を基に検討した今回の研修を、できるだけ授業実践につなげていくようにする。

参考資料等

文部科学省・国立教育政策

事後に実施すること

振り返りも含め研修した内容を深め、事後につなげることで継続的、発展的な研修とするためには、どうすればよいか？
何を、どのように、事後に実施するべきか？

参考資料等

学習指導要領解説、参考文献、茨城県教育研修センターの資料など、プログラムを活用するための資料

期待される効果

◇実際に音読・朗読をすることにより、音読・朗読の指導のポイントや授業における進め方について具体的に研修でき、全教職員で共通理解を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇文章に音読・朗読記号を付けたり声に出して読み合ったりすることによって、自分の文章理解を振り返ったり深めたりできるようにするとともに、児童への音読・朗読指導に生かせるようにする。

【準備物】

◇芥川龍之介作「蜘蛛の糸」、音読・朗読記号が入った文章、「小学校学校学習指導要領解説 国語編」の音読に関する指導事項の抜粋、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」事例2、「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」国語3、コンピュータ、プロジェクター、参考となる朗読CDや映像等

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (10分) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">『蜘蛛の糸』を朗読し、文章の理解を深めて授業づくりに生かそう。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・声を出すウォーミングアップとして、初めは発声・発音指導を中心に行う。 ・『蜘蛛の糸』の本文と音読・朗読記号が入った見本となる文章を配付しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発声（母音）、発音（子音）、早口言葉の練習を行うことで、和やかな雰囲気づくりに努める。
2 例文を用いて、強調の音読練習を行う。 (10分) 例文 【 】を強めて ア【おかあさん】、聞いてんの。 イ【そんなに】、高いの。 ウ【分かっているでしょう。】 エ【だいきらい】	<ul style="list-style-type: none"> ・「高く強く読む」、「低く弱く読む」、「のばして読む」、「速く読む」、「間をあけて読む」など、実際に会話文を例に、強調する音読の仕方を理解できるようにする。 ・間をあけて強調するときは、文字や言葉を細かく区切って音読させるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝わり方の違いを参加者に実演してもらうことで、文章を解釈するために音声表現することが効果的であることを理解してもらうようにする。
3 『蜘蛛の糸』の本文に音読・朗読記号を付けながら、音声表現の仕方を考え、お互いに音読・朗読の発表をする。 (45分) 「強弱」、「高低」、「緩急」、「明暗」、「間」	<ul style="list-style-type: none"> ・いきなり声に出して読むのではなく、黙読や微音読しながら、イメージを膨らませ、音声表現の仕方を考えさせるようにする。(個人) ・音読・朗読を聞き合い、互いにどんなところがよかったのか感想を述べる。(グループ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・記号を付けるときには、「強弱」、「高低」、「緩急」、「明暗」、「間」の記号を指示しておくようにする。 ・グループ内の発表を聞きながら、良い例を全体の場で披露してもらうようにする。
4 研修のまとめを行う。 (10分) ○朗読CD等を聞く。 ○研修の感想を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・朗読CD等を聞きながら、参考になる点や自分の朗読と違って点などを発表することによって、自分の文章理解を深められるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朗読CD等を紹介し、自分の朗読と比較しながら聞くように助言する。

【評価】

- ◇文章に音読・朗読記号を付けたり声に出して読み合ったりすることによって、児童に音読・朗読の工夫させたいところを考えている。
- ◇〈ファシリテーター〉音読・朗読の指導のポイントや授業における進め方について、具体的に授業への活用を示唆することができる。

自校化へのヒント

- ◇音読・朗読指導に不安を感じている教職員がいる場合は、例文を用いて強調の音読練習（展開の活動2）を多く設定し、深まりのある研修にする。
- ◇実際に音読・朗読を行うことによって、日々の国語科の授業の中で具体的にどのような指導助言をすればよいか考えるきっかけとなる。さらに、日頃の授業の相互参観により、音読・朗読指導について助言したり児童の成長を確認したりすることができるようにする。

ファシリテーターの事前準備

- ◇「小学校学校学習指導要領解説 国語編」の音読に関する指導事項の系統性を把握するとともに、「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」国語3を参考に、学習活動や指導上の留意点を理解し、説明できるようにしておく。また、音読・朗読を聞き合うペアやグループ編成を考えておく。
- ◇国語科主任と共に、会話文を例にして、「高く強く読む」、「低く弱く読む」、「のびして読む」、「速く読む」、「間をあけて読む」など、語句の意味内容を強める方法を練習しておくようにする。また、教科書に掲載されている文学作品の一部を抜粋し、本文に音読・朗読記号が入った資料を作成する。
- ◇情報教育主任に、「蜘蛛の糸」の朗読CD等を視聴できるように依頼する。
- ◇教職員に、事前に研修全体の流れや資料を配付し、資料を基に、研修のねらいや流れについて周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇研修に入る前に、ウォーミングアップとして声のレッスンなどを取り入れ、和やかな雰囲気づくりに努める。
- ◇音読・朗読記号の入った文学作品を提示し、音読・朗読記号を付けるポイントや活動の意図について説明することで、研修の目的を明確にする。
- ◇研修の振り返りを大切にし、音読・朗読の効果について共有化できるようにする。

事後に実施すること

- ◇研修後にアンケート調査を行い、研修への満足度や理解度、意見などを把握し、今後の研修に役立てていく。

参考資料等

- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」平成23年5月
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】」平成23年11月

期待される効果

◇各教科で書くことが多い、課題作文、要約文、意見文という文章を書き、その書き方について具体的に研修を通し、言語活動について全教職員が共通理解を図ることで、それぞれの教科の中で文章を書く指導に役立てることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇実際に3種類の文章を書き、それぞれの文章の書き方を理解することで、各教科の中で文章を書く際の指導に生かせるようにする。

【準備物】

◇「学習指導要領解説 国語編」、「言語活動の充実に関する指導事例集」、各教科の教科書、原稿用紙

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 各教科で、どんな「書く活動」があるのかを探し発表する。（10分） 2 研修のねらいを確認する。（5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 3種類の文章を書き、指導のポイントを押さえよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> 文章を書く活動が、各教科の指導内容であることを確認して問題を共有し、説明、案内、報告などの具体的文章が書けるようになるための研修であることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 全教科共通の課題であることを確認した上で、前向きな雰囲気を始められるようにする。
3 参加者の希望に応じて、グループに分かれ、200字以内の作文を書く。（5分） グループA：課題作文 B：要約文 C：意見文	A：課題作文は、メモ等で書く内容を整理してから書き、テーマに対する具体例とそれに対する根拠が書かれていることを確認する。根拠は、妥当性も考慮する。 B：要約文は、要約に必要な箇所に線を引いてから書き、キーワードが全て入っていることと、文の整合性について確認する。 C：意見文は、メモ等で意見と引用について整理してから書き、課題を読み取って正しく引用できていることと、それに対する意見が書かれていることを確認する。意見は妥当性も考慮する。	<ul style="list-style-type: none"> 参加者がどのグループに入るか、あらかじめ希望を取っておく。 模範解答例を作っておく。 「言語活動の充実に関する指導事例集」に則った活動になるように、学習指導要領解説の言語活動例に目を通し、必要に応じてアドバイスができるようにしておく。
4 書き終えた後、グループごとに模範解答例を読み、それぞれの文の書き方と指導のポイントを理解する。（20分） A：「私の尊敬する人」、「私の夢」、「中学（高校）時代の思い出」などのテーマで課題作文を書く。 B：ファシリテーターが用意した文章の要約文を書く。 C：ファシリテーターが用意した新聞のコラムや簡単な記事を読んで意見文を書く。		
5 グループ内で、書いた文章を批評し合い、書かせるときの注意点について話し合い、まとめる。（20分）		
6 グループごとに、まとめた感想を、全体の前で報告し、全体協議で各グループの意見を共有する。（15分）	<ul style="list-style-type: none"> 今後、各教科の指導の具体的場面で、研修内容を生かすことを意識して、意見、感想を交換するようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 建設的で、明るい雰囲気終わるようにする。

【評価】

- ◇目的に応じた各教科における「書く力」を育てることについての理解を深めている。
- ◇〈ファシリテーター〉教職員が前向きに研修する雰囲気をつくることができる。

自校化へのヒント

- ◇書くことの指導は特定の教科だけで取り組むものでなく、学校全体で取り組むことによってより効果的な指導が可能になるという意識を、教職員間で共有するとよい。
- ◇生徒の実態をよく把握し、付けたい力を明確化するとともに、書くことの指導において、各教職員が自分の専門分野では何ができるのかを前もって考えてもらうとよい。

ファシリテーターの事前準備

- ◇作文を書くための原稿用紙と、グループ協議のための模範解答を準備し、スムーズな運営を心掛ける。さらに、グループごとに、(教科部員を中心に)リーダーを決め、リーダーには、文章の特質と指導のポイントを説明できるように依頼する。
- ◇研究主任、各科主任と共に、研修の計画(実施日の決定、役割分担等)を立てる。
- ◇教科主任に、自校の実態を踏まえ、「学習指導要領解説 国語編」、「言語活動の充実に関する指導事例集」に目を通すとともに、教職員の日頃の書くことにおける具体的な指導状況を理解し、適切な助言ができるように依頼する。

研修のポイントと進め方

- ◇説明、案内、報告といった、社会生活の中で役に立つ文章が書けるようになるための研修であることを確認することで、意思の統一を図ることができる。
- ◇グループ協議の場面では、各グループから出た意見を基にまとめをし、研修の成果を共有する。
- ◇全体協議の場面では、教科の指導の具体的場面で研修内容を生かすことを意識して意見交換をすることで、統一のとれた指導をすることができる。

事後に実施すること

- ◇各教科で書く活動を生かすようにするとともに、生徒の「書く力」の実態を把握し、年度末には、学校全体の課題を明らかにできるとよい。
- ◇教科部員は、各教科に「書く活動」があることを把握し、国語科としてどのような指導が必要か話し合う。また、「書く活動」を取り入れた言語活動を考え、授業づくりに役立てる。

参考資料等

- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 国語編」平成20年9月
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 国語編」平成22年6月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」平成23年5月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】」平成24年6月

期待される効果

- ◇地域の素材を教材化し、地域の施設を積極的に活用したり、地域の人々と直接関わって学んだりすることで、教職員間の地域に対する共通理解を図ることができる。
- ◇観察や調査・見学などの体験的な活動を、指導計画に適切に位置付けることで、効果的な学習指導について、共通理解を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇地域の実態に基づいた教材により、児童が興味・関心をもって社会科学習に取り組めるように、教師自身が各学校の置かれている地域の実態把握に努め、地域の社会的事象についての理解を深める。

【準備物等】

- ◇見学場所と学習指導要領（学習内容）との関連を整理した説明用資料、見学場所の資料、「市町村史」等の図書資料、メモ用紙
- ◇（必要に応じて）見学場所について説明していただける専門の方

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいと調査・見学の日程を確認する。（5分）		<ul style="list-style-type: none"> ・研修のねらいや意義を理解できるように説明する。
2 見学場所と社会科学習との関連についての説明を聞く。（15分）	<ul style="list-style-type: none"> ・説明や資料を基に、見学のポイントとなる事項を押さえておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見学場所に関連する学習の理解が深まるように、そのねらいと学習内容を説明する。
3 調査・見学を行う。（2時間程度）	<ul style="list-style-type: none"> ・写真等の記録を撮るなど、教材化するための素材を収集しておく。 ・積極的に質問し、見学場所についての理解を深めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家からより多くの情報が得られるように話しやすい雰囲気をつくる。
4 地域素材の教材化について話し合う。（30分） 【検討内容の例】 <ul style="list-style-type: none"> ・習得させたい知識の確認 ・教科書の内容との関連付け ・出会わせたい人物や社会的事象の検討 ・考えさせたい学習課題の作成 ・見学学習の際の注意点の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに基づいた教材化についての話し合いを、付箋を活用してまとめていくようにする。 ・不明な点については、資料や写真などの記録などで確認するとともに、後日専門家に問い合わせるなどして確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要としているテーマに絞って検討できるようにする。 ・具体的な検討ができるように、見学時に撮影した写真などを提示する。
5 研修のまとめを行う。（5分）	<ul style="list-style-type: none"> ・見学しての感想などを基に、ねらいが達成できたかを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研修のよかった点を具体的に挙げ、意欲を喚起する。

【評価】

- ◇地域の素材を生かし、児童が興味・関心をもって社会科学習に取り組めるように、教師自身が各学校の置かれている地域の実態把握に努め、地域の社会的事象に対する理解を深めることができる。
- ◇〈ファシリテーター〉地域の社会的事象への興味・関心を高め、その理解を深めるような機会を設定し、授業への活用を示唆することができる。

自校化へのヒント

- ◇第3・4学年における社会科学習においては、地域の教材を活用する内容が多いため、地域で生産に関わる農家や工場、販売に関わる商店やスーパーマーケット、消防署や警察、清掃工場等の公共施設、昔の人々の暮らしについて知ることのできる郷土資料館などを見学場所に選定するとよい。できれば、そこで働く専門家と接することができる機会を設定できると、実際の授業での連携が円滑になる。
- ◇第5・6学年においては、地域の特性を生かした指導計画を工夫することに意義があるとされているので、児童が我が国の産業や歴史、政治に目を向けるきっかけとなるような地域の教材について、見学の対象にするとよい。特に、歴史的事象に対する関心や理解を深める観点から、自分たちの住む県や市（町、村）が指定している重要文化財などを取り上げることも大切である。

ファシリテーターの事前準備

- ◇円滑に研修が行えるように、各見学場所の下見を行っておく。また、事前調査を行い、教職員の課題意識を把握しておく。
- ◇管理職に、研修の意義や内容、日程、見学場所との事前打合わせの状況等について説明する。
- ◇教職員に、見学場所と学習指導要領（学習内容）との関連を整理した説明用資料などを配布し、研修内容を周知する。
- ◇見学先の専門の方に依頼する際に、研修の趣旨、見学場所と社会科学習の関連について説明する。

研修のポイントと進め方

- ◇地域の社会的事象（人材や施設等）に対する理解を深めることは、社会科学習の充実につながるだけでなく、生徒指導や交通安全指導などにおいても有用である。
- ◇観察や調査・見学などの体験的な活動や、それに基づく表現活動の充実を図ることができる。

事後に実施すること

- ◇調査・見学したことを基にして、単元の指導計画を作成する。
- ◇授業で使用するための教材（拡大写真、インタビューのビデオ、ワークシート等）を作成する。

参考資料等

文部科学省「小学校学習指導要領解説 社会編」平成20年9月

随時 約70分(提案授業の時間を除く) 授業研究・ワークショップ 教科部員を中心に

●研究主題「思考力・判断力・表現力豊かな生徒の育成～言語活動の充実を通して～」の例

期待される効果

- ◇提案授業における言語活動についての研修を行うことで、観察や調査、収集した情報の処理や表現などの学習活動や内容についての理解を共有することができる。
- ◇具体的な授業場面における「思考・判断・表現」、「技能」を評価する場面について検討し合うことで、評価を行う際の判断基準についての共通認識を深めるとともに、観点別評価への意識を高めることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇「作業的、体験的な学習」など言語活動の方法や内容、及び具体的な活動場面における評価の進め方や留意点について話し合うことで、それらについての共通理解を図る。

【準備物】

- ◇提案授業の学習指導案、授業を撮影したビデオ、抽出生徒（できれば複数）の授業記録、生徒のワークシートやノート等、「評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	・学習指導案等を基に、本時で身に付けさせたいことと言語活動の関連について確認する。	・研修のねらいを踏まえ、映像を視聴するよう伝える。
2 提案授業のビデオを視聴する。 (20分)	・研修時間を考慮しながら、授業で工夫した場面を中心にビデオを視聴するようにする。	・必要に応じて、映像の停止やリプレイの操作を行うようにする。
3 提案授業者と他の参加者での研究協議を行う。 (40分) 【テーマの例①言語活動について】 ・資料を選択し活用する学習活動の進め方や成果について ・学習課題の適切さについて ・抽出生徒の様子について 【テーマの例②評価について】 ・授業者から見た評価について ・参加者から見た評価について ・評価の基準について など	・生徒一人一人に、本時の目標を達成するための言語活動になっているかを検討する。 ・できるだけ具体的な教師の支援や生徒の様子などを基に検討する。 ・「思考・判断・表現」、「技能」の観点について行った具体的な評価について、複数の参加者により検討し合うことで、その妥当性、信頼性等を高められるようにする。	・テーマに基づいて研究協議を進めるために、視点を明確に示すようにする。 ・多様な考えを引き出したり、まとめたりして協議を進めるようにする。
4 研修のまとめを行う。 (5分)	・ねらいを意識した研修になったかの振り返りを行う。	・研修のよかった点を具体的に取り上げて、今後の改善のポイントをまとめるようにする。

【評価】

- ◇本時ねらいや具体的な手立てについて理解するとともに、具体的な場面における言語活動の評価について理解を深めることができる。
- ◇〈ファシリテーター〉言語活動やその評価について、共通理解を図ることができる。

自校化へのヒント

- ◇言語活動における効果的な手立ては、他教科や異なる学習内容の授業においても活用することができる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇教科主任と共に、研修の計画（実施日や提案者の決定、学習指導案の作成等）を立てる。
- ◇提案授業者に、提案授業の授業づくりや学習指導案作成について助言する。
- ◇教科部員に、提案授業における授業記録（授業の全体、抽出生徒の様子、写真・ビデオの撮影）を依頼する。
- ◇参加者に、学習指導案等の資料を事前に配布しておき、研修内容を事前に周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇提案授業者と授業のポイント等についての打合せを十分に行っておく。できれば、より多くの社会科担当教職員が、事前の学習指導案作成や評価計画に関わることが大切である。
- ◇具体的な授業の場面や生徒の記述などを基に、研究協議を行うことが大切である。例えば、生徒の記述についての判断は、それぞれの参加者によって異なることが考えられるため、その違いを評価規準に照らして検討し合うことで、より妥当性、信頼性の高まった評価ができるようになる。

事後に実施すること

- ◇本時の成果を基に、「作業的、体験的な学習」などの言語活動を取り入れた授業を構想したり、「思考・判断・表現」、「技能」を中心とした評価計画を作成したりする。
- ◇検討された成果を、次年度の「年間指導計画、シラバス」や「指導と評価の計画」等の作成に生かす。

参考資料等

- 国立教育政策研究所「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 社会】」平成23年11月
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 地理歴史】」平成24年7月
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 公民】」平成24年7月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例【中学校版】」平成23年5月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例【高等学校版】」平成24年6月

期待される効果

- ◇活動のねらいを考えながら、説明し伝え合う活動を取り入れた授業づくりをすることで、数学的な思考力・表現力を高める授業についての共通理解を図ることができる。
- ◇説明し伝え合う活動を充実させるには、それに適した授業を選ぶことが重要である。そのために、表現する活動を重点化した授業をどこに位置付けるかを、単元に入る前に考えておく必要がある。そうすることで、単元全体を見通した指導に対する課題や改善すべき点について共通認識を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇説明し伝え合う活動を充実させる授業について学年等のブロックで検討し、数学的な思考力・表現力を高める授業づくりについての理解を深める。

【準備物】

- ◇教科書，「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」，付箋，指導略案枠，発表ボード

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 説明し伝え合う活動を充実させた，算数の授業の構想を練ろう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・研修のねらいや意義を確認し，研修の成果を授業に反映する視点をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・よい授業をつくろうという前向きな雰囲気を始められるようにする。
2 学年，ブロック等ごとに授業の構想を練る。 （60分） (1) 授業を行う単元の中で，説明する活動に適した授業を選ぶ。 (2) 説明する活動を中心に授業を組み立てる。 (3) 授業の流れに沿って，教師の発問やはたらきかけを具体的に考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ説明する活動に適しているのかという理由を考えながら選ぶようにさせる。 ・説明する活動をさせる際の形態，時間，内容について，具体的に決めていく。 ・発問を具体的に検討することで，実際の授業に生かすようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導案ではなく，授業の大まかな流れを作っていくことを伝える。 ・根拠をもった活動となることを意識させる。 ・説明し伝え合う活動の場面でできるだけ具体的に考えさせる。 ・説明し伝え合った後に，（次ページ）「説明し伝え合う活動のねらい（例）」を参考に，どのように考えをまとめていくかについて，協議するよう伝える。 ・必要に応じて「指導事例集」を参考にするよう伝える。
3 ブロックごとに発表し，協議する。 （15分）	<ul style="list-style-type: none"> ・その授業を選んだ理由や発問についても触れるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・協議で出た意見を総括する。

【評価】

- ◇数学的な思考力・表現力を高めるための、説明し伝え合う活動について具体的な授業の構想を練ることができる。
- ◇〈ファシリテーター〉教職員が前向きに意見を述べる雰囲気をつくることができる。

自校化へのヒント

- ◇説明し伝え合う活動では、各学校、各学年の実態に応じてねらいを設定することが必要になる。各学年や、低・中・高学年ブロック別に、具体的なねらいや目指す児童像を設定すると、深まりのある研修になる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇ブロック別教科担当者に、自分が担当している学年・ブロックの、指導事例集に目を通し、具体的な工夫について理解しておくように周知する。
- ◇教職員に、検討する単元を、学年等のブロックで前もって決めておくことともに、説明し伝え合う活動のねらいを研修便り等で周知する。

説明し伝え合う活動のねらい（例）

- 「はやく」、「簡単に」、「正確に」、「どんなときも」の視点で考える。
 - いくつかの考え方の中から共通なものを選び出す。
 - いろいろな考え方に触れ、思考を広げる。
 - 仲間分けしたり、それぞれの考え方のよさや特徴を捉えたりする。
 - 似ている所、違う所に注目する。
- ※活動で何をねらうかという視点を明確にすることが重要である。
※授業の目標からねらいを絞る。

研修のポイントと進め方

- ◇活動のねらいを考えながら授業の構想を練ることで、説明し伝え合うこと自体が目的ではないことを意識させるようにする。
- ◇協議した授業は全教職員にとっての資料になることを伝え、今後の教材研究に生かせるようにする。
- ◇「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」に、優れた実践が各学年ごとに紹介されている。手立てや展開を練るときの参考にすると、授業の具体的なイメージづくりに役立つ。

事後に実施すること

- ◇実践した授業における説明し伝え合う活動が、本時の目標を達成することができたかを検証する機会を設けるようにする。
- ◇授業で説明し伝え合う活動を行うときは、常にねらいを意識するよう心掛ける。また、校内研修の研究協議等でも活動のねらいを取り上げるようにする。

参考資料等

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 算数編」平成20年8月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」平成23年10月

●研究主題「思考力・判断力・表現力豊かな生徒の育成～言語活動の充実を通して～」の例

期待される効果

- ◇数学的活動のねらいと具体的な内容について、数学を担当する教師を中心として協議することを通して、数学的な思考力・表現力の育成を目指した学習指導について、共通理解を図ることができる。
- ◇数学的活動の事例を検討することを通して言語活動の充実に対する共通理解を図ることで、今までの指導に対する新たな視点を得ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇数学的活動についての具体的な指導についての理解を深め、実践につなげる。

【準備物】

- ◇教科書，ワークシート，該当校種の学習指導要領解説数学編，該当校種の「言語活動の充実に関する指導事例集」

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 数学的活動を充実させた授業の構想を練ろう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・研修のねらいや意義を確認し，他の教科においても，研修の成果を授業に反映する視点をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・よい授業をつくろうという前向きな雰囲気を始められるようにする。
2 活動の実践例について確認する。 （60分） (1) 解説の中の各学年の内容に記載されている数学的活動の例について確認し，さらにどのような活動が考えられるか協議する。また，活動のねらいを確認する。 (2) 指導事例集の実践について確認し，授業に取り入れられる工夫について検討する。 (3) 今までの指導を振り返り，感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・解説と教科書を照らし合わせながら，数学的活動の具体的な実践をできるだけ多く見つけるようにする。 ・記載されている工夫が，他のどのような授業で生かすことができるか検討する。 ・数学的活動で実践してきた授業があれば紹介してもらうのもよい。 ・感想用のワークシートに記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・解説の数学的活動の記載部分に目を通しておき，必要に応じて助言をする。 ・多様な工夫を類型化し整理する。 ・協議で出た意見を総括する。
3 1人ずつ感想を発表する。 （10分）	<ul style="list-style-type: none"> ・意見，感想を交換することで今後の指導に生かすようにする。 ・解説の数学的活動の記載部分に目を通しておき，必要に応じて助言をする。 	

【評価】

- ◇ 数学的な思考力・表現力を育成するための数学的活動について、具体的な授業の構想を練ることができる。
- ◇ 〈ファシリテーター〉教職員が前向きに意見を述べる雰囲気をつくることができる。

自校化へのヒント

- ◇ 解説に「指導に当たって、それぞれの数学的活動が有効に機能する場面を明らかにし、生徒の学習状況にも配慮して適切に位置付けることが求められる。」と示されているように、各学校、各学年の実態に応じて数学的活動を設定することが必要になる。年間指導計画の見直しとも絡めて授業を位置付けると深まりのある研修になる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇ 教科主任と共に、解説、指導事例集に目を通し、具体的な数学的活動について理解しておく。また、スムーズな導入のために、数学的活動に対する課題や疑問などの簡単な意識調査を教職員に実施する。さらに、指導事例集は代表的な実践を人数分印刷して配付する準備をする。
- ◇ 教科部員に、いままで行った授業で、数学的活動を工夫したものがあれば、生徒の反応や、うまくいった点、反省点などを交えて紹介してもらうことを周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇ 数学的活動を通して、数学的な思考力・表現力を育成することがねらいである。数学的活動自体がねらいにならないよう留意させることが重要である。
- ◇ 生徒の実態を調査してから実施すると、授業実践につながる研修となる。
- ◇ 「言語活動の充実に関する指導事例集」に、優れた実践が紹介されている。手立てや展開を練るときの参考にすると、授業の具体的なイメージづくりに役立つ。

事後に実施すること

- ◇ 協議は教科担当者にとっての有効な資料になることを伝え、今後の教材研究に生かせるようにファイリングしていつでも閲覧できるようにする。
- ◇ 実践した授業における数学的活動が、本時の目標を達成することができたかを検証する機会を設ける。

参考資料等

- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 数学編」平成20年9月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集」【中学校版】平成23年5月
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 数学編」平成21年12月
- 文部科学省ホームページ「言語活動の充実に関する指導事例集」【高等学校版】
[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1322283.htm]

期待される効果

◇児童が自ら問題を見いだす導入の工夫等についての研修をすることで、主体的な問題解決の活動となる学習指導について共通理解を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇理科授業の進め方として導入の工夫や留意点について話し合い、児童の主体的な問題解決の活動のつくり方を共通理解し、授業力の向上を図る。

【準備物】

◇「小学校学習指導要領解説 理科編」,「小学校理科の観察,実験の手引き」,教科書,発表ボード

【展開】

内容(時間)	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。(5分) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 第○学年 単元「○○○○○」の導入を考えよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に決めた発表者から、導入の工夫として実践した事例を紹介するようにすることで、活動の見通しをもてるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然事象に目を向ける話題を提供する。
2 問題解決の過程を知り、単元の導入の工夫について考える。(45分) (1) 問題解決の過程としての八つのステップについて確認する。 (2) 第1のステップ「自然事象への働きかけ」が、問題を見いだす場面として大切なことを共有する。 (3) グループごとに導入の工夫について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決の過程を確認する際は、「小学校理科の観察,実験の手引き」のp.15を参照する。 ・問題解決の過程を全体で確認してから、グループに分かれて協議する。 ・学習内容を学習指導要領や教科書で確認する。また、地域の実態や、児童の実態を踏まえて考える。 ・自分の案を整理してから、グループの人と話し合うようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介した事例を基に、導入を工夫することで、児童が自ら問題を見いだすことができ、主体的な活動が始まることを確認する。 ・各グループの進捗状況を把握する。 ・意見が出ないときは、関連する事象などを提示する。 ・時間内で考えを出すようにし、短時間でも行えることを示す。 ・協議で出た意見を集約して、よさを認め励まし、実践への意欲を高めるようにする。
3 導入の工夫について発表する。(15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで考えた導入の工夫を発表ボードに記入し、発表する。 	
4 まとめをする。(5分) (1) 工夫のよさを共有する。 (2) 明日からの授業に生かせる点を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・よさについて感想や意見を発表するようにする。 ・実践化へ向けたまとめをできるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入の工夫のポイントについて整理し伝える。

【評価】

- ◇単元の導入の工夫として、導入の具体について考えている。
- ◇〈ファシリテーター〉考えた導入の工夫のよさを共有させ、実践しようとする雰囲気をつくっている。

自校化へのヒント

- ◇導入の工夫について考えがすぐにまとまらないことが予想される場合は、事前に研修内容を周知し、情報を集めておくよう伝えておくことで効率のよい研修となる。
- ◇問題解決の八つの過程を発達段階（中学年，高学年等）に応じて整理し、理科学習の流れとして共通の言葉で提示するようにする。

中学年の例：学習問題 → 予想 → 観察・実験の方法 → 観察・実験 → 結果の整理 →
→（学習問題について）分かったこと、考えたこと（考察） → まとめ（結論）

ファシリテーターの事前準備

- ◇協議を行うグループ（3～4人）を編成しておく。
- ◇教科主任（教科の免許保有者）に、問題解決の過程について十分把握し、八つのステップについて具体的な事例を交えて説明できるようにする。また、導入の工夫について実践例をもった発表者がいないときは、事例の紹介をするか、ファシリテーターが行うようにする。さらに、取り上げる学年及び単元を決めておく。その際、まず第3、4学年の単元を考え、身近な自然の事物・現象とのつながりをもてるようにする。また、年間計画を踏まえ研修後に授業実践できる単元を選ぶようにする。
- ◇教職員に、取り上げたい単元があるときには、担当者へ伝えるように知らせておく。

研修のポイントと進め方

〈問題解決の過程の把握〉

- ◇問題解決の過程を踏まえ、各活動が形式的なものにならないことが大切である。つまり、教師主導ではなく、児童が「（ねらいとする活動を）したい。」という思いを抱ける問題づくりを心掛け、問題を明確にして見通しをもつことで、主体的な問題解決の活動となるようにする。

〈導入の工夫の実際〉

- ◇児童に対して、学習内容につながる「～したい。」という思いを引き出す事象提示や演示実験を準備できるようにする。
- ◇教材研究をすることで、教師自身が、わくわくできる導入にする。そうすることで、児童もわくわく感をもち、学ぶ楽しさや分かる喜びを味わうことができるようにする。

問題解決の過程 (八つのステップ)

- 1 自然事象への働きかけ
- 2 問題の把握・設定
- 3 予想・仮説の設定
- 4 検証計画の立案
- 5 観察・実験
- 6 結果の整理
- 7 考察
- 8 結論の導出

事後に実施すること

- ◇導入の工夫として考えた展開例を担当学年の先生が実践するようにし、児童の反応や実践した教師の感想等を研修で伝達、協議することで、よさや改善点を共有して、授業力の向上を図る。

参考資料等

- 文部科学省「小学校理科の観察，実験の手引き」平成23年3月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」平成23年10月

●研究主題「思考力・判断力・表現力豊かな生徒の育成～言語活動の充実を通して～」の例

期待される効果

- ◇科学的な思考力, 表現力の向上を図るための授業研究を通して, 思考力・判断力・表現力の向上を目指した授業展開について, 共通理解を図ることができる。
- ◇教材研究や指導方法についての共通理解を深めることで, 教職員一人一人の授業力の向上を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇観察, 実験の材料や展開の工夫が, 生徒の思考を引き出す上で重要である。教職員がもっている工夫を共有し, 学校全体として科学的な思考力, 表現力の向上につなげられるようにする。
- ◇新出の観察, 実験の場合には, 教職員一人一人が技能に習熟することで, 観察, 実験を安全に行えるようにするとともに, 生徒の学習活動が充実できるようにする。

【準備物】

- ◇学習指導案, 各校種の学習指導要領解説理科編, 教科書, 実験ワークシート, 実験で使う材料, 器具等, 白衣, 保護眼鏡 (必要に応じて)

【展開】

内容 (時間)	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領解説を基に, この単元で生徒に身に付けさせたいことを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・協力的な雰囲気をつくる。
2 観察, 実験の準備をする。 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり使用していない実験器具等に関しては, 安全性を事前に確認しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・協力して準備できるように声掛けをする。
3 観察, 実験を行い, 結果を整理し, 考察する。 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の観察, 実験の技能の習熟度を掌握しておき, 注意が必要な操作を把握する。 ・正確で再現性のある結果を得るために, 留意することを把握する。 ・生徒の素朴概念や既習事項, 到達度を基に, 結果の整理や考察の過程でつまずきそうな部分を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋を用意し, 観察, 実験を進める中で気付いたことを書き込み, 学習指導案に貼れるようにする。
4 観察, 実験方法の妥当性, 結果の整理の仕方, 考察の内容等について研究協議を行う。 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋に記入したことを中心に, 研究協議を進める。 ・言語活動の充実の視点から, 結果の整理や考察の過程での学習活動を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究協議の司会を行う。 ・研究協議の視点が明確になるように進める。
5 研修のまとめを行う。 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいを意識した研修になったか, 振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の研修の良かった点や次回への展望等について話をする。

【評価】

- ◇この観察、実験における、科学的な思考力、表現力を育む学習活動を理解し、展開する見通しをもつことができる。
- ◇この観察、実験の技能を十分に習得し、観察、実験を安全に行うことができる見通しをもつことができる。

自校化へのヒント

- ◇第1分野（物理的領域）の観察、実験は、技術家庭科〔技術〕、第2分野（生物的領域）の観察、実験は、保健体育科や技術家庭科〔家庭〕の教員と合同で研修を行うことも考えられる。
- ◇第2分野（生物的領域、地学的領域）の観察、実験については、学校の地域性を生かした材料や方法を取り上げるとよい。
- ◇生徒や学校の実態を踏まえながら、一つの観察、実験の展開を2時間扱いにしたり逆に2回に分けて行ったりするなどの工夫をするとよい。
- ◇高等学校では、実習助手等と連携して観察、実験の年間計画を立てたり、指導方法の改善を図ったりすることなどを取り入れると、より実際的な研修になると考えられる。
- ◇若手教員がいる学校では、模擬授業形式で研修を進めたり、研究協議において若手教員に積極的に発言を促したりすることで、授業力向上につながる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇教科主任に、年間計画を踏まえ、どの時期に何回研修を実施するか、提案者も含めて計画するよう依頼する。
- ◇提案者に、提案授業の学習指導案や実験ワークシートの作成について助言する。また、観察、実験の材料、器具等を一緒に準備する。
- ◇教科部員に、事前に、学習指導案等の資料を配付し、研修内容を周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇提案授業者に対して、授業のよかった点を称賛するとともに、改善点を協議することで、授業改善に向けた新たな視点を得ることができるようにする。
- ◇提案授業者に安心感をもたせ、進んで研修を行う職場の雰囲気づくりを心掛ける。

事後に実施すること

- ◇今回の研修で出された意見を基に、学習指導案を再び作成し、授業を行う。授業後の反省を、次の研修に生かす。

参考資料等

- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 理科編」平成20年9月
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 理科編 理数編」平成21年12月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」平成23年5月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】」平成24年6月

期待される効果

◇第1学年「学校探検」の学習を通して、第1学年児童と教職員との校内での関わり合いを深め、全教職員が協働して児童を育てる共通認識をもつことができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇気付きの質を高める指導法について共通理解し、1学年「学校探検」の学習において、校内で児童同士や児童と教師との関わり合うことを想定した単元を構想することができる。

◇全教職員に生活科の特質や学習内容について共通理解を図り、学習を進める児童と適切な関わり合いがもて、児童を協働で育てるという意識を高めることができる。

【準備物】

◇「小学校学習指導要領解説 生活科編」, 校内の見取り図, 校内の写真, 教科書

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 第1学年「学校探検」への関わり合いを工夫しよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に、1学年担当者は、「学校探検」の指導計画（案）を作成しておく。 ・どこで、誰と、どんな関わりをもたせたいのかなど、具体的な案を提案できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入学した1年生を学校全体で育てていくという雰囲気づくりをする。 ・指導計画案の作成段階にも関わり、必要に応じて助言する。
2 気付きの質を高める学習指導の進め方について理解する。（50分） (1) 生活科で定義する「気付き」についての確認<5分> (2) 気付きの質を高めるとは、どのようなことかの話し合い<20分> (3) 「学校探検」で、どんな関わり合いをもてるようにするとよいかの話し合い<25分>	<ul style="list-style-type: none"> ・「気付き」については、「小学校学習指導要領解説生活科編」(p.4)を参考にする。 ・話し合いは、グループに分かれて行う。グループは、3～4人で構成し、各学年担当のバランスを考慮し事前に決めておく。 ・関わり合う対象は、全教職員、児童同士、施設としての各教室等を想定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気付きや気付きの質を高める学習活動について事例を提示する。 ・各グループで進行係をしている教職員の様子を見ながら、適宜補助に入る。 ・学校探検と関わり合いをもてる学習や場を想起できるように助言し、関連付けて考えられるようにする。
3 各グループで話し合ったことを発表する。（15分）	<ul style="list-style-type: none"> ・工夫点や共有したい内容を発表し、よりよい指導計画になるようにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践化のポイントになることを押さえる。
4 まとめをする。（10分） ○発表内容を共有し、実践化へ向けての確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・発表内容において、共通する工夫点を集約し、実践内容の共通理解を図れるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員で行うことを整理して共有できるようにする。

【評価】

- ◇気付きの質を高めるとはどのようなことかを理解し、学習活動を工夫する考えを共有している。
- ◇〈ファシリテーター〉教職員の生活科への意識をもたせることができ、入学後の児童を全校で育てるという雰囲気づくりをしている。

自校化へのヒント

- ◇学校の決まりや日常的な習慣となっていることなどを身に付けられるようにする。
- ◇登下校に関わる班や学校生活に関わる班（異年齢集団による班）などを学習活動の中に効果的に結び付けるようにする。

ファシリテーターの事前準備

- ◇教科主任と共に、学習場面における児童の気付きの具体を用意し、気付きの質を高めるための働きかけなど実践事例を提示できるように準備する。
- ◇第1学年主任に、「学校探検」について指導計画（案）を作成し、他学年の児童、学校の先生や学校で働く人、学校の施設とどのような出会いをつくり、どのような関わり合いをもたせたいのか、提案できるようにする。

研修のポイントと進め方

- ◇入学した1年生を温かく迎え、全教職員が関わり合い、上級生や全教職員で分からないことを教えようとする雰囲気をもてるようにする。
- ◇気付きの定義（解説 p. 4）を確認できるようにし、気付きの質を高める学習指導の進め方として、「振り返り表現する機会を設ける」、「伝え合い交流する場を工夫する」、「試行錯誤や繰り返す活動を設定する」、「児童の多様性を生かす」学習活動（解説p. 64～p. 66）があることを押さえ、取り上げる単元のねらいや学習場面に応じて重視する学習活動を焦点化する。
- ◇学校生活の約束事や過ごし方、施設の使い方など普段の生活で当たり前のようにしていることを第1学年担当の教師だけに任せずに、児童や教職員、その場にいる人、よく知っている人がタイムリーに関わり合い、教えられる環境づくりを進め、協働で児童を育てるという意識を高める。さらに、その延長として「学校探検」の学習を位置付け、意図的な関わり合いをすることで、児童が伝え合い交流したくなる気付きをたくさんもてるようにしたい。

事後に実施すること

- ◇「学校探検」の学習を通して生まれた関わり合い、伝え合いで伝えられた内容を共有化するとともに、協働して育てていくよさを学校生活の中に生かすようにする。

参考資料等

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活科編」平成20年8月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」平成23年10月

期待される効果

◇楽器の扱い方や活動への取り組ませ方など，実技を取り入れた研修を通して，指導のポイントや手立てを見いだし，全教職員で共通理解を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇音楽室にある打楽器にふれ，音色のよさや面白さを感じ取ったり，それを生かしてリズムアンサンブルをつくったりする活動を通して，思いや意図をもって表現する音楽科授業づくりのポイントをつかむ。

【準備物】

◇マレット，スティック，リズムカード，楽器

楽器：タンブリン，すず，トライアングル，カスタネット，ウッドブロック，ギロ，クラベス，カバサ，ボンゴ，コンガ，カホン，シンバル，バスターム，スネアドラム，和太鼓等
(音楽室にある各種打楽器)

【展開】

内容(時間)	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	・ワークショップの進め方を説明し，意欲付けをする。	・明るく協働的な雰囲気をつくるようにする。
2 お気に入りの音を見付ける。 (40分) (1) 楽器の扱い方について，確認する。 (2) 音楽室で音探検をする。 (3) お気に入りの音を紹介する。	・楽器の基本的な奏法について確認する。 ・どのような音が出るのか試す。 ・お気に入りの音の紹介では，お気に入りの理由を伝える。 ・あらかじめグループをつくっておく。	・楽器の名前や基本的な奏法が分かるようにしておく。 ・全体を見ながら個の進捗状況を把握し，必要に応じてアドバイスをする。 ・個人や各グループの表現のよさや面白さを肯定的に受け止められるようにする。
3 リズムアンサンブルをつくる。 (30分)	・リズムアンサンブルの作り方を提示する。	
4 つくったリズムアンサンブルを発表する。 (10分)	・聴くポイントを示す。	・研修のよかった点を具体的に取り上げて話をする。
5 研修のまとめを行う。(5分)		

【評価】

◇音楽室にある打楽器にふれ，音色のよさや面白さを感じ取ったり，それを生かしてリズムアンサンブルをつくったりする活動を通して，思いや意図をもって表現する音楽科授業づくりのための視点や手立てを見いだしている。

自校化へのヒント

- ◇扱う楽器については、タンブリンやすず、トライアングル、カスタネット、バスドラムなど、低学年の教科書に出てくるものに絞り、それぞれの楽器の基本的な奏法や一つの楽器でも様々な音が出せることを理解できるようにすることも可能である。
- ◇3の活動は、以下に示すような活動にすることも可能である。

例：3年生 「おかしなすきなまほうつかい」（秋葉てる代作詞／大熊崇子作曲）
からまほうをかける音をつくる（音楽づくりの指導事項アの内容）

4年生 音の組み合わせを工夫して「〇〇な音のカーニバル」をつくる
（音楽づくりの指導事項アの内容または器楽の指導事項ウの内容）

ファシリテーターの事前準備

- ◇研究主任と共に、音楽室の楽器の確認をする。また、場の設定をする。
- ◇教科主任や教科部員と共に、楽器の名前や基本的な奏法を示した掲示物をつくる。さらに、研修会終了後は、作成した掲示物を音楽室の教室環境に使う。

研修のポイントと進め方

- ◇感じ取ったことを基に思いや意図をもって表現するという視点から音楽科授業づくりを見直し、授業改善に向けて新たな視点を得ることができる。

〈音楽室の音探検〉

- ◇音探検の約束事を示すことで、目的意識をもって取り組めるようにする。

約束事の例：お気に入りの音の一つを選ぶ。
楽器はやさしく丁寧に扱う。
マレットやスティックを変えて試す。
奏法を試す。 など

〈リズムアンサンブルづくり〉

- ◇音楽をつくるための発想が広がるように、リズムアンサンブルのつくり方を示す。実態に応じて内容は変える。

つくり方の例：4人でつくる。
8小節でつくる。
終わりは全員同じリズムにする。
自分の音に合ったリズムパターンを二つ選ぶ。
リズムでお話をしたり、リズムを繰り返したりする。
音の重ね方は、「おいかけっこ」、「いっしょ」の二つを使う。 など

事後に実施すること

- ◇研修で使用したワークシートや掲示資料を活用した授業実践を行う。その際、協働で学習指導案を作成し、相互授業参観と協議を行う。

参考資料等

教育芸術社「小学生の音楽3」、教育芸術社「小学生の音楽4」
文部科学省「小学校学習指導要領解説 音楽編」平成20年8月

期待される効果

- ◇「アートカード」をつくり、鑑賞する研修を通して、図画工作科の目標及び授業づくりについての理解が深まり、教職員一人一人の授業力の向上を図ることができる。
- ◇児童が材料や用具に能動的に働きかけ、形や色などを手掛かりに、思いのままに表すとともに、よさや面白さなど感じ取ったことを話し合いながら作品を見ることを楽しむ授業展開について、共通理解を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇図画工作科の目標及び授業づくりについての理解を深め、児童に形や色、イメージなどの〔共通事項〕を視点に、よさや面白さを感じ取る力を育てる指導の充実を図る。

【準備物】

- ◇小学校学習指導要領解説図画工作編，絵の具セット，いろいろな紙（絵葉書大，一人10枚程度），糸，綿棒，ローラー，金網，ブラシ，スポンジ，ビー玉，はさみ，のり，筆記用具等

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分）	・各学年の目標及び〔共通事項〕について、解説や資料等を基に確認する。	・協働的な雰囲気をつくる。
2 「アートカード」をつくる。 （40分） ○筆以外の身近にある材料を使い、いろいろな絵の具の表現を楽しむ。 ○できた「アートカード」の裏に、その表現から思い付いた「言葉」を書く。	・身近にある材料が筆の役割をする面白さを感じ取り、多様な表現方法を試すことができるようにする。 ・「言葉」を書く際には、〔共通事項〕に視点を当て、「どのような」形や色からそう思ったのかを考えながら書く。 ・担当学級の児童の姿を想像し、児童一人一人の気付きを深めるような助言等を考えながらつくる。	・明るい雰囲気の中で楽しく活動できるよう声を掛けながら、教職員の活動状況を把握する。 ・形や色に関する気付きや面白い表現の試みなどに共感的に言葉を交わす。
3 「アートゲーム」を行う。 （30分） ○表現の共通点を見付ける。 ○言葉の共通点を見付ける。 ○自分たちでルールをつくる。	・「アートゲーム」のルールは柔軟に考え、感じたことや考えたことを自由に話したり聞いたりすることができるようにする。	・〔共通事項〕を視点にすることで、互いの見方や考え方の違いに気付くことができるよう働きかける。
4 研修のまとめを行う。 （15分） ○筆以外の表現からの気付きについて話し合う。 ○〔共通事項〕を視点に、感じたことを話し合う。 ○指導のポイントについて話し合う。	・研修からの自分の気付きと今後の図画工作科の指導について、自由に話し合うことができるようにする。	・多様な気付きを取り上げ、今後の指導に生かすことができるようにする。

【評価】

- ◇多様な表現方法を試したり，〔共通事項〕を視点に話し合ったりしたことを通して，よさや面白さを感じ取る力を育てる図画工作科の授業づくりについての理解を深め，今後の指導に生かそうとしている。

自校化へのヒント

- ◇材料や用具を使い，実際に表現方法を試したり，「アートゲーム」を行ったりすることは，自校の児童の実態や自分の指導を再確認するとともに，見方や考え方の違いに気付くことができ，深まりのある研修になる。
- ◇図画工作科の指導に不安を感じる教職員がいる場合には，研修中の会話や活動により，授業づくりのヒントを得ることができる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇教科主任と共に，事前に材料や用具の準備をする。
- ◇教科主任に，材料や用具の準備や「アートゲーム」を行う際のグループ編制（学年，経験年数等を考慮）を依頼する。また，小学校学習指導要領解説図画工作編から，各学年の目標及び〔共通事項〕の内容について，資料の作成を依頼する。
- ◇教職員に，事前に資料を配付するとともに，担当学級児童の図画工作科学習についての実態を把握し，研修に臨むことができるように周知する。また，絵の具セット等の準備を連絡する。

研修のポイントと進め方

〈「アートカード」をつくる段階〉

- ◇筆以外のいろいろな表現方法を試す時間を十分に確保する。
- ◇教職員同士が互いの表現方法のよさや面白さを感じ取りながら，活動を進めることができるよう，研修形態を配慮する。
- ◇つくった「アートカード」から，自由な発想で「言葉」を書いていくが，「言葉」が思い付かない教職員に対しては，〔共通事項〕を視点に「何に見えるか」，「どんな感じがするか」，「材料をどのように使ったか」等を話し合いながら進めることができるようにする。

〈「アートゲーム」を行う段階〉

- ◇同じ材料や色を使っても思い付く「言葉」が違ったり，同じような「言葉」でも表現方法が違ったりすることに気付くようにする。そのためには，〔共通事項〕を視点にしたグループでの話し合いを充実する。
- ◇「アートゲーム」を行う中で，グループ内でいろいろなルールを考える。トランプ等のルールも活用し，担当学級児童の発達の段階を考慮したゲームを行う。

事後に実施すること

- ◇研修で学んだ内容を授業に取り入れ，全ての題材で〔共通事項〕を視点に，児童の活動や作品を捉えることについて全教職員で共通理解を図り，指導に生かす。

参考資料等

文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」平成23年11月

期待される効果

- ◇実技研修を通して、児童に基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせるとともに、実習の指導のポイントを全教職員で共通理解を図ることができる。
- ◇実技研修を通して、「努力を要する」状況と判断される児童への指導の在り方を共有することができる。

研修の流れ

【ねらい】

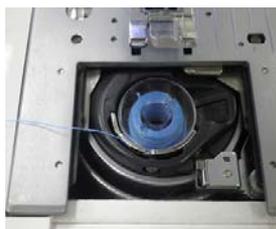
- ◇ミシンを使った「生活に役立つ物の製作」を行い、指導すべき技能や指導のポイント、評価規準を確認し、授業の進め方の視点を共通理解する。

【準備物】

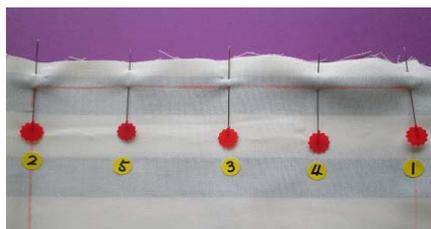
- ◇「小学校学習指導要領解説 家庭編」，製作の手順表，「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」，ミシン，布，糸，アイロン，見本

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ランチョンマットを作成を通して授業づくりについて考えよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に製作をすることにより、児童の立場に立った授業づくりができることを話し、意欲付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明るい雰囲気をつくり、製作への意欲を高めるようにする。 ・この題材で指導すべき技能を予め板書しておく。（※2，※3）
2 ミシンの使い方について知る。 （15分） (1) 糸のかけ方を知る。（※1） (2) から縫いをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ教員の実態を把握し製作グループをつくって行う。 ・活動のどの部分で児童がつまずくのか、手順表に各自が記入していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループを回りながら実習の様子やつぶやきなどを把握していく。 ・つまずきが予想される場面を板書するなど明確にする。
3 ランチョンマットを作成する。 （45分）	<ul style="list-style-type: none"> ・また、それを解決するための手立てを考えられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態に合わせて簡単なものや工夫できるものなど、見本を準備しておく。
4 グループごとに話し合いをする。 （20分） (1) 「努力を要する」児童への手立て (2) 評価方法と判定基準	<ul style="list-style-type: none"> ・製作した作品を基に、「おおむね満足」できる状況や「十分満足」できる状況を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループから出た意見を集約していく。 ・安全面での指導についても共通理解する。
5 まとめを行う。 （10分） (1) 各グループから、手立てと評価規準に即した判定基準を発表する。 (2) 授業者の感想を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・手立てと判定基準を共有することで、今後の授業に生かしていく。 	



※1 下糸の入れ方



※2 まち針の差し方(見本)



※3 角の縫い方

【評価】

- ◇指導すべき技能や指導のポイントを理解している。
- ◇児童のつまずきやすいところが分かり、手立てを考えている。
- ◇評価方法と判定基準を考えている。

【指導すべき技能（例）】

- ・上糸や下糸の準備の仕方ができる。
- ・縫い始めや縫い終わりや角の縫い方を考えた処理の仕方ができる。
- ・まち針の止め方ができる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇教科主任と共に、ミシンの調整、材料の準備、見本の作成、手順表、指導すべき技能を確認する。
- ◇教職員に、手順表を事前に配っておいたり、出来上がり見本（簡単なもの、工夫してあるものなど）を職員室に掲示したりして、研修の意欲を高める。また、学習指導要領解説家庭編p.46を読み、児童に身に付けさせる内容を把握しておくよう周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇ミシンを用いた製作を行うことにより、児童が製作にかかる時間やつまずきやすい点を把握したり、教材・教具の効果的な使い方について確認したりすることができる。
- ◇研修の目的は作品をつくりあげることだけでなくことをしっかり伝える。
- ◇手順表を拡大して黒板に貼っておき、それぞれのグループで話し合った指導のポイントや児童がつまずきやすいところをそこに示し、全体で確認することにより、実習の指導について理解することができる。
- ◇右の表のように、作品を基に評価方法や判定基準を話し合うことで、授業において何をどのように児童に身に付けさせればいいかが理解できる。
- ◇ミシンやアイロンの取扱い方などの安全面の指導については、必ず全員で確認をし、共通理解を図る。

判定基準例

学習活動(○) 評価規準(◎)	判定基準例	
	おおむね満足(B)	十分満足(A)
○ミシンを使ってランチョンマットをつくる。 ◎ミシンを用いて直線縫いをすることができる。	・印に合わせてミシン縫いをしている。印とずれているところが2箇所ある。 ・角がほぼ直角に縫えている。 ・縫い初めと縫い終わりに返し縫いができている。	・印通りにミシン縫いができている。 ・角が直角に縫えている。 ・縫い初めと縫い終わりの返し縫いの縫い目が重なって縫えている。

事後に実施すること

- ◇「努力を要する」状況と判断される児童への手立てを、家庭科主任や高学年ブロックの教職員を中心に検討し、資料や教具を作成する。
- ◇評価の判定基準については、家庭科主任が検討したものをまとめ、年間指導計画表や評価計画等に付け加える。

参考資料等

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 家庭編」平成20年8月
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 家庭】」平成23年11月

期待される効果

- ◇低学年、中学年及び高学年における指導内容の共通理解が図られ、各学年の授業内容が明確となり、何を・どのように・どこまで等、担当する学年の授業の構想を練ることで、体育の授業づくりについて全教職員で共通理解することができる。
- ◇組織全体で、学年の目標に向かって取り上げる運動を精査していくことで、単元における課題や改善すべき点が見え、全教職員で共通認識を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇発達の段階を考慮した体育の授業について、低学年・中学年及び高学年のブロックで学習内容を検討し、系統性が図られた体育科の授業づくりについて意識を高める。

【準備物】

- ◇「小学校学習指導要領解説 体育編」、「学校体育指導資料集」、体育科年間指導計画、指導略案枠、記録用紙、付箋

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (10分) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 発達の段階を踏まえた指導内容の検討及び授業の構想を練る。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に配付した資料より、指導内容及び領域構成について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発達の段階を踏まえた系統性のあるよい授業をつくらうとする前向きな雰囲気が進められるようにする。
2 ブロックごとに指導内容の検討及び単元を構想する。 (60分) (1) 指定された運動領域の各ブロック指導内容の系統性を確認する。 (2) 運動の取り上げ方について話し合う。 ・各学年における単元計画 (3) 単元計画に沿って、具体的な運動の取り上げ方について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ブロックで指導する内容が明確になるように、資料を活用させる。 ・各ブロックの運動の系統性を確認する。 ・各学年の取り上げる運動について、具体的に決めていく。 ・児童が、運動の楽しさや喜びを味わえる単元になっているか検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導案ではなく、各ブロックにおける指導内容の大まかな取り上げ方を確認することを伝える。 ・各学年の運動の取り上げ方について協議するよう伝える。 ・必要に応じて「学校体育資料」を参考にするよう伝える。
3 ブロックごとに発表し、協議する。 (20分)	<ul style="list-style-type: none"> ・各ブロックで取り上げた運動が、系統性があるかどうかについて触れるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・協議で出た意見を総括する。

【評価】

- ◇各ブロック（低学年、中学年及び高学年）における児童の発達の段階に応じた系統性のある指導内容の共通理解を図ることができる。
- ◇何を・どのように・どこまで等、担当する学年の具体的な各学年の授業の構想を練ることができる。
- ◇〈ファシリテーター〉参加者全員に研修の意図及び内容を伝え、参加者全員が前向きに意見を述べる雰囲気をつくることができる。

自校化へのヒント

◇体育の指導に不安を感じる教職員がいる場合には、「学校体育指導資料集」(県教育庁保健体育課)を活用すると、手立てや展開を練るときの参考になり授業の具体的なイメージづくりに役立つ。(学校体育指導資料には、各運動領域、各学年の単元計画及び評価計画、授業のシナリオ、学習資料等が紹介されている。)

ファシリテーターの事前準備

- ◇各学年及び各ブロックの指導内容についての資料を準備する。
- ◇研修のねらいや研修内容を記載した資料(研修便り等)を作成する。
- ◇各学年の体育担当に、担当しているブロックの指導内容について、「小学校学習指導要領解説 体育編」に目を通し、領域構成及び具体的な内容について理解しておくよう依頼する。
- ◇教職員に、検討する領域を資料(研修便り等)で、事前に周知し、担当学年の発達の段階を踏まえた児童の実態を把握しておくことを助言する。

研修のポイントと進め方

◇研修のポイント

- ①小学校における体育科の内容は、運動の取り上げ方が弾力的であり、2学年のいずれかの学年で取り上げて指導することができることを共通理解する。
 - ②各ブロックで、2年間を見通した系統的な運動の内容を具体的に決定する。
 - ③各ブロックで、決定した内容を全体で合わせることで、6年間を見通した系統性のある指導計画が作成される。
- <例> 1・2年生(走・跳の運動遊び) → 3・4年生(走・跳の運動) → 5・6年生(陸上運動)

◇研修の進め方

- 児童の実態に応じて、
- ①2年間の指導内容を確認し、取り上げる運動を決定する。(どんな運動を)
 - ②取り上げた運動を各学年に振り分ける。(どのくらい)
 - ③各ブロックの計画を調整する。(いつ:基本的には、高学年から合わせていく)

事後に実施すること

- ◇協議した内容を基に、2学期からの授業における各学年の指導内容や具体的に取り上げる運動を見直し、体育科の授業づくりをする。
- ◇具体的に取り上げる運動が決定したら、学習の成果を得られるような教材教具の工夫改善に努める。

参考資料等

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 体育編」平成20年9月
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 体育】」平成23年11月
- 茨城県教育庁保健体育課「学校体育指導資料」
第33集「指導にすぐ生かせるワンポイント事例集」平成16年3月～
第41集「指導にすぐに生かせる体育授業のモデル集(その6)」平成24年3月

●研究主題「生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～言語活動の充実を通して～」の例

期待される効果

- ◇ 4技能を総合的に育成する授業の進め方について研修することで、言語活動の充実の方向性を共有することができる。
- ◇ 4技能を統合させたコミュニケーション活動を意識した提案授業について、研究協議を実施することで、教職員一人一人の授業力の向上を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇ 4技能を統合させたコミュニケーション能力の基礎を養うことを目指した授業実践ができるようにする。
- ◇ 提案授業の映像を視聴し、生徒に身に付けさせたい力が確実に身に付いているかどうかを評価することで、教材観や生徒観、指導観等に優れた見識をもつことができるようにする。

【準備物】

- ◇ 提案授業を撮影した映像、学習指導案、「学習指導要領解説 外国語編」、教科書、指導資料、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」、コンピュータ、プロジェクター等

【展開】

内容(時間)	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	・映像がスムーズに映せるよう機器の設定をしておく。	・研修のねらいを踏まえ、映像を視聴するよう伝える。
2 提案授業の映像を視聴する。 (20分)	・研修時間を考慮しながら、授業で工夫した場面や課題を感じた場面を中心に映像を流すようにする。	・(学習指導案と付箋を用意し、視聴した場面以外でも)よかった点や気になった点をメモすることができるようにする。
3 研究協議を行う。(参加者には他教科の教職員も含む) (30分)	・付箋に記入した点について研究協議を進める。また、映像を見ながら確認することができるようにする。	・研究協議の視点を明確にしておく。
4 研修のまとめを行う。 (5分)	・目的やポイントを十分意識できた研修となったか、振り返りを行う。	・研修のよかった点を具体的に取り上げて話をする。

【評価】

- ◇ 映像の視聴や研究協議を通して、自分の授業実践を振り返ることができる。
- ◇ 〈ファシリテーター〉研修成果を自分の授業に反映するよう示唆することができる。

自校化へのヒント

- ◇映像を視聴しながら、研究協議を行うことは、授業の進め方について具体的な指導法を考えるよいきっかけとなる。外国語指導助手（ALT）と協力しながら研究協議を行うと、より深まりのある研修になる。
- ◇中学校では、「発音力アップソフト」を活用することで、コミュニケーション能力の基礎を養うという視点から授業を捉え直すとともに、4技能を総合的に育成するため指導改善につなげることができる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇外国語指導助手（ALT）と連絡を取り合い、研修に参加できるよう調整する。
- ◇教科主任と共に、提案授業者の決定（担当学年、経験年数等を考慮する）、学習指導案の作成と映像に収録する計画を作成する。その際には、授業者と生徒の様子を撮影する機器を準備する。
- ◇参加者に、研修全体の資料を事前に配布し、研究協議の視点を示すとともに、研修内容を周知する。

研修のポイントと進め方

〈提案授業の準備〉

- ◇提案授業の学習指導案の作成及び検討の日時を設定する。
- ◇学習指導案の作成について共通理解すべきことを明確にしておく。
- ◇教科担当職員で互いに多様なアイデアを出し合い、学習指導案を作成することができるよう雰囲気を大事にする。

〈映像視聴及び研究協議〉

- ◇映像視聴の時間の配慮と、進め方を共通理解しておく。
- ◇学習指導案を見ながら映像を視聴し、各自が気付いたことを付箋に記入していく。
- ◇映像視聴後の研究協議では、《KJ法的手法（p.29）》で研究協議を進め、互いに意見を求めたり、意見を交換したりすることができるようにする。提案授業のすべてを視聴するのではなく、工夫した点や課題と感じる点に焦点を当てた部分を視聴するようにする。そのためにも研究協議のポイントを明確にしておくことは大切である。

事後に実施すること

- ◇研修で用いたKJ法的手法のワークシートや研究協議の記録をプリントにまとめて配付する。

参考資料等

- 文部科学省「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 外国語編」平成20年9月
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編」平成22年5月
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 外国語】」平成23年11月
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 外国語】」平成24年7月

【道徳】協働作業による学習指導案作成

小・中・高・特

随時 約80分 ワークショップ 全教職員

期待される効果

◇道徳学習指導案を協働作業により作成することで、指導過程の共通理解を図るとともに教職員一人一人の授業力の向上を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇協働作業による、道徳的価値と生き方（在り方生き方）の自覚を深める道徳の時間の学習指導案を作成を通し、授業力の向上を図る。

【準備物】

◇「学習指導要領解説道徳編」、読み物資料、資料分析表《別紙資料（p.103）》、学習指導案作成用紙《別紙資料（p.104）》、付箋等

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 授業のねらいを確認する。 （5分）	<ul style="list-style-type: none"> 年間指導計画のねらいの確認と児童生徒の実態と照らし合わせて指導の内容を検討することを確認する。 	
2 ねらいに基づく資料を分析する。 （25分）	<ul style="list-style-type: none"> 全員が意見を出し合い、一人一人の教師が、学習指導案作成に主体的に参加できるようにする。 ねらいとする内容項目について、「学習指導要領 道徳編」で確認するよう指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 場面や話の筋に分け、中心人物及び関連人物の言動を資料に沿って書き出すよう指示する。 <li style="text-align: center;">↓ 場面や話の筋ごとに、中心人物及び関連人物の言動の背後にある気持ちや考えを書き出すよう指示する。 <li style="text-align: center;">↓ 場面や話の筋ごとに、中心人物及び関連人物の言動の背後にある気持ちや考えを気持ちを支えている道徳的価値を検討するよう指示する。 <li style="text-align: center;">↓ 資料に含まれている、ねらいとする中心価値以外の価値（関連価値）を整理するよう指示する。
3 ねらいに迫るための発問を検討する。 （20分）	<ul style="list-style-type: none"> 作成に当たっては、発問は、児童生徒に何を考えさせようとするのかを明確にして進める。 発問は三つから四つ程度考える。 <p>※ブレインストーミングを用い、できるだけ多くのアイデアを出し合い、検討できるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ねらいとする道徳的価値に関わって、最も考えさせたい場面（中心場面）を考えるよう指示する。 <li style="text-align: center;">↓ ねらいとする道徳的価値に迫る中心発問を考えるよう指示する。 <li style="text-align: center;">↓ 中心場面を充実させるために、その前後の有効と思われる場面で基本発問を考えるよう指示する。 <li style="text-align: center;">↓
（1）中心発問		
（2）基本発問		

<p>(3) 補助発問</p> <p>4 学習指導案を作成する。 (20分)</p> <p>(1) 導入</p> <p>(2) 展開</p> <p>(3) 終末</p> <p>5 板書構成を検討する。 (10分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 資料分析表を基に，学習指導案を作成する。 児童生徒に考えさせるための，より効果的な板書構成について考える。 意図を明確にした板書を考える。 	<p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> 中心発問につなげるための基本発問を考えよう指示する。 <li style="text-align: center;">↓ 発問が決まったら，それぞれの発問に対する児童生徒の反応を予想するよう指示する。 ゆさぶりや切り返しの発問について説明する。 ねらいとする道徳的価値の自覚に向けての動機付けとなる導入を考えるように指示する。 資料分析を基に，ねらいとする道徳的価値についての自覚を深めるための資料提示，座席の配置，役割演技等の表現活動等の工夫を考えるよう指示する。 思考の流れや資料を構造的に捉えさせる，あるいはねらいとする道徳的価値を視覚的に捉えさせるような板書を考えるよう指示する。
--	---	---

【評価】

- ◇協働作業による，道徳的価値と生き方（在り方生き方）の自覚を深める道徳の時間の学習指導案作成を通して，授業力の向上を図ることができる。
- ◇〈ファシリテーター〉和やかな雰囲気を作り自由な発言を促すことで，職員の協働性が発揮できるように配慮できる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇研修で使用する読み物資料を，文部科学省「小学校道徳 読み物資料集」・「中学校道徳 読み物資料集」，茨城県教育委員会「高校生の『道徳』とともに歩む」，道徳副読本等から選定しておく。

研修のポイントと進め方

- ◇比較的経験の少ない教職員とベテランの教職員とが，協働することがポイントである。これにより，校内でのOJT機能（参考資料等を参照）の活用が期待できる。

事後に実施すること

- ◇研修で，協働して立案した学習指導案を基に授業実践を行う。授業実践は，日程等を調整し，より多くの職員が参観できるようにする。また，授業参観では，「授業参観シート」《別紙資料（p.106）》を活用する。
- ◇実践後は，振り返りの研修へとつなげる。

参考資料等

茨城県教育研修センター「平成23年度教職に関する研究『次世代の教職員を育てるために～OJTの進め方～』」

[http://www.center.ibk.ed.jp/contents/kenkyuu/houkoku/pdf/75_ojt.pdf]

期待される効果

◇ 1枚の拡大指導案に付箋を貼ったり直接書き込んだりしながら、P D C Aサイクルに基づき授業を振り返ることにより組織全体で、教職員の協働意欲を高めることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇ 教職員が協働して授業実践を振り返ることで、よりよい道徳の授業を実践するための指導力の向上を図る。

【準備物】

◇ 拡大指導案（本時の展開部分を模造紙サイズに拡大したもの2枚）、付箋（青と赤）、ペン（拡大指導案の書き込み用、2～3色）、「導入、展開、終末」それぞれの役割と工夫チェックプリント《別紙資料（p.105）》、授業参観シート《別紙資料（p.106）》（記入したもの）

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分）	・学習指導案を協働して立案した時に、迷いや悩みがあった部分を協議のポイントとすることを確認する。	・道徳的価値の自覚や生き方への考えを深めることができたかという視点で協議するように助言する。
2 振り返りを行う。 （40分） （1）導入 （2）展開 （3）終末 《拡大指導案法（p.31）》	・自由に発言できるような雰囲気での協議が進められるようにする。 ・協議して改善した展開案をもう1枚用意した拡大指導案に記載しておく。	・青の付箋に良かった点を、赤の付箋に気になった点を記入するよう指示する。 ・記入した付箋を説明しながら、拡大指導案に貼るよう指示する。 ・導入から始めて終末まで貼り終えたら、具体的な展開案について協議するよう指示する。
3 全体で協議する。 （30分） ○各学年やブロックからの意見について全員で協議する。	・発表時には拡大指導案をホワイトボード等に掲示し、参加者が共有できるようにする。	・司会を行う。（各グループの発表について、意見や質問を出させ、それらについて協議を進める。）
4 まとめを行う。 （5分）	・P D C Aサイクルに基づいた授業改善を行っていることと、その意義を理解する。	・改善した展開案を基に、次回の授業実践を行うことを確認する。

【評価】

◇ 授業実践を振り返り、道徳の時間の特質を踏まえた授業展開への課題が明確になり改善案を見いだすことができる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇「『導入、展開、終末』それぞれの役割と工夫チェックプリント」《別紙資料（p. 105）》と「授業参観シート」《別紙資料（p. 106）》を作成し、配付する。
- ◇教職員に、授業参観のポイントを共有できるようにプリントとシートの内容や使い方を周知する。

～拡大指導案への付箋の貼り付けや書き込み例～

主な活動と発問	予想される生徒の反応	支援・指導の留意点
1 井村医師が、娘の飛鳥を抱いている <u>写真を見て</u> 、感じたことを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいい。 ・優しい素敵なお父さんだ。 ・仲のよい親子だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・井村医師について説明する。
2 資料の範読を聞いて話し合う。 ○「人は自分の命があとわずかだと知った時に、どんな気持ちになるでしょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・死ぬのはいやだ。 ・怖い。 ・残りの人生で何ができるのか。 ・悔しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・難しい表現は易しい表現に変えたり、補足しながら範読し、内容を十分理解できるようにする。 ・まず「自分の命」の大切さを意識させる。
◎飛鳥ちゃんを見つめている井村さんは何を思っているだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなと別れたくない。 ・残された時間を大切に生きよう。 ・もっと、娘の笑顔を見ていたい。 ・大切な子を置いて死にたくない。 ・子どもたちにしてあげたいことがたくさんあったのに悔い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・死と向かい合いながらも、子どもを<u>考える親の心情と、自他の生命の大切さに気付かせたい。</u>

研修のポイントと進め方

- ◇協働での振り返りと学習指導案作りに全教職員で関わるのが大きなポイントである。それにより、教職員一人一人の主体性の向上につながる。授業後の振り返りは、授業者に遠慮し、本音が出にくい傾向があるが、全員が学習指導案作成に関わっているので、率直な意見を出すことができるようになる。
- ◇教職員一人一人が自分が作った学習指導案と感じ、今回は代表して1人に実践してもらったという意識をもたせることがポイントである。そうすることにより、授業者（次回の授業者も含めて）の精神的負担の軽減になる。

事後に実施すること

- ◇改善した学習指導案を基に授業実践を行うとともに、PDCAサイクルでの授業改善を継続させる。

期待される効果

◇全教職員がマイクロ・ティーチング（模擬授業）をすることにより，外国語活動の進め方について具体的に研修ができ，外国語活動の目指す方向性が共有されるとともに，教職員一人一人の授業力の向上を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇外国語活動について理解を深め，コミュニケーション能力の素地を育成するという視点から授業を捉え直し，外国語活動の目標と指導内容を意識した授業実践ができるようになる。
- ◇学習指導要領に照らし合わせながら，児童に身に付けさせたい力が確実に身に付いているかどうかを評価することで，教材観や児童観，指導観等に優れた見識をもつことができるようになる。

【準備物】

◇「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」，「Hi, friends! 1・2」，指導資料，デジタル教科書，「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」，教材作成時等に必要となるもの（画用紙，テープ，はさみ，のり，マーカー，コンピュータ等）

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	・マイクロ・ティーチングがスムーズに進むよう，あらかじめグループを決めておく。	・研修のねらいや内容を説明することで，研修の意義を理解できるようにする。
2 グループごとにマイクロ・ティーチングの準備を行う。学習指導案作成，教材作成，授業の練習等を行う。 (80分)	・題材や単元によっては，準備時間が不足することも予想されるが，できる範囲で行うようにする。	・グループの進捗状況を把握し，必要に応じてアドバイスをする。
3 各グループからのマイクロ・ティーチング（20分程度）の発表及び研究協議を行う。 (90分)	・発表している教職員以外は，児童役になり授業を体験することができるようにする。	・ポイントを明確にした相互評価ができるようにする。
4 研修のまとめを行う。 (5分)	・目的やポイントを十分意識できた研修となったか，振り返りを行う。	・研修のよかった点を具体的に取り上げて話をする。

【評価】

- ◇コミュニケーション能力の素地を育成するという視点から授業を捉え直し、外国語活動の目標と指導内容を意識した授業実践ができる。
- ◇外国語活動の進め方について具体的に研修ができ、外国語活動の目指す方向が共有されるとともに、授業力の向上を図ることができる。

自校化へのヒント

- ◇マイクロ・ティーチングを行うことは、外国語活動の進め方について具体的な指導法を考えるよいきっかけとなる。
- ◇外国語指導助手（ALT）の協力を得て、マイクロ・ティーチングを行うことにより深まりのある研修になる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇外国語指導助手（ALT）と連絡を取り合い、研修に参加できるよう調整する。
- ◇外国語活動主任と共に、マイクロ・ティーチングのグループ編成（学年、経験年数等を考慮）をする。また、マイクロ・ティーチングを行えそうな単元を聞いておき、グループで重ならないように調整する。さらに、グループごとに教材作成に使用するものを準備する。
- ◇教職員に、研修全体の資料を事前に配布し、研修内容を周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇各グループのマイクロ・ティーチングは、授業の展開（導入・復習・新教材提示・まとめ等）や教材・機器（CD、DVD、デジタル教材、電子黒板等）の視点から一つ程度取り出して行う。その際、何を取り上げるかは各グループに任せるが、できるだけ重複を避け、授業全体を通したマイクロ・ティーチングになるようにすることがポイントである。
- ◇マイクロ・ティーチングの発表後の研究協議では、相互評価のポイントに基づいて意見を交換することが大切である。

事後に実施すること

- ◇研究協議の記録をプリントにまとめて配付する。
- ◇教職員にアンケートをとって、今後の外国語活動の研修をどのように進めたらよいか、意見を集約し、次の研修に生かすようにする。

参考資料等

- 独立行政法人教員研修センター「You can do it.」（DVD）
- 文部科学省「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」

期待される効果

◇協働的な研修を進めることで、それぞれの特性や専門性を生かしながら、協力して取り組むことができ、総合的な学習の時間における校内の体制づくりにつながり、組織力を高めることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇事前のフィールドワークによって得た新たな地域素材から教材としての特性を分析したり、探究的な学習として単元を構想したりする活動を通して、総合的な学習の時間の工夫改善を図る。

【準備物】

◇「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」、「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）」、ウェビング用模造紙、単元の構想をするためのワークシート、マジック、付箋、地域素材に関する資料

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分）	・ワークショップの進め方を説明し、意欲付けをする。	・明るく協働的な雰囲気をつくるようにする。
2 単元を構想する。（90分） （1）教材とする素材を選ぶ。 （2）教材の特性を調べる。 （3）単元を構想する。	・活動グループは、あらかじめつめておく。 ・教材とする素材を選ぶ視点を示す。 ・選んだ素材が、教材としてふさわしいかをウェビングで確かめていく。 《ウェビング（p.30）》 ・探究的な学習における一連の学習過程から単元が展開するイメージを思い描けるようにする。	・グループを回りながら進捗状況を把握し、必要に応じてアドバイスをする。
3 構想した単元について発表をする。 （20分）	・グループごとに模造紙などを提示しながらプレゼンをする。	・各グループの単元の構想のよさを肯定的に受け止められるようにする。
4 研修のまとめを行う。 （5分）	・この研修で得たことを共有する。	・研修のよかった点を具体的に取り上げて話をする。

【評価】

◇新たな地域素材から教材としての特性を分析したり、探究的な学習として単元を構想したりする活動を通して、総合的な学習の時間の工夫改善を図るための視点や手立て等を見いだしている。

自校化へのヒント

◇事前にフィールドワーク等を行い、地域を知る活動を位置付けることで、組織全体として、地域の特色を生かした総合的な学習の時間を構築するための共通理解を図ることができる。

ファシリテーターの事前準備

◇研究主任と共に、事前準備する。

- ①活動グループの編成（教科や年齢，経験年数等を考慮）をする。
- ②教材とする素材を選ぶ視点を，育てようとする資質や能力・態度，参考資料等を基に，整理しておく。
- ③事前のフィールドワークの計画を立てる。（必要に応じて，外部講師等を依頼する。）

◇教職員に，事前のフィールドワークを通して，地域の特色を生かした素材集めをする。

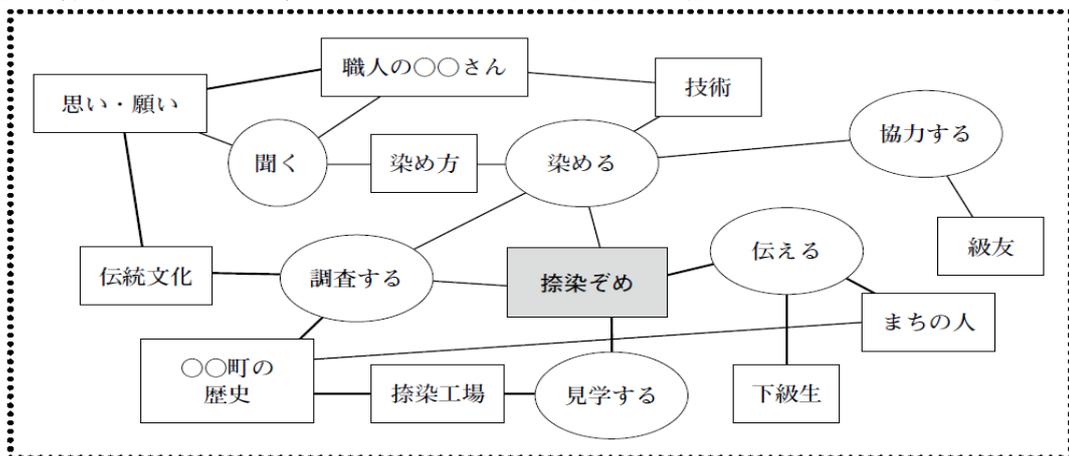
研修のポイントと進め方

◇地域の特色を生かした教材の開発や単元の構想を通して，教材開発の在り方や地域素材の生かし方について具体的に研修をすることで，授業改善に向けて新たな視点が得られる。

〈教材の特性を調べる〉

◇ウェビングで，教材としての広がり，対象，活動などを予測していく。（模造紙）

例：捺染ぞめ ※「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」より



〈単元を構想する〉

◇学習過程が探究的になるように，「課題の設定」，「情報の収集」，「整理・分析」，「まとめ・表現」の四つの学習活動から構想していくようにする。その際，進め方については，「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」（p. 86）から参照する。

事後に実施すること

◇構想した単元を単元案としてファイリングをし，地域素材の教材バンクとして活用できるようにする。また，単元案を基に指導計画を作成し，授業実践と分析を行い，単元案に修正を加えていく。

参考資料等

文部科学省「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」平成22年11月，「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）」平成22年11月

【特別活動】 特別活動の評価の進め方

小・中・特

第1学期 [5月頃] 約70分(提案授業の時間を除く) ワークショップ 全教職員

期待される効果

- ◇学級担任以外の教師が指導や評価をすることが多い特別活動の評価の進め方を共通理解することで、組織的・計画的な指導と評価を学校全体で推進することができる。
- ◇提案授業を全教職員で参観することで、学級活動の進め方について理解が深まり、一人一人の学級活動の授業力の向上が図られ、協働意欲を高めることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇特別活動（学級活動）の評価の進め方や留意点について理解し、また、児童生徒のよさや進捗の状況などをどのように捉えるか共通理解を図る。

【準備物】

- ◇提案授業の学習指導案、指導要録の様式（特別活動の記入欄があるもの）、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」、目指す児童像の設定までの流れ《別紙資料（p.107）》

【展開】

- ◇学級活動の提案授業を事前に実施し、全教職員で参観する。

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分） ○特別活動の三つの観点と評価規準の確認 ○評価の進め方の共通理解	・評価に、妥当性や信頼性をもたせるために、教師の見取りの差を小さくするという必要性がもてるようにする。	・指導要録の特別活動の評価欄に○を付けることを想定し、研修の意義を伝える。
2 「評価規準」、「目指す児童生徒の姿」、「十分満足できる活動の状況」の意味について確認する。 （10分）	・別紙資料から、語句の整理をする。 ・これから何を話し合っていくのか見通しをもつ。	・話し合いを前に教師の理解をそろえるために、別紙資料を説明する。
3 授業者が設定した本時の目指す児童生徒の姿について、どの児童生徒を十分満足できる活動の状況と判断したのかをグループ内で意見交換する。 （40分） ○授業者が提案授業における「目指す児童生徒の姿」を説明	・三段階で評価をする教科と○印を付けるか付けないかの二段階で評価をする特別活動の評価の違いを理解する。	・授業を提案してくれた先生をねぎらう。 ・見取りの違いが出てきたときは、双方が理由を述べ、見取りの差をなくすように助言していく。
4 協議したこと、分かったことを発表する。 （10分） ○各グループから代表者が発表	・各グループの話し合いの内容を共有するとともに、目指す児童生徒の姿を増やしていく。	・この研修では、どの児童(生徒)が十分満足できる活動の状況かという見取りをそろえること、特別活動の評価が二段階で評価することを全教職員が自分たちの協議から理解できるようにしたい。
5 研修のまとめをする。 （5分）	・評価の手順と方法について発表から出たこと、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」の中から資料を提示して理解を深める。	

【評価】

- ◇学級活動の評価規準に照らしてどの児童生徒を「十分満足できる活動の状況」と判断したのか意見交換をし、本時の「目指す児童生徒の姿」を設定することで児童生徒を見取る視点をそろえ、評価の進め方を理解している。

自校化へのヒント

- ◇提案授業の参観は、学級活動の進め方の研修にもなる。学級活動の進め方を統一していない学校は、指導方法の視点で研修することができる。
- ◇「目指す児童生徒の姿」をこれから設定する学校は、この研修を基に、予定されている学校行事（運動会など）の「目指す児童生徒の姿」を話し合ってみてもよい。

ファシリテーターの事前準備

- ◇協議のグループを作る。ねらいをもって意図的に作れるとなおよい。
- ◇特別活動主任に、学級活動の評価規準を配付しておくように依頼する。
- ◇提案授業者に、授業づくりの相談に乗ったり、アドバイスをしたりする。
- ◇教職員に、別紙資料を配付し、「評価の観点」、「評価規準」、「目指す児童生徒の姿」、「十分満足できる活動の状況」が意味するところを理解しておくように伝える。また、授業を参観できる時間帯を確認し、填補等の調整をしておく。授業を参観する際は、視点を明らかにし、評価規準に照らした「十分満足できる活動の状況」となる児童生徒の姿を見付けるように話しておく。必要ならば、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」の十分満足できる活動について具体的に書かれている部分を読めるようにしておく。

研修のポイントと進め方

- ◇提案授業者との打合せを大切にし、「提案をしてよかった」と思えることが次の研修の提案授業者に安心感をもたせ、進んで研修をする職場の雰囲気づくりになる。
- ◇特別活動においては、「十分満足できる活動の状況」を広く捉え、画一的にならないことが大切である。目指す児童生徒の姿を複数設定し、一つにまとめるものではないことを押さえておくとよい。
- ◇授業を参観している時に、「目指す児童生徒の姿」に照らし合わせて、十分満足できる活動の状況と見取った児童生徒の様子を付箋に書いておくと、具体的に考えることができ、意見交換が活性化する。

事後に実施すること

- ◇担任はこの手順を生かし、学級活動の評価規準に則した「目指す児童生徒の姿」を複数設定するようにする。担任外は担当している委員会等で設定してみる。
- ◇作成したものは、研究主任等がまとめて冊子にしたり、全体計画等に生かしたりする。

参考資料等

国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 特別活動】」平成23年11月

第3編 評価に関する事例	学級活動(1)の指導と評価	3	評価方法の工夫例 (p. 40～p. 42)
	学級活動(2)の指導と評価	3	評価方法の工夫例 (p. 49～p. 51)

国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 特別活動】」平成23年11月

第3編 評価に関する事例	3	学級活動(1)の指導と評価	(2) 評価方法の工夫例 (p. 36～p. 37)
	4	学級活動(2)及び(3)の指導と評価	(2) 評価方法の工夫例 (p. 42～p. 43)

【特別活動】 目指す児童生徒像の具現化を図る特別活動

小・中・高

第3学期【2月頃】 約70分 ワークショップ 全教職員

期待される効果

◇学校経営プランに掲載されている「目指す学校像」，「目指す児童生徒像」の視点を取り入れて特別活動の指導の改善の見通しを立てることで，特別活動が目指す学校像，児童像へ近付くための手立てとなり，共通認識をもつことができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇学校経営プランに掲載されている「目指す学校像」，「目指す児童生徒像」を特別活動の指導の改善に反映させる。

【準備物】

◇学校経営プラン（グラウンドデザイン），特別活動改善シート《別紙資料（p.109）》，付箋

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分） ○特別活動における学校経営プランの具現化	・目指す児童生徒像等を明確にするため，ワークシートの欄に記入する。	・ファシリテーターが学校経営プランを確認し，目指す学校像，または児童像を確かめさせる。
2 学校経営プランに掲載されている学校像，児童生徒像に近付くため，特別活動において，いつ，どの内容で児童を育てていくか意見を交換する。（45分） (1) 今年度の反省をする。 「Check欄」 (2) 「目指す学校像」，「目指す児童生徒像」と関連をさせ，特別活動で何に取り組んでいけるかアイデアを付箋に記入する。「Action欄」 (3) 「Action欄」に記入したものをグループで出し合う。 (4) 「Action欄」に書いたことをできるだけ具体的に（いつ・どの内容で行うか）記入する。「Plan欄」	・学校経営プランを全教職員で見直し，教育活動を振り返り，次年度に生かす意識をもてるようにする。 ・特別活動に限定せず，目指す児童生徒像に関する反省点を付箋に書く。 ・「Check欄」に貼った付箋の児童の様子を改善するため，特別活動のどの内容でどんな指導ができるのかを付箋に書く。 ・思い付くままにアイデアを出す。この段階では，質より数を求めている。 ・特別活動改善シートに，付箋を貼っていく。	・KJ法を取り入れ，多くの意見を出せるようにする。 ・個人ワークの時間は，一人一人が自分の考えを整理できるように見回っていく。 ・(3) からグループ協議となる。適切に司会を立てて話し合うように助言する。
3 発表し，意見を交換し，共有する。（10分） ○実行可能と思われる意見をグループの代表者が発表する。	・似た意見をまとめたり，言葉を練り上げたりして精選していく。 ・いくつもあるときは特にやってみたいことに絞って話す。	・実行可能な意見が教職員から出たことを一つの成果とし，取り組む意欲へとつなげたい。
4 研修のまとめをする。（10分） ○特別活動主任が意見を生かし，まとめる。「Do欄」	・学校経営プランの具現化を目指しながら，特別活動に取り組んでいくことを全教職員で共通理解する。	・4月に校務分掌が発表になってから，特別活動でどのようなことができるか考えてみようと呼びかけておきたい。

【評価】

◇学校経営プランに照らし合わせて特別活動を改善し、取組の重点を共有化することができる。

自校化へのヒント

◇学校経営プランを踏まえ、P D C Aサイクルを生かした特別活動の全体計画を作成できる。また、特別活動だけでなく、他教科等にも応用することもできる。

ファシリテーターの事前準備

◇学校の実情に応じてグルーピングをしておく。例えば特別活動の内容ごと（学級活動、児童会（生徒会）活動、学校行事）や学年ごとというグルーピングが考えられる。

研修のポイントと進め方

- ◇「目指す学校像」, 「目指す児童生徒像」の観点で特別活動の取組を振り返っておく。
- ◇特別活動主任, 児童会活動担当など, 特別活動に関わる校務分掌を担当している教員にこの研修の意義と目的を伝えておき, 活躍してもらうように励ます。
- ◇研究協議では話し合いで出てきた意見を生かしながらまとめていく。
- ◇ファシリテーターが中心となって進めるが, 協議の中で特別活動主任の出番を作ること, 組織や校務分掌を意識しながら進める。
- ◇学校経営プランを一人一人の職員に浸透させ, また, 特別活動は全職員で取り組んでいく意識を醸成する。

事後に実施すること

◇次年度に向けて, 学年会等で, 学級活動の指導の重点目標を作成してみると更によい。

参考資料等

文部科学省「学習指導要領解説 特別活動編」（各校種）

特別活動改善シート（記入例）

	Check 【評価】	Action 【改善】	Plan【目標設定】
進んで学習する子	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習が十分でない。 ・発表が苦手 ・ノートの取り方に課題がある。 ・読書がすき 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級活動（2）（又は（3））で自主学習を題材にする。 ・係活動等でノート展を開く。 ・図書委員会主催で読書集会で更に盛り上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画を見直す。 ・係活動の時間に児童（生徒）に投げかける。 ・委員会担当が提案する。
親切で明るい子	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶の声小さい ・校歌の歌声小さい ・友達関係が固定化 ・指示を待つて自ら動けない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童会（生徒会）の挨拶運動の取組を工夫する。 ・全校集会で校歌を歌うようにする。 ・異年齢集団活動を取り入れ, 新しい人間関係を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童会（生徒会）担当から児童（生徒）に気付きを与える。 ・年間指導計画を見直す。 ⋮

2の(1)の活動。
付箋に書く。

2の(2)(3)の活動。(2)では個人で付箋にアイデアを書いていく。たくさん出す。
(3)ではそれらをまとめていく。

2の(4)の活動。グループ協議では, 似た意見をまとめて, いつ(3月に), どの内容で(学級活動(2)で)を考えながら, まとめていく。

期待される効果

- ◇TV会議・電子会議室を授業で活用した協働学習及び交流授業の実践を通して、教員の連携意識や意欲を高めることができる。
- ◇茨城県教育情報ネットワークを校務に活用することで、教職員間で情報を共有したり、校務に関わる情報を電子化したりすることができ、校務の軽減と効率化を全校で図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇教育情報ネットワークで提供している各機能の特性を理解し、授業や校務で利用できるように準備することができる。
- ◇コミュニケーションツールを介して、他のクラスや他学年、他校の児童生徒と交流したり、評価し合ったりする活動を行うことにより児童生徒の意欲的な学習を促すことができる。

【準備物】

- ◇インターネットに接続されたPC，教育情報ネットワーク研修用テキスト（[参考資料等]に掲載されている場所からダウンロード）

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 教育情報ネットワークの概要を知り、授業や校務で使えるようにする。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員で助け合いながら、実習することで同僚性を高められるようにする。 ・教育情報ネットワークにログインするためのIDとパスワードを準備しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明るく協働的な雰囲気をつくるようにする。
2 教育情報ネットワークの概要を知る。 （10分）	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストp.1～p.4を参考に進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スモールステップで研修を行い、教育情報ネットワークを活用したことのない教員が、それぞれの目標を達成できたかどうかについて確認を取りながら研修を進める。
3 各機能の実習を行う。 （各15分） (1) 電子メールの送受信 (2) アンケート作成・回答 (3) 公開範囲の設定 (4) 電子会議室のスレッド作成 (5) TV会議システムで交流活動	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストp.6～p.9を参考に進める。 ・テキストp.10～p.12を参考に進める。 ・テキストp.13～p.15を参考に進める。 ・テキストp.16を参考に進める。 ・テキストp.17～p.18を参考に進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「茨城県教育情報ネットワーク活用パンフレット」に掲載されている各学校の実践例を参考に活用場面においての自校化を図る。
4 各機能の活用場面を考える。 （10分）	<ul style="list-style-type: none"> ・新たな交流の場の提供、校務情報の共有の観点から活用場面を考える。 	

【評価】

- ◇教育情報ネットワークの各機能を活用し、授業や校務における効果の高さを実感し、その利点を積極的に活用した授業の指導計画や校務への活用方法を立案できる。
- ◇〈ファシリテーター〉参加者に授業や校務で教育情報ネットワークの各機能を積極的に利用しようとする意欲をもたせることができる。

自校化へのヒント

◇授業や校務で教育情報ネットワークの効果的な活用を進めていくためには、限られた研修時間を有効に使っていくことが大切である。そのためには、研修参加者の習熟レベルの把握や利用実態に応じた具体的な達成目標の設定、研修を推進する教員の育成、外部講師の活用等を考慮した研修計画の作成が必要である。

ファシリテーターの事前準備

◇情報教育主任に、研修参加者の教育情報ネットワーク活用状況の把握を依頼する。また、教育情報ネットワークのポータルサイトが研修用PCのブラウザで閲覧可能かを確認するとともに、教育情報ネットワークのポータルシステムビデオマニュアル (http://www.ibk.ed.jp/video_manual/) 等で、研修内容についての概要を事前に把握しておくように依頼する。

◇教職員に、教育情報ネットワークログインアカウント（ログインID、パスワード）を事前に確認しておく。パスワードを失念した教職員がいる場合は、情報教育主任と共に、教育情報ネットワーク管理室にパスワードの再発行申請をする。

研修のポイントと進め方

◇効果的な研修にするためには、内容が容易過ぎたり、難し過ぎたりしないように、教職員の実態（教育情報ネットワークの活用状況等）を把握しておく必要がある。
◇日常の教員間の教材研究や情報交換の中で、互いに知っていることを教え合うことも指導力向上の早道と思われる。

事後に実施すること

◇研修後には、ねらいが達成できたかどうか必ず評価しておくようにする。特に、校務や授業に生かせるかどうかのポイントである。

（参考資料等の「教員のICT活用指導力向上／研修テキスト増補改訂版」を参照）

◇研修後の復習や自主学習をする際に活用できる各種マニュアルやビデオマニュアルを紹介しておくとうい。

参考資料等

茨城県教育情報ネットワーク ポータルサイト [<http://www.ibk.ed.jp>]

教育情報化推進協議会「教員のICT活用指導力向上／研修テキスト増補改訂版」平成24年3月 [<http://www.t-ict.jp/>]

「教員のICT活用指導力の基準」(p.212)，「自己チェックシート」(p.225)

茨城県教育委員会「教育情報ネットワーク研修用テキスト」

【教育情報ネットワークにログイン】－【画面上の[サポート]をクリック】－
【[サポートメニュー]の[マニュアル]】－【教育情報ネットワークマニュアル】－
【各機能の簡易マニュアル】

茨城県教育委員会「茨城県教育情報ネットワーク 活用パンフレット」

【教育情報ネットワークにログイン】－【教育用コンテンツ】－【その他】－
【教育情報ネットワーク活用パンフレット】

期待される効果

- ◇ ICTの特性を理解し、授業で使用できるようになるために、実際の機器を操作する研修を行うことにより、お互いに教え合う中で協働意欲が高まり、教職員一人一人の授業力の向上を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇ ICTの特性を理解し、それを効果的に活用した授業の指導計画を作ることができる。
- ◇ ICTを効果的に活用し、分かりやすく、理解が深まる授業を展開することができる。

○教科指導において、資料等を拡大提示したり、動画や音声等を使ったりすることで、学習内容をより分かりやすく説明でき、子どもたちの学習への興味関心を高め、意欲的な学習を促す。
 ○繰り返し学習が容易にできるので、子どもたちの知識の定着や技能の習熟が図れ、情報の収集・選択・蓄積も容易であることから、文や図表にまとめて表現し、教え合う・学び合うなどの双方向性の授業を行う。

【準備物】

- ◇実物投影機，プロジェクタ，大型モニタ（TV，電子黒板），パソコン，デジタルカメラ，「教員のICT活用指導力向上／研修テキスト増補改訂版」(以下「テキスト」という。)

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。（5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">ICTの特性と使い方を知り、授業で使えるようにするとともに授業の指導計画を作ることができる。</div>	・全教職員で助け合いながら、実習することで協働性を高められるようにする。	・明るく協働的な雰囲気をつくるようにする。
2 ICTの種類と特性を知る。（10分） (1) 校内にあるICTの洗い出しをする。 (2) ICTの効果を知る。	・茨城県教育研修センターWebページ「研究」を参照する。 ・テキストp.124を参考に進める。	・普段からICTを活用している教員をリーダーとして、意見を出させたり、助言や指導をさせたりする。
3 ICTの活用例を知る。（10分）	・テキストp.125～p.126を参考に進める。	
4 ICTの接続方法等を知る。（30分）	・テキストp.127～p.129を参考に進める。	
5 ICTの活用場面等を考え、授業の指導計画を作る。（15分）	・テキストp.130～p.131を参考に進める。	

「教員のICT活用指導力向上／研修テキスト増補改訂版」p.124～p.131

【評価】

- ◇ICTを活用した授業の教育効果の高さを実感し、その利点を積極的に活用した授業の指導計画を立案できる。
- ◇〈ファシリテーター〉参加者に授業においてICTを積極的に活用しようとする意欲をもたせることができる。

自校化へのヒント

- ◇ICTが積極的に活用されていない場合には、自校にどのようなICTがあるか確かめたり、それらの効果を知ったりすることから始めることが肝要である。また、ICTが万能であるとするのではなく、それらの効果を考慮し、分かる授業を目指して、活用するICTや場면을工夫することが大切である。
- ◇ICTについては、得手不得手ははっきりしているので、できる限り操作の動作回数を少なくする工夫や設置する環境を整備することが必要である。そのためには、活用する教員が固定化することのないよう、日頃から声かけしやすい関係や手軽に利用できるような保管にも工夫し、協動的な雰囲気を大切にするとよい。

ファシリテーターの事前準備

- ◇情報教育主任に、校内のICTの整備や活用状況の把握を依頼する。また、研修に必要なICTの動作確認や研修に必要なテキストとワークシートの準備も依頼する。
- ◇教職員に、各自の授業で、ICTを活用したい授業場面や単元（題材）を準備しておくよう周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇効果的な研修にするためには、内容が容易過ぎたり、難し過ぎたりしないように、教職員の実態を把握しておくことが必要である。

【文部科学省「教員のICT活用指導力のチェックシート」】

[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1296901.htm]

- ◇研修形態を工夫して行うことが大切で、次のような研修の形態が考えられる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①ワークショップ型…伝達型の研修スタイルから主体的に参加可能なワークショップ型の研修②TT形式…複数の教員が指導する形でのチームティーチング③模擬授業形式…ICTの活用場면을想定した模擬授業 |
|---|

- ◇日常の教員間の教材研究や情報交換の中で互いに知っていることを教え合うことも指導力向上の早道と思われる。

事後に実施すること

- ◇研修後には、ねらいが達成できたかどうか必ず評価しておくようにする。特に、授業に生かせるかどうかポイントである。
- ◇ICT活用の実践記録を作成しておくこと、事後の様々な活用場面に役に立つとともにさらに工夫が加わり、充実した効果的な授業となる。

参考資料等

教育情報化推進協議会「教員のICT活用指導力向上／研修テキスト増補改訂版」平成24年3月 [<http://www.t-ict.jp>]

茨城県教育研修センターWebページ [<http://www.center.ibk.ed.jp/>]

期待される効果

◇インターネットの世界で起きていることに関する知識の習得を通し、教職員の意識を高め、学校全体で生徒指導を組織的に推進する気運を高めることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇情報モラルを指導するために必要な、以下のような知識の習得を図る。

- 自分の学校のことが書かれている匿名掲示板や、小・中・高等学校の児童生徒が運営しているブログ、プロフィール紹介サイト（プロフ）、出会い系サイト、アダルトサイトのなどの状況把握
- 情報モラルの教材・授業実践事例の情報に関する知識の習得
- 法律の知識・問題への対処に関する知識の習得

【準備物】

◇「『情報モラル』指導実践キックオフガイド」、授業事例（“情報モラル”授業サポートセンター）、情報モラル教材（ネット社会の歩き方）、保護者向け教材・教員研修向け教材（知識集約型ネットワーク社会における個の自衛）、プロジェクター、大型モニタ（TV、電子黒板）、パソコン、携帯電話等

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 情報モラルを指導するに当たって、教職員自身が知っておくべき「情報モラル」について知る。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員で助け合いながら、実習することで協働性を高められるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明るく協働的な雰囲気をつくるようにする。
2 インターネットの世界で起きていることについて知る。 （15分） ○インターネットを使って、自分の学校のことが書かれているサイトの状況を把握する。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の学校のことが書かれている匿名掲示板や、小・中・高等学校の児童生徒が運営しているブログ、プロフィール紹介サイト（プロフ）、出会い系サイト、アダルトサイトなど事前に検索し、具体的なページ（「参考資料等」を参照）を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の学校は大丈夫と考えずに、ICTを活用している教職員を中心に、意見を出させたり、助言や指導をさせたりする。
3 情報モラルの教材・授業実践事例の情報について知る。 （30分）	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストp.35を参考に進める。 ・複数の教材を自分の目で確かめて、使いやすい教材を選択するようにする。 	
4 法律の知識・問題への対処について知る。 （20分）	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストp.35を参考に進める。 ・問題が起こった場合の具体的な対処についても確認する。 	

「『情報モラル』指導実践キックオフガイド」 p.34～p.35

【評価】

- ◇情報モラルを児童生徒に指導するためには、教職員自身が情報モラルの知識をもち、教材の比較検討の作業や情報モラル教育の教材研究及び授業の指導計画を立案できる。
- ◇〈ファシリテーター〉参加者に情報モラル教育を積極的に行おうとする意欲をもたせることができる。

自校化へのヒント

- ◇自校の情報モラル教育の実態調査を行い、教職員及び児童生徒の課題を洗い出す等、情報モラルの指導に当たって教材研究を行うことは、情報モラル教育の第一歩である。
- ◇正しい法律の知識をもつことは、インターネット上で起こるトラブルに対応するために必要不可欠であり、教職員自身が法令を遵守して、児童生徒や保護者の権利を尊重することにつながる。
- ◇問題への対処については、予防教育と事後の対応があり、その両方について準備する必要がある。情報モラル教育には予防教育の面が多くあるが、問題が起きた場合の対処についても知っておく必要がある。特に、当事者の心のケアの必要性が重要である。

ファシリテーターの事前準備

- ◇情報教育主任に、情報モラルの教材・授業実践事例、テキスト、ワークシートの準備を依頼する。
- ◇教職員に、可能な範囲で、情報モラルに関する児童生徒の実態を把握しておくことを周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇児童生徒の実態を把握し、起こりえる問題への対応について、授業実践事例を基に、参加者にとって、協議しやすい内容を取り上げることが効果的である。また、無料で利用できる教材や市販の教材などを使用したり、ビデオクリップや学習指導案形式のものを扱ったりすることも有効である。
- ◇自分の学校のことが書かれている匿名掲示板や、小・中・高等学校の児童生徒が運営しているブログ、プロフィール紹介サイト（プロフ）、出会い系サイト、アダルトサイトなどを実際に関連することで、実態を把握し、その問題性について認識してもらうことも大切である。
- ◇校内研修という特別な形の研修でなくても、日常の教職員間の教材研究や情報交換の中で互いに知っていることを教え合うことも指導力向上の早道と思われる。

事後に実施すること

- ◇研修後には、ねらいが達成できたかどうか必ず評価しておくようにする。特に、授業に生かせるかどうかポイントである。
- ◇情報モラル教育の実践記録を作成しておくこと、事後の様々な活用場面に役に立つとともにさらに工夫が加わり、充実した効果的な授業となる。

参考資料等

- 日本教育工学振興会（JAPET）「『情報モラル』指導実践キックオフガイド」平成19年3月 [http://www.nctd.go.jp/5min_moral/index.html]
- 茨城県教育研修センター「情報教育に関する研究」平成18・19年度 [http://www.center.ibk.ed.jp/contents/kenkyuu/houkoku/pdf/63_jouhou.pdf]

期待される効果

◇食に関する指導は、学校給食の時間はもとより、個々の教職員がそれぞれの立場での指導も含めて、学校としての食育の基本的な考え方を共通に理解し、各教職員が相互のネットワークを構築することで、学校としての指導力を総合的に発揮するための協働意欲の向上を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇食に関する指導の進め方や方法について話し合うことで、共通理解が図られ、各教職員が相互のネットワークを構築される。

【準備物】

◇食に関する指導に係る全体計画，生徒へのアンケート調査結果，保護者へのアンケート調査結果，「食に関する指導の手引き」，ブレインライティング用紙，付箋

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 食に関する全体指導計画等の概要説明を聞く。(15分) 2 ブレインライティングの方法を知る。(5分) 《ブレインライティング (p. 28)》 3 ブレインライティングを行う。(50分) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 効果的な食に関する指導の実践 </div> (1) テーマに従って5分間で三つのアイデアを記入した付箋を貼っていく。 ※6人グループ 1人×5分×6セット (2) 同様のアイデアに分類する。 (3) 優先順位を付ける。 (4) 発表の準備をする。 4 グループごとに発表し、アイデアの共有化を図る。(10分) 5 まとめを行う。(10分) 栄養教諭・学校栄養職員が、食育推進の視点からまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 食に関する全体指導等について、本年度の計画の共通理解を図り、研修への意欲を向上する。 アンケートの結果より、児童生徒のや保護者の実態を把握する。 あらかじめ編成した協議グループ（6人）で行う。 付箋に記入されているアイデアから連想するなど、考えの広がり意識させる。 分類することで、活動の内容を練り上げて精選していく。 時期、内容、すぐ実践できることなど、食に関する指導の手立てを参考に優先順位の根拠を明確にする。 各グループに視点を気をつけて、共有化を図る。 食育の目的や意義を感じながら、児童生徒の変容を目指し、全教職員で指導に取り組みたいという思いを高める。 	[場のデザイン] ・明るく協働的な雰囲気をつくる。 ・資料を提示する。 [対人の受け止め、引き出し] ・グループを回りながら付箋の内容を把握していく。 [構造化への整理] ・各グループでの進捗状況を見ながら、必要な資料提示や補助に入る。 ・共有化を図る [合意形成] ・栄養教諭・学校栄養職員がまとめる。

【評価】

◇学校としての指導力を総合的に発揮するために、食に関する指導の進め方や方法について協議する際に、各教職員が相互のネットワークを構築することで、共通理解が図られ、協働意欲を高めることができる。

◇〈ファシリテーター〉年齢や経験にとらわれずに、教職員が意見を述べる雰囲気をつくることができる。

自校化へのヒント

- ◇食に関する指導は、全体計画を基に、関連する教科等において、食に関する学習内容や題材・教材、学習活動などを相互に関連付けながら、教科横断的な進め方や方法について話し合い、各教職員が相互のネットワークを構築することで、取り組もうという意欲が向上するように励ます。
- ◇学級や校務分掌、教科を横断的に研究協議をすることで、共通理解が図れる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇ブレインライティング用のグループを編成し、ブレインライティングシート、付箋を準備する。
- ◇栄養教諭・学校栄養職員に、食に関する指導に係る全体計画の作成、生徒用アンケートの作成・集計がされているかを確認する。
- ◇給食主任に、給食の時間の運営計画や給食委員会活動計画が作成されているかを確認する。
- ◇成人教育委員会（PTA研修会）主任に、保護者との連携（成人教育講演会等）について全体計画や、保護者用アンケートの作成・集計がされているかを確認する。
- ◇教職員に、食に関する指導と学習内容や題材・教材、学習活動などを相互に関連付けて整理するように周知する。また、教科横断的な進め方や方法について、各自の意見や教職員相互の協力体制についてまとめるように周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇ブレインライティングの手法を活用し、食に関する指導に係る全体計画を基に、給食、特別活動（学級活動、学校行事、児童生徒会活動）、総合的な学習の時間、道徳や関連する教科等において、教職員がそれぞれの立場での指導を振り返ることで、多数のアイデアが出るようにする。
- ◇児童生徒の実態や保護者の意見、食に関する全体計画を、分かりやすい資料で提示し、学校全体の取り組む方向性と教職員の指導場面をリンクさせることで、進んで研修する雰囲気づくりに努める。
- ◇ブレインライティングのグループ編成では、教職員相互のネットワークが構築され、共通理解が図られるように、年齢、性別、学年、校務分掌等を考慮する。

事後に実施すること

- ◇食に関する指導と各教職員の指導場面の関連を、教科、学年、校務分掌ごとに整理して、実践順位を基に実践に取り組む。
- ◇作成した意見は研究主任や栄養教諭・学校栄養職員がまとめて、冊子や全体計画等に反映する。

参考資料等

- 文部科学省「食に関する指導の手引き」平成19年3月
- 独立行政法人教員研修センター「教員研修の手引き－効果的な運営のための知識・技術－」平成24年3月

[キャリア教育] キャリア教育の視点から自分の授業を捉え直す

小・中・高

第3学期 [1月] 約70分 ワークショップ 全教職員

期待される効果

- ◇キャリア教育の視点から授業を捉え直し、各教科の指導内容とキャリア教育で育成する「基礎的・汎用的能力」との関連を意識することで、今後の授業実践に向けて新たな視点を得ることができ、教職員一人一人の授業力の向上を図ることができる。
- ◇キャリア教育の視点で授業を捉え直すことで、教育課程の改善を促進することができ、組織全体で目指す方向を共有することができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇各教科の指導内容と社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力としての「基礎的・汎用的能力」との関連について理解を深める。
- ◇キャリア教育の視点から授業を捉え直すとともに、キャリア教育と関連を図った授業実践ができる。

【準備物】

- ◇「キャリア教育の手引き」、各教科の「学習指導要領解説」、各自が作成した「学習指導案」、付箋

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	・学習指導案を基にした話合いがスムーズにできるよう、予め教科別の小グループ形態になっておく。	・事前の教科主任との打合せから、これまでのキャリア教育との関連を図った取組の状況をつかんでおく。
2 各自用意した学習指導案をキャリア教育の視点で見直す。同じグループ内（教科）で読み合わせを行い、検討する。 (30分)	・見直しや検討しやすい単元、題材を選んでおく。選んだ単元、題材の学年間の関連にも留意していくようにする。	・グループの話合いの状況を把握し、必要に応じて助言する。
3 各グループ（教科）からの報告、情報交換を行う。 (15分)	・キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」を、学習指導案上でどのように捉えたかを中心に、報告や情報交換を行うようにする。	・教科間で共通するところや、関連付けができるところを、整理して提示できるようにする。
4 他教科における学習との関連付けについて、話合いを行う。 (15分)	・他教科との結びつきやつながりについて、意見交換を行う。	・3で出てきたいくつかの事例を基に、話合いができるようにする。
5 研修のまとめを行う。 (5分)	・目的やポイントを十分意識できた研修となったか、振り返りを行う。	・研修のよかった点を具体的に取り上げて話をする。

(中学校の例)

【評価】

- ◇キャリア教育の視点から学習指導案を見直し、協議することによって、学校全体でキャリア教育との関連を意識した授業づくりについて理解を深めることができる。

自校化へのヒント

- ◇若手教員がいる学校や専門的な教職員がいない場合は、あらかじめ検討する教科を絞って、研修内容に深まりをもたせる方法が考えられる。また、時間が十分にとれない場合は、上記の展開4の内容を別の機会で行うことが可能である。

ファシリテーターの事前準備

- ◇研究主任や教科主任と共に、話し合いのための小グループを、教科や学年及び経験年数等を考慮して編成する。
- ◇教職員に、校種ごとの「キャリア教育の手引き」の各教科等における取組（特に実践のポイント）について、理解を深めておくように周知する。また、各教科等のねらいや指導内容を踏まえた上で、キャリア教育との関連を図りたい単元や題材を考えておくようにし、各教科等のねらいや指導内容をキャリア教育の「基礎的・汎用的能力」の視点から整理しておくように周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇各教科を通したキャリア教育実践についての基本的な考え方として、各教科の目標やねらいを踏まえ、キャリア教育の視点から各教科において育むことのできる能力を捉える。
- ◇学習指導案の中で、キャリア教育の視点から見て特に重要な記述はどの部分か、またそれは、「基礎的・汎用的能力」のどの能力が身に付くことになるのかを明確にする。進め方の例として、重要な記述にはマーカー等を用いたり、「基礎的・汎用的能力」のどの能力かについては、能力ごとに色別の付箋を活用したりする。

※ 理科の例（ここでは展開部分の一部を示す）

学習内容・活動	教師の支援・評価
<p>1 本時の学習課題を知る。</p> <p>(1) 前時の復習をする。</p> <p>(2) 本時の学習課題を聞く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>イカを解剖し、軟体動物の特徴を確認し、これまでに学習した動物との共通点と相違点を見付けよう。</p> </div> <p>2 課題解決のための観察をする。</p> <p>(1) 観察の方法を聞く。</p> <p>(2) 外形の観察をする。</p> <p>(3) 腹側から外套膜を切り開く。</p> <p>(4) 体の中のつくりを観察する。</p> <p>(5) 体のつくりの特徴をまとめ、これまでに学習した動物と比較する。</p>	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>観察の内容が安全であることと、成功させるポイントを予備実験などで確認しておく。</p> </div> <p>◇生徒が自由に発言できる雰囲気をつくり、共感的な姿勢で活動を支援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イカの体のつくりについて確認をする。 ・各グループに観察手順と、イカの解剖図を用意し、自信をもって観察を行えるようにする。 <p>◇生徒の意見や発言を尊重し、生徒が活動に対して主体的に取り組めるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で役割分担をすることで、一人一人の活躍の場を作るようにする。

教師の支援・評価欄の◇は、キャリア・カウンセリングの視点・配慮である。

また、これまでに学習した動物との共通点と相違点を見付けるという学習課題が、自然の事物・現象に関する様々な情報を収集・理解して課題解決に活用する「課題対応能力」に関わっている。

事後に実施すること

- ◇各学習指導案で検討し、整理されたものを「基礎的・汎用的能力」のそれぞれの能力ごとに一覧にまとめておく。このことが、教科を越えた単元や題材のつながり、関連付けを考えるためのヒントとなる。
- ◇学習指導案を基に検討した今回の研修を、できるだけ授業実践につなげていくようにする。

参考資料等

文部科学省「小学校キャリア教育の手引き<改訂版>」平成23年5月、「中学校キャリア教育の手引き」平成24年3月、「高等学校キャリア教育の手引き」平成24年11月

期待される効果

- ◇自校のキャリア教育の全体計画を基に、「いつ」、「何をすべきか」を具体的に示す年間指導計画を作成する過程で、児童生徒に身に付けさせたい能力や態度について学年内の教職員で共通理解を図ることができる。
- ◇各教科等の取組を振り返って、キャリア教育の視点で「つながり」を意識し、学年ごとの重点目標の設定に向けてアイデアを出し合い、指導に関する情報を共有することができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇キャリア教育の目標を設定して、目指す児童生徒像を明確にし、各教科等のつながりを考えて、学年ごとに年間指導計画を作成する。その過程で、次年度に向けてキャリア教育における自校の育成したい能力や態度を明らかにし、重点化を図る。

【準備物】

- ◇「キャリア教育をデザインする」、自校のキャリア教育の全体計画、今年度のキャリア教育の年間指導計画、付箋等

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	・キャリア教育の全体計画を基に、自校における取組の方針、生徒の実態等をおさえた上で、学年ごとの重点目標や年間指導計画の作成について確認する。	・今年度のキャリア教育の取組の反省点を十分反映させて作成するよう助言する。
2 学年の目指す生徒像を踏まえて、学年ごとの重点課題や中心となる指導内容を決める。 (10分)	・既存の教育活動とキャリア教育との共通部分や関連性が把握できるようにするとともに、横断的につながりをみていくようにする。	・具体的な現状把握と達成の検証が可能な目標設定との差に着目するように促す。
3 各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動のそれぞれの取組をどうつないでいくか、について話し合い、年間指導計画を作成する。 (40分)	・既存の教育活動とキャリア教育との関連性が把握できるようにするとともに、横断的につながりをみていくようにする。	・『キャリア教育をデザインする』の中で紹介されている事例を参考にして進めるよう促す。
4 他学年の取組や計画について情報を共有する。 (10分)	・情報の共有とともに、学校課題との関連や今後の指導の重点等を確認する。	・実際に無理なく活用できる計画になっているか検討する。
5 研修のまとめを行う。 (5分)	・次回の研修会において、各学年のキャリア教育の推進状況について情報交換することを確認する。	・次回の研修会までに準備すべきことを確認する。

(中学校の例)

【評価】

- ◇キャリア教育の年間指導計画の作成を通して、自校の児童生徒に育成したい能力や態度が明確になり、学年ごとの重点化を図ることができる。

自校化へのヒント

◇単学級の学校など小規模の学校では、学年ごとでなく、はじめから全体での話し合いや年間指導計画の作成を行う場合が考えられる。また、研修時間が十分に確保できない場合は、【展開】の3と4をそれぞれ分けて行うことが可能である。

ファシリテーターの事前準備

- ◇学年主任と共に、事前の打合せで、学年ごとの重点課題や重点的に進めたい内容（キャリア教育の「断片」）の洗い出しを行う。
- ◇教職員に、参考資料『キャリア教育をデザインする』に目を通して、キャリア教育の視点で、単元や題材等が「どうつながる」のか、理解を深めておくことを周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇年間指導計画の枠を拡大して、付箋を活用して単元または題材のつながりや関連付けを矢印等で結び付ける作業を行っていく。その過程で、つながりをもたせる理由や関連付けの意図を明確にする。
- ◇つながりや関連付けを考えていく上で、「基礎的・汎用的能力」との関係をおさえて、体系的・系統的な指導になるようにする。そのときのポイントとして、児童生徒の実態をよく見極め、できるところから無理なく体系化していく。
- ◇育成したい能力や態度の設定と重点化を図る際に、「どの時期に」重点的に行うかは大切なポイントである。場合によっては、話し合いを重点的に行う時期に絞り、年間指導計画の一部作成（例えば2学期のみ）も研修の進め方の一つである。

	教科	道徳	総合的な学習の時間	特別活動
10月	・Reach Your Dream (外国語)	・法について考えよう	・販売計画の立案 ・プロからのアドバイスを もとに販売計画を修正しよう	・文化祭（学校行事） ・文化祭を成功に導いた もの（学級活動）
11月	・私たちの消費生活 (技術・家庭)	・希望に向かって	・商品の宣伝・販売	
12月		・個性を伸ばそう	様々な職業の人の話を 聴き、自分の将来に向 けてのプランを立てよ う	・冬休みの計画を立てよ う（学級活動）

上図（『キャリア教育をデザインする』より一部改変）は、あくまでも作業イメージの例であり、各学校で枠の取り方は工夫して作成していくようにしたい。

矢印などでつながりをもたせる理由や関連付けの意図、「基礎的・汎用的能力」との関係などを示すことが望ましい。

事後に実施すること

- ◇学年間の系統性が確保され、基礎的・汎用的能力が十分育まれるものになっているかどうかを点検する。併せて、重点化を図る事例が、それを通して「どのような力を身に付けようとしているのか」を明確化しておく。
- ◇実践と評価を意識して、PDCAのマネジメントサイクルをおさえる。

参考資料等

国立教育政策研究所「キャリア教育をデザインする『今ある教育活動を生かしたキャリア教育』—小・中・高等学校における年間指導計画作成のために—」平成24年8月

期待される効果

- ◇身近な課題を取り上げて行う参加体験型人権学習の職員研修として行い、人権に関する知的理解とともに大切な人権感覚を身に付けることができる。
- ◇教師のものの見方・考え方は、直接、児童生徒に影響を与えることから、教師自身が人権意識や人間性を高め、日常生活の中で児童生徒に示していくことができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇「個人→グループ→全体→個人（振り返り）」という学習の展開で構成された参加体験型人権学習を職員研修として行うことにより、ファシリテーターとしての実践力を高める。
- ◇「女性の人権」について、身近な課題を取り上げて考え、女性と男性がその特性を生かしつつ、対等の立場で協力し合えるように、この課題についての関心と理解を深めていく。

【準備物】

- ◇「人権教育指導資料（第33・34集）」、ワークシート

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	・様々な人権課題があることと、参加体験型の学習で学び合うことの意義について説明する。	・「人権教育指導資料第34集」で、様々な人権課題について確認する。
2 学習プログラム「女性の人権を守ろう」を行う。(40分) (1) エンカウンターの中のエクササイズ（4人程度のグループ作り）を通してウォーミングアップを行う。 (2) ワークシート（宇宙飛行士山崎直子さんの写真、ことば・表現から考える女性の人権）を使って、一人一人個別に自分の考えをまとめる。 (3) グループで自分の考えを発表し合い、お互いの感じ方や考え方について確かめ合う。 (4) グループで話し合ったことを全体の場で発表し合う。 (5) この問題について「何が大切か」、気付いたことをまとめ、振り返りを行う。	・「人権教育指導資料第33集」の事例を利用して学習プログラムを進める。 ・アイスブレイキングにより、グループ作りを行うとともに、参加者の緊張感をほぐす。 ・ワークシートの例以外にも、女性に対する差別を感じるような「ことば」や「表現」を出し合わせる。 ・「ことば」や「表現」の何が「差別」なのか、また、どんな時に使ってしまおうのか考えるように助言する。 ・「ことば」や「表現」には、いろいろな意味合いや考えがあることを理解させるとともに、用いる人の意識が反映されるものであることを認識させたい。 ・何が差別であるのかを知ることだけが問題なのではなく、それを用いる人の考え方や意識を見直すことが大事であることが理解できるように促す。	・写真を見て、「感じたこと、考えたことを記入してみましょう。」という言葉かけから入る。 ・写真を基に、最近まで女性が就けなかった職業を出し合い、その理由や矛盾点について話し合うことも活発な話合いのきっかけになる。 ・ワークシートの「ことば」や「表現」の置き換え例を示し、現在どのように言い換えられているのかを考えさせる。 ・様々な人権に関わる「ことば」、「表現」について考えてみる大切であることを説明してまとめる。
3 研修のまとめを行う。 (5分)	・日常生活で、何気なく使われている言葉や表現であっても重い意味もつことに気付かせていく。	

※様々な人権課題については、毎年法務省人権擁護局から、その年の「啓発活動年間強調事項」が発表されるので参考にする。

【評価】

◇参加体験型人権学習で学ぶ人権教育に関する職員研修を通して、人権に関する知的理解や人権感覚を身に付けるとともに、人権教育を推進するための実践力を高めることができる。

自校化へのヒント

◇様々な人権課題への意識を高めるために、茨城県教育庁総務課人権教育室で貸し出しを行っている視聴覚教材を、研修の前後で活用する。

※人権教育に関する視聴覚教材は、下記のところにも備えてある。

- ・茨城県人権啓発推進センター
- ・水戸地方法務局人権擁護課（茨城県人権啓発活動ネットワーク協議会）
- ・茨城県立図書館

ファシリテーターの事前準備

◇研究主任と共に、人権教育に関する職員研修について、児童生徒の実態や教職員のニーズ等、学校の課題を考慮して研修の計画を立て、実施できるようにする。職員会議等で行えるようなミニ研修についても、柔軟に実施できるように計画を立てる。

◇教職員に、参考資料となる「人権教育指導資料」の該当ページを、必要に応じて印刷及び配付しておき、事前に研修の流れをつかんでおくように周知する。

研修のポイントと進め方

◇様々な人権課題の研修については、知識伝達型の講義形式の学習に偏りがちとの指摘があるが、日常生活の中で人権尊重を基本においた行動が現れるような人権感覚を育成する参加体験型の学習プログラムを開発し実践していく。

◇参加体験型の研修の学びを通して、様々な人権に関わる「ことば」や「表現」についても考えを広めていけるように展開する。

事後に実施すること

◇大人のものの見方・考え方は、直接児童生徒に影響を与えることを全体で理解し、日常生活の中での「ことば」や「表現」について言語環境を整えていくようなミニ研修を計画し実施する。

◇学校便りや研修便り等で、今回の研修の様子、参加した教職員の声をまとめ、人権教育の取組として発信する。

参考資料等

茨城県教育委員会「人権教育指導資料 第33集 人権学習プログラム—人権が尊重される社会の実現をめざして—」

茨城県教育委員会「人権教育指導資料 第34集 みんなえがお」

期待される効果

- ◇全教職員で主体的、実践的な研修を行うことで、学校の教育活動全体を通じた人権教育の推進を図ることができる。
- ◇感じ、考え、表現する活動を主体的、実践的、協力的に取り組む模擬授業での研修として行い、人権に関する知的理解とともに大切な人権感覚を身に付けることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇人権教育指導資料の事例を利用し、「導入→説明→活動→振り返り」という一連の展開で構成された参加体験型の学習を模擬授業で行うことにより、各種資料の活用の仕方を理解するとともに、人権教育を推進するための実践力の向上を図る。

【準備物】

- ◇「人権教育指導資料（第26・34集）」、ワークシート（個人用、協議用）、付箋

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・参加体験型の学習で学び合うことの意義について説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研修のねらいに合った模擬授業の事例を選ぶ。
2 模擬授業「テーマ：あなたならどうする－差別・いじめ－」を行う。 (40分) (1) エンカウンターの中のエクササイズ（4人程度のグループ作り）を通してウォーミングアップする。 (2) 場面絵を使って教室で起こっていることの説明を聞き、その時の気持ちを想像する。 (3) いじめられている人から相談を受けたとき、どんな行動をとればよいか考える。 (4) グループで話し合いをした後に発表する。 (5) 振り返りを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・「人権教育指導資料 第26集」の事例を利用して模擬授業を進める。 ・アイスブレイクにより、参加者の緊張感を解きほぐす。 ・児童生徒役となった教職員は、場面絵からタイプを選び、児童生徒の気持ちを想像しながら参加する。 ・常に児童生徒の応答を予想し指名を行う。求める内容に応じて教師役が指名の方法を選択し、意図的・計画的に発言を求めていく。 ・一人一人の考えが大切にされ、認め合えるように配慮する。 ・感じたこと、考えたこと、発見したことなどを再確認するため、振り返りの時間を十分に確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に、模擬授業の教師役の教員と十分な打合せを行い、掲示物やワークシートの準備を行う。 ・状況を把握し、必要に応じて、教師役や生徒役の教職員に助言を行う。 ・意図的・計画的な机間指導を行いながら、授業記録を取る。 ・改善点については、否定的な指摘にならないように配慮する。
3 模擬授業の振り返りを行い、実践化に向けて修正案等を検討する。 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> ・人権教育の視点から振り返り、学年や学級の実態に合った授業となるように展開や準備物等を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研修の学びを授業実践につなげられるようにする。
4 研修のまとめを行う。 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・参加体験型の学習で学び合うことの意義について再確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「人権教育指導資料 第34集」の活用を促す。

【評価】

- ◇参加体験型の学習で学び合う人権教育に関する模擬授業を通して、人権に関する知的理解や人権感覚を身に付けるとともに、人権教育を推進するための実践力を高めることができる。

自校化へのヒント

- ◇時間が十分にとれない場合は、場面を選択して模擬授業を行ったり、展開の2（5）で模擬授業の振り返りも併せて行ったりすることで、時間の短縮が可能である。その際、実践化に向けた検討は、教材・教具の準備も含めて学年会等で行うようにする。
- ◇模擬授業で取り上げる事例は、児童生徒の実態や実施時期、自校の人権課題に合わせて選択してもよい。その際、茨城県教育委員会で発行している「人権教育指導資料」から選び、研修後の利用推進も図りたい。

ファシリテーターの事前準備

- ◇研究主任や人権教育担当と共に、模擬授業で行う事例の選択と教師役の決定を行う。若手教員がいる学校では、教師役に若手教員を選ぶと授業力の向上につながるとともに、学校全体で若手教員を育てようとする雰囲気が醸成される。
- ◇模擬授業の授業者に、授業展開について、人権教育担当者も交えて検討し、発問や指示、板書案、掲示物、ワークシート等の準備を進めておく。
- ◇教職員に、参考資料となる「人権教育指導資料」の該当ページを、必要に応じて印刷及び配付しておき、事前に授業の流れをつかませておく。

研修のポイントと進め方

- ◇模擬授業を通じた研修として、児童生徒の立場に身を置いて指示や発問などについて体験を通して学ぶ機会となるように工夫し、学習指導案や事例集などでは見えない部分について教材研究（教師の言語環境も含む）を深めていく。
- ◇人権教育の指導方法の基本原則として中核となる「協力」、「参加」、「体験」を組み入れた学習形態となっているか、という視点で授業づくりについて語り合う。

事後に実施すること

- ◇学級担任は、模擬授業を生かして授業を実践してみる。授業は、時間割を工夫して互いに見合えるようにし、学年会等で授業の振り返りを行う。
- ◇学校便りや学年便り等で、今回の研修や実際の授業の様子、教師及び児童生徒の声をまとめ、人権教育の取組として発信する。

参考資料等

- 茨城県教育委員会「人権教育指導資料 第26集 人権に関する学習の展開事例集－授業に活用できる参加体験型人権学習－」
- 茨城県教育委員会「人権教育指導資料 第34集 みんなえがお」

第1学期 [4月頃] 約60分 演習 全教職員

期待される効果

◇4月の学級づくりの時期に、構成的グループエンカウンター（以下「SGE」という。）の研修に、全教職員で取り組むことにより、教室で実際にSGEを行う場合の効果や展開の仕方、配慮すべき事項について深く理解し、共通認識を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇演習を通して、SGEのエクササイズ（主に共同絵画）の具体的な展開の仕方や配慮すべき事項を理解する。

【準備物】

◇SGEの展開（掲示用拡大コピー）、SGE展開の配慮事項（掲示用拡大コピー）、演習資料（手叩きあそび、バースディライン、共同絵画）《別紙資料（p.116）》

◇A3版画用紙、クレヨン（実施する内容によって、準備物は変わる。）

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （2分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> SGEの展開の仕方や配慮事項を理解しよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> 全教職員が意欲的に取り組めるよう、研修のねらいを明確にする。 「SGEの展開」と「SGE展開の配慮事項」を表示し、ポイントを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 和やかで意欲的な雰囲気をつくるようにする。
2 SGEのエクササイズを体験する。 （40分） (1) 内容説明<2分> (2) ウォーミングアップ ①手叩きあそび・バースディライン<10分> (3) インストラクション<3分> (4) エクササイズ ②共同絵画<20分> (5) シェアリング<3分> (6) まとめ<2分>	<ul style="list-style-type: none"> 各展開（内容の説明、ウォーミングアップ、インストラクション、エクササイズ、シェアリング、まとめ）の指導のポイントを、実践を通して確認する。 特に、シェアリングを大切にすることを再度確認する。 学級の児童の実態に合わせたエクササイズや、細やかな配慮事項を検討する時間を確保するとよい。 	<ul style="list-style-type: none"> リーダーとして、SGEのエクササイズを展開する。 時間配分を配慮し、全教職員が協議で出た意見をしっかりと共有できるようにする。
3 まとめをする。 （18分） (1) グループごとに協議をする。		

※小学校の授業展開例

【評価】

- ◇ SGE の展開の仕方や配慮すべき事項を理解することができている。
- ◇ 〈ファシリテーター〉和やかで意欲的な雰囲気をつくり、教職員が互いに協力してエクササイズに取り組めるよう配慮することができている。

自校化へのヒント

- ◇ 演習で使うエクササイズは、児童生徒の実態や発達の段階を考慮するとよい。
- ◇ 演習では、配慮事項を十分に検討できるよう時間配分の工夫をするとよい。
- ◇ 演習や協議では、若手教職員と経験を積んだ教職員が意見交換できる機会を設けことで、共に学び合い、協力し合う雰囲気をつくることができ、深まりのある研修になる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇ SGE のエクササイズを体験するグループを作る。例えば「共同絵画」の場合、4～5人組のグループがよい。その際、人間関係で配慮すべきことがあれば、よく考慮してグループづくりをする。《別紙資料（p.116）》
- ◇ 教職員に、「望ましい人間関係づくりの進め方」についての講義を行い、子ども同士の望ましい人間関係づくりにおけるの要点を確認する。講義内容については、講義資料《別紙資料（p.114）》及びパワーポイント講義資料《別紙資料（p.118）》を参照する。

研修のポイントと進め方

- ◇ 4月の学級づくりの時期にSGEを実践することで、温かな雰囲気の中で児童生徒が自分の心を開き、互いに助け合い、協力し合える望ましい人間関係づくりが期待できる。
- ◇ 演習では、【展開】で示したようなSGEの授業を一通り行くと、教職員が具体的なイメージをもちやすくなり実践への意欲付けがしやすくなる。
- ◇ ファシリテーターは、「グループアプローチを進める上で教師が感じる不安やとまどい軽減ハンドブック『茨城県教育研修センター平成21年度第70号（PDF）』」を参考して、研修に臨むとよい。不安やとまどいをどのようにすれば軽減できるのかというポイントを抑えて演習を展開することができるので、教職員の研修意欲が高まる。
- ◇ 見通しをもった研修計画を立てることが大切である。講義と演習をあまり期間を置かず連続して行い、理論（講義）の後に実践（演習）という流れで研修するよう計画すると効果的である。また、研修の時間配分を工夫し、学級の児童生徒の実態や発達の段階に合わせたエクササイズや、細やかな配慮事項を検討する時間を確保すれば、明日からの授業につなげることができ、実践的な研修となる。

事後に実施すること

- ◇ 学級での実施状況を把握する。
- ◇ 実践上の課題と改善策を検討する。

参考資料等

- 茨城県教育研修センター「校内研修で使えるエクササイズ集（PDF）」
- 茨城県教育研修センター「グループアプローチを進める上で教師が感じる不安やとまどい軽減ハンドブック（PDF）」平成21年度第70号
[<http://www.center.ibk.ed.jp/contents/kenshuushiryoku/kyouikusoudan/kyouikusoudan.htm>]
(茨城県教育研修センターホームページ > 研修資料等 > 教育相談課)

期待される効果

- ◇全教職員で研修することにより、子どもに向き合う教育相談的な姿勢が大切であることを学校全体で再認識することができ、組織力の向上を図ることができる。
- ◇全教職員が、「私」メッセージスキルを身に付けることにより、教師一人一人が子どもたちに自分の思いを適切に伝えられるようになり、教師と子どもの望ましい人間関係づくりにつながるとともに教師間のコミュニケーションの向上を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇教師と子どもの望ましい人間関係を築くために、教師一人一人が、「私」メッセージで言葉掛けができるようにする。

【準備物】

- ◇スキルのポイント（掲示資料）《別紙資料（p.122）》、ワークシート（振り返り用紙）《別紙資料（p.123）》

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 （3分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 「私」メッセージの達人になろう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーミングアップを実施し、場を和ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張感をほぐし、和やかな雰囲気をつくるようにする。
2 スキルのポイントを説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ポイントは、拡大コピーをし掲示する。 	
3 演習を行う。 （40分） (1) 場面を設定 (2) デモンストレーション ・「あなた」メッセージ ・「私」メッセージ (3) 役割分担 ・先生役、児童生徒役、観察者を決める。 (4) 「私」メッセージのシナリオを作成 (5) ロールプレイを実施 《ロールプレイイング（p.31）》	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な場面を設定する。 ・デモンストレーションの時は、臨場感を出すような役割演技ができると効果的である。 ・観察者には、観察のポイントを押しさえ、2人のロールプレイを観察するように伝える。 ・先生、児童生徒、観察者の3役を体験するように説明する。 ・それぞれの役になりきってロールプレイを行うよう助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイを行っている教師の様子をしっかりと観察し、必要なら援助する。
4 振り返りをする。 （10分） (1) グループ内で実施 (2) 全体で実施	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返り用紙に記入したことを基に話し合うことで、互いに感じたことなどを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの参加者に発言の機会を提供する。 ・全体の場面でフィードバックし、達成状況等を確認する
5 まとめを行う。 （7分）		<ul style="list-style-type: none"> ・「私」メッセージスキルが活用されているシナリオを取り上げ称賛する。

【評価】

- ◇「あなた」メッセージと「私」メッセージについて子どもの受け止め方が違うことに気づき、自分の思いを適切に伝えるスキルを身に付けることができている。
- ◇〈ファシリテーター〉ロールプレイに抵抗感をもっている参加者や全体の雰囲気配慮しながら、研修を進めていくことができている。

自校化へのヒント

- ◇若手教職員がいる学校では、研修を通して、経験を積んだ教職員から若手教職員にスキルを伝えることができ、若手教職員のスキルの向上、教職員間の協力・協働関係が図られ、学校の組織力の向上につながる。
- ◇各学校が児童生徒の実態をしっかりと捉え、ロールプレイの場面設定を考えたり、デモンストレーションのシナリオを作成したりすることで、より効果的な研修につながる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇デモンストレーションの場面設定とシナリオを考える。《別紙資料（p.120）》
- ◇「私」メッセージのシナリオの場面設定を考える。《別紙資料（p.121）》
- ◇スキルのポイントをまとめた掲示資料を作成する。《別紙資料（p.122）》
- ◇振り返り用紙を作成する。《別紙資料（p.123）》
- ◇演技者を決定し、シナリオを事前に渡す。
- ◇演技者と場面設定や役割分担について、事前打合せを行う。

研修のポイントと進め方

- ◇ロールプレイを行うことにより、子どもに対する関わり方を振り返るよい機会となり、子どもの気持ちを理解した関わり方を考えることができる。
- ◇私を主語にする部分だけにとらわれず、「私」メッセージを構成するためのポイントを意識してメッセージを伝える。

<ポイント> ・意味的主語が「私」 ・肯定的に言う ・できるだけ感情を伝える

- ◇参加者の人数によっては、ロールプレイの際に2人の様子を見る観察者を設定し、ロールプレイ後に感想を話し合う。
- ◇演習時の内容や言葉遣いなどは、子どもの日常生活からかけ離れないようにする。

事後に実施すること

- ◇「私」メッセージを意識しているかどうか、アンケートを実施する。
- ◇日常の中でできていることを伝え合う場（学年会等）を設定する。
- ◇研究主任は、研修に使用した資料等を今後の研修に活用できるように管理する。

参考資料等

相川充著「先生のためのソーシャルスキル」（サイエンス社）平成20年6月
茨城県教育研修センター「教師のためのソーシャルスキルトレーニング（PDF）」
《別紙資料（p.124）》

期待される効果

- ◇いじめや不登校等の学校不適應の諸問題に対処するため、年度当初に子どもの気持ちに寄り添える教師像を共有することで、学校全体で教育相談を進める上での組織力を高めることができる。
- ◇教育相談の理論を身に付けることが、子どもの理解が深まるだけでなく、子どもからの信頼を得たり、学習意欲が向上したり、教育活動全般に生かされることになり、学校で取り組むべき教育課題の解決に向けた組織的な実践に結び付けることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇子どもからのSOSを正しく理解し、子どもの気持ちに寄り添うための知識とスキルを習得する。

【準備物】

- ◇講義資料《別紙資料（p.125）》、演習資料《別紙資料（p.128）》、〔演習1〕ウォーミングアップ《別紙資料（p.128）》、〔演習2〕（スキル説明シート、ワークシート、ロールプレイカード）《別紙資料（p.129）》、〔演習3〕（事例のポイント）《別紙資料（p.133）》

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。（5分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> 子ども理解の知識とスキルを高めよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの気持ちを理解することの重要性を確認し、普段どの程度実践できているかを振り返ることで課題提起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段困っている子どもについて共有することで、教師集団としての連帯感や研修の必要性を感じられるようにする。
2 ファシリテーターが講義をする。（30分） (1) 気になる子どもの理解 (2) 気になる子どもからのSOS (3) 相談にのるときの話の聴き方	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがSOSを出すことは弱さでないことを教師として認識するとともに、子どもたちにも意識付けることが大切であることを強調する。 ・子どもからのSOSに対する教師のまづい対応例を挙げることで、これまでの対応を振り返らせ、研修の必要性を実感させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講義では、ありがちな教師の対応が子どもたちを追い込むことにつながりかねないことを押さえる。 ・普段の対応を十分に振り返らせることが大切である。 ・子どものSOSを引き出すには、スキルと同時に、教師の心のもち方や雰囲気が必要な要素であることを押さえることが大切である。
3 演習を行う。（50分） (1) ウォーミングアップ〔演習1〕 (2) 傾聴訓練〔演習2〕または〔演習3〕を選択して実施する	<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーミングアップでは、演習効果を高めるため、楽しい雰囲気づくりに努める。 ・傾聴訓練では、交互に演習することで傾聴の大切さを実感させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイは、役になりきることが大切であることを押さえる。 ・ロールプレイでよかったところを把握し、紹介したり、実演してもらったりすると効果的である。 ・人数によっては観察者を置くことも効果的なので、よく考えてグループ編成を行う。
4 まとめをする。（5分） ○ 演習の感想を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・感想発表は、研修の効果を共有する視点で行う。 	

【評価】

- ◇子ども理解のための知識とスキルを高めることができている。
- ◇〈ファシリテーター〉和やかで意欲的な雰囲気の中でロールプレイできるように配慮することができている。

自校化へのヒント

- ◇演習で行う傾聴訓練は、保護者対応にも生かされる。保護者面接や個別面接期間を設けている学校では、その前に研修することも効果的である。
- ◇児童生徒の実態に応じて、ロールプレイの事例を用意することで、より深まりのある研修になる。また、参加者が困っていることを発表する場を設けることで、情報の共有を図ると同時に、学校としての課題を焦点化できる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇研修が実践に結び付くように、学校の実態に応じた事例を準備する。
- ◇講義資料とプレゼン資料を確認したり、印刷物を用意したりして、研修がスムーズに運営できるように準備する。
- ◇演習を行う2人組は、ウォーミングアップの際に作ることが望ましいが、時間を短縮したい場合は事前にグループ分けをしておく。また、人数によっては3人組を作り、観察者を置くことも考えられるので、研修効果を考えてグループ編成を行う。
- ◇教職員に、事前に気になる子どもについて想起してもらうように指示することで、研修意欲の喚起に努める。

研修のポイントと進め方

- ◇研修をより効果的に進めるためには、参加者が研修の必要性を感じているかがポイントである。そのためには、気になる子どもについて想起させたり、これまでの対応でよかったかを参加者各自が振り返ったりする場面を設定することが大切である。また、この研修は単に一对一の面接スキルを高めることを狙っているのではなく、研修で学んだ知識やスキルは、授業や保護者対応にも生かされることを強調するとよい。
- ◇ロールプレイが苦手な参加者に対しては、ファシリテーターが積極的に介入する。フォローをしたり、よさを認めたりすることで、研修意欲を高めるように配慮する。

事後に実施すること

- ◇個別面接等で研修成果が生かされたかをチェックすることで、研修内容の意識化を図る。
- ◇子どもの実態調査とリンクさせ個別面接期間を設けるなどして、研修成果を生かす場面を設定する。

参考資料等

茨城県教育研修センター「面接の基本的な技法（PDF）」

茨城県教育研修センター「個別面接の実際（PDF）」

茨城県教育研修センター「個別面接の実際（動画）」

[<http://www.center.ibk.ed.jp/contents/kenshuushiryou/kyouikusoudan/kyouikusoudan.htm>]
(茨城県教育研修センターホームページ > 研修資料等 > 教育相談課)

茨城県教育研修センター「気になる子どもへの教育相談（PDF）」

《別紙資料（p.134）》

期待される効果

- ◇新学期の学校生活にも慣れ、教員が児童生徒の特別な教育的ニーズに気付き始める5月頃の時期に、全教職員で発達障害等の特性の理解について研修を行うことで、特別な教育的ニーズのある児童生徒に対しての、組織的な対応について共通理解を図ることができる。
- ◇全教職員で演習を体験することにより、共通理解を深め、校内支援体制の充実を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇発達障害等についての基本的な内容について理解する。

【準備物】

- ◇高速でネットワーク接続されたPC、プロジェクター、スクリーン、スピーカー等、手鏡（立てられるタイプの物 各自）、軍手、A4程度の白紙、グループ討議を進める際に必要なホワイトボードや記録用紙、付箋等

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。（2分） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 教室の中のちょっと気になる子どもたち～発達障害等の特性を理解しよう～ </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員が意欲的に取り組めるよう、研修のねらいと流れを明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・和やかで意欲的な雰囲気をつくるようにする。
2 研修講義コンテンツを視聴する。（10～20分）	<ul style="list-style-type: none"> ・書くことに苦手さを示す児童生徒の疑似体験を通して、わざとやらなかったり、怠けていたりするわけではないということを実感させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験中に、教員がやっつけてしまいがちな不適切な声かけを意図的にする。
3 疑似体験をする。（15分） （書くことに苦手さを示す児童生徒の体験） (1) 内容説明 (2) 体験1 ①利き手と反対の手に二重に軍手をはめて、自分の名前を書く。 ②感想を述べ合う。 (3) 体験2 ①鏡の横に紙を置き、鏡の中を見ながら利き手で名前を書く。 ②感想を述べ合う。 (4) まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・書いた名前を見せ合ったり、感想を述べ合ったりすることで、共通の認識をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単なまとめをする。 ・疑似体験を通して、特別な教育的ニーズのある児童生徒の困難さを理解し、それを踏まえた上で、今後の指導や支援に役立てることを確認する。
4 グループ討議をする。（30分） (1) 学習面、行動面、対人関係面で気になる児童生徒について（気付きの確認） (2) 疑問点や意見、課題について	<ul style="list-style-type: none"> ・意見を出しやすい人数（4～6人）でグループを作り、話しやすい雰囲気づくりをする。 ・一部の人の意見に偏らないように工夫し、全員が発言できるようにする。（KJ法等の活用） ・理解したことと、課題を整理し、次の研修につなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題となった点については、参考図書や関連リンクなどを紹介する。

【評価】

- ◇発達障害等についての基本的な内容について理解することができる。
- ◇〈ファシリテーター〉和やかで意欲的な雰囲気をつくり、教職員が互いに協力して疑似体験やグループ討議に参加できるように配慮することができる。

自校化へのヒント

- ◇発達障害という言葉の定義を学ぶだけでは、具体的な指導に結び付けにくいものである。「特別な教育的ニーズ」という視点から、どんな場面でどのようなつまづいている児童生徒がいるか、事前アンケート等で状況を把握しておき、その内容に応じて、研修講義コンテンツや疑似体験の内容を工夫することができる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇あらかじめ国立特別支援教育総合研究所発達障害教育情報センターのホームページにアクセスし、研修講義コンテンツ《別紙資料（p.137）》の視聴確認を行い、研修内容に応じた講義コンテンツを選定し、再生確認をする。また、茨城県教育研修センターの改訂版「特別な配慮を要する子どもの（LD・ADHD・高機能自閉症等）理解と対応 Q&A」を参考に、簡単なまとめができるように準備する。
- ◇教職員に、疑似体験の際に必要な準備物について、各自が事前に準備しておくように周知する。

研修のポイントと進め方

- ◇児童生徒の学習上の困難さを理解していたようで、理解していなかったことに気付く体験は、その後の研修意欲につながると思われる。また、グループ討議を行うことで、校内における気になる児童生徒の共通理解と具体的な対応について、様々なアイデアを出しやすくするように工夫する。

事後に実施すること

- ◇必要に応じてケース会議を開催し、具体的な対応策と支援体制について検討する。
- ◇改訂版「特別な配慮を要する子どもの（LD・ADHD・高機能自閉症等）理解と対応 Q&A」を参考にし、支援に生かす。
- ◇今後の研修（例：研修講義コンテンツの継続な視聴等）について、計画を立て実施する。

参考資料等

- 茨城県教育研修センター「改訂版『特別な配慮を要する子どもの（LD・ADHD・高機能自閉症等）理解と対応 Q&A』」気付き編・理解編（PDF）、対応編（PDF）
〔<http://www.center.ibk.ed.jp/contents/kenshuushiryoku/kyouikusoudan/kyouikusoudan.htm>〕
（茨城県教育研修センターホームページ〉研修資料等〉特別支援教育課〉講座の資料等）
- 国立特別支援教育総合研究所発達障害教育情報センター「研修講義」
〔http://icedd.nise.go.jp/index.php?action=pages_view_main&page_id=18〕
- 高橋あつ子著「一から始める特別支援教育『校内研修』ハンドブック」（明治図書）平成19年11月

期待される効果

◇インシデントプロセス法を用いたケース会議の手法を取り入れることで、全教職員が効率的にアイデアを出し合い、指導や支援に関する有効な情報を共有することができる。特別な教育的ニーズのある児童生徒への組織的な対応ができる。

研修の流れ

【ねらい】

◇特別な教育的ニーズのある児童生徒について、インシデントプロセス法を用いたケース会議を行うことができる。

【準備物】

◇インシデントプロセス法を用いたケース会議の進め方について、インシデントプロセス法によるケース会議の流れ《別紙資料（p.124）》、ワークシート《別紙資料（p.124）》、模造紙、付箋、マジック等

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研修のねらいを確認する。 (5分)	・全教職員が意欲的に取り組めるよう、研修のねらいと流れを明確にする。	・研修の進行をする。
2 インシデントプロセス法によるケース会議の流れについて知る。 (10分) 《インシデントプロセス法（p.30）》	・インシデントプロセス法について説明をし、その手法のよさと特徴について説明をする。	・資料を印刷して配付するなど、分かりやすく説明する。 ・インシデント・プロセス法のケース会議を経験したことのある教員に説明を依頼していてもよい。
3 インシデントプロセス法によるケース会議を行う。 (50分) (資料参照) (1) 事例提示<3分> (2) 情報収集<12分> (3) 個人ワーク<5分> (4) グループ協議<25分> (5) まとめ<5分>	・事例については、その場で決定してもよいが、希望をとる等事前に決めておいてもよい。 ・時間を意識できるように、その都度、声を掛ける。 ・一つ一つの活動が長引かないように、留意する。	・ワークシート、付箋、模造紙、マジック等を準備する。 ・タイムキーパーをする。
4 本日の研修のまとめをする。 (5分)	・ケース会議でた内容について確認し、次回の研修の予告をする。	

【評価】

- ◇特別な教育的ニーズのある児童生徒について、インシデントプロセス法を用いたケース会議を行うことができる。
- ◇〈ファシリテーター〉インシデントプロセス法について理解し、時間を意識した有効な話し合いを進めるために、適宜時間や活動の項目を確認できる。

自校化へのヒント

- ◇特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議については、個別の指導計画における短期目標の評価等と関連付けながら継続的に行うことで、教員間の共通理解が深まり、よりよい指導や支援に結び付くと考えられる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇対象となる児童生徒及び事例提供者について調整をする。また、1グループ6人程度のグループ分けをすることで、コミュニケーションが取りやすくなるよう調整する。さらに、インシデントプロセス法を用いたケース会議の進め方について、事前に確認しておく。
- ◇インシデントプロセス法によるケース会議を経験したことのある教職員に、説明を依頼する。

研修のポイントと進め方

- ◇組織全体でケース会議を行うことで、特別な教育的ニーズのある児童生徒のよさや得意なことを知り、さらに、その児童生徒への関わり方を話し合うことで、支援についての共通理解を図り、より実効性のある具体的な支援方法を検討することができる。
- ◇ファシリテーターとして、次のような助言をする。

- 分かりにくさや気付きにくさ、できにくさを軽減するような支援方法を考える。
- 指導や支援には、各自がこれまでに授業や活動の中で配慮や工夫をしてきたことが、解決のヒントになることが多い。
- 今回のように複数の教員で検討することは、児童生徒の実態や背景を考えるときに多面的に見ることができる。
- これまでの経験や実践から、多様な指導・支援方法に気付くことができる。
- 多様な指導・支援方法から指導者が取組可能な方法を選択することができる。
- 時間を決めたり話し合う項目を明示したりすることで、短時間で具体的な支援方法を見いだせる。
- 実際に指導するときには、担当一人でなく学年や学校全体で、共通理解と連携を図る必要がある。

事後に実施すること

- ◇特別な教育的ニーズのある児童生徒の個別の指導計画等と関連付けながら、定期的にケース会議を開催し、全教職員の共通理解の下で、具体的な対応策と支援体制について検討する。

参考資料等

- 茨城県教育研修センター「インシデントプロセス法を用いたケース会議の進め方について」
(茨城県教育研修センターホームページ〉研修資料等〉特別支援教育課〉講座の資料等)

期待される効果

- ◇特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりに全校で取り組み、全員が計画的に授業研究会を行うことで、授業改善の視点が明確になり、教職員一人一人の指導力の向上を図ることができる。
- ◇校種を問わず、特別支援教育の視点を取り入れた授業を展開することの必要性について、全教職員の共通理解を図ることができる。

研修の流れ

【ねらい】

- ◇特別支援教育の視点を取り入れた誰もが分かりやすい授業を実践し、授業研究会を行うことで教職員の指導力の向上を目指す。

【準備物】

- ◇提案授業の映像、画像、模造紙、付箋（ピンクと水色）、マジック等

【展開】

内容（時間）	留意点	ファシリテーターの役割
1 研究会の目的や流れを説明する。 (5分)	・全教職員が意欲的に取り組めるよう、目的と流れを明確にする。	・「多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リスト」を事前に配布し、授業を参観する視点を明確にしておくよう、働きかける。
2 授業者からの報告を聞く。 (10分)	・授業者が検討したい事項について意見を出せるように配慮する。	
3 視点を絞った協議を実施する。 (40分)	・参加者が共通の内容で検討できるよう部分的に視聴することもよい。	・タイムキーパーをする。
(1) 映像や画像等の視聴	・あらかじめ授業を参観する際の視点を明確にしておく。	・和やかな雰囲気研究会が進むよう配慮する。
(2) 付箋を使って類型化をする 《K J 法的手法 (p. 29) 》	・参観して気付いた点について付箋に記入する。	・必要であればグルーピングする。
○有効であった点や改善点について	・付箋の色を決めておき（例：有効であった点…ピンク、改善点…水色）、参観中に記入しておくことで時間の短縮が図れる。	・今回の授業研究会を通して、何を学んだか、また、自分の授業実践にどのように生かすことができるのか、振り返ることができるようにする。
○改善策についての検討	・自分だったらこうするといった視点でアイディアを出し合う。	
4 協議事項の整理とまとめを行う。 (5分)		

【評価】

- ◇特別支援教育の視点を取り入れた授業を実践し、授業研究会を行うことができる。
- ◇〈ファシリテーター〉授業研究会が円滑に進行するための企画、準備、進行等を行うことができる。

自校化へのヒント

- ◇小・中学校の通常の学級や高等学校において授業を行う際に、特別な教育的ニーズのある児童生徒が学んでいることを前提とした授業の工夫が求められている。全教職員の共通理解の下で、特別支援教育の視点を取り入れた授業を展開することは、全て児童生徒にとって分かりやすい授業となり、児童生徒の学力向上を目指すことができる。
- ◇教科や分かりやすい授業づくりの視点を焦点化して取り組むことで、より深まりのある研修になる。

ファシリテーターの事前準備

- ◇研究主任や教務主任等に、司会進行を依頼する。
- ◇授業者や授業教科等の計画、当日の授業研究会の企画・立案など、授業研究会の企画と準備を行う。また、略案でよいか、授業のポイントを明記するか等、学習指導案の形式の検討をする。
- ◇教職員に、授業参観の方法を確認するとともに、ビデオカメラ等による記録の役割を参観者の中から決めて依頼する。

研修のポイントと進め方

- ◇年間を通した計画的な授業研究会を設定することが大切である。計画に盛り込む事項としては次のものが考えられる。

- 授業研究会の実施回数、内容、方法、時期
- 授業研究会の規模（参加教職員の対象：全校、学年、ブロック、教科担任 等）
- 特定のテーマを設定するかどうかなど

- ◇次のような評価の観点で、授業研究会の成果の評価を行うとよい。

- | | |
|--------|--|
| 〈教職員〉 | <ul style="list-style-type: none">○授業者の授業が改善される○授業観察者（授業研究会に参加した者）の授業が改善される○授業に対する意識や姿勢が向上する |
| 〈児童生徒〉 | <ul style="list-style-type: none">○児童生徒の学習に成果が見られる○児童生徒の行動に成果が見られる○児童生徒の学習に対する意欲や満足感が向上する |

事後に実施すること

- ◇授業研究会で協議した内容について整理し、まとめとして配付するとよい。
- ◇特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりや環境整備等について、各教師から情報を収集し、記録を残しておくとうよい。

参考資料等

- 茨城県教育研修センター「授業づくりの支援リスト」、「授業づくりワークシート」
(茨城県教育研修センターホームページ > 研修資料等 > 特別支援教育課 > 研究等の資料 > 平成19,20年度特別支援教育における授業の実際と評価)
- 柘植雅義, 堀江祐爾, 清水静海編著「教科教育と特別支援教育のコラボレーションー授業研究の新たな挑戦ー」(金子書房)平成24年6月

3 別紙資料（ワークシート等）

[道徳] 協働作業による学習指導案作成（小・中・高・特）	
資料分析表 -----	103
学習指導案作成用紙【B4】 -----	104
[道徳] 拡大指導案を使った授業実践の振り返り（小・中・高・特）	
「導入，展開，終末」それぞれの役割と工夫チェックプリント（例） ----	105
授業参観シート（例） -----	106
[特別活動] 特別活動の評価の進め方（小・中・特）	
目指す児童像の設定までの流れ（例） -----	107
[特別活動] 目指す児童生徒像の具現化を図る特別活動（小・中・高）	
特別活動改善シート（記入例） -----	108
特別活動改善シート -----	109
[キャリア教育] キャリア教育の視点から自分の授業を捉え直す（小・中・高）	
発達の段階におけるキャリア発達課題・発達の特徴 -----	110
発達の段階において育成すべき基礎的・汎用的能力 -----	111
[キャリア教育] 自校ならではのキャリア教育の年間指導計画をデザインする（小・中・高・特）	
キャリア教育の年間指導計画（ワークシート） -----	112
[教育相談] 子ども同士の望ましい人間関係づくり〈構成的グループエンカウンター〉（小・中・高）	
望ましい人間関係づくりの進め方 -----	113
構成的グループエンカウンター（SGE） -----	114
構成的グループエンカウンター（SGE）演習資料 -----	116
構成的グループエンカウンター（SGE）[ppt資料] -----	118
[教育相談] 教師と子どもの望ましい人間関係づくり〈「私」メッセージスキル〉	
「私」メッセージスキル〈デモンストレーション シナリオ例〉 -----	120
「私」メッセージのシナリオを考えてみましょう -----	121
ポイント -----	122
振り返り用紙 -----	123
教師のためのソーシャルスキルトレーニング[ppt資料] -----	124
[教育相談] 気になる子どもへの教育相談	
気になる子どもへの教育相談 -----	125
〔演習1〕，〔演習2〕，〔演習3〕 -----	128
気になる子どもへの教育相談[ppt資料] -----	134
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒の理解と対応	
国立特別支援教育総合研究所発達障害教育情報センター 研修講義一覧 ---	137
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議の進め方	
インシデントプロセス法によるケース会議の流れ（50分間） -----	138
特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議ワークシート -----	139
[特別支援教育] 特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業づくり	
特別支援教育の視点から学級経営や授業をチェックしてみよう -----	141
多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リスト -----	142

資料分析表

学年	主題名	資料名	出典		
ねらい					
場面・話の筋 (資料に含まれる価値)	中心人物の言動と 心の動き	関連人物の言動と 心の動き	「・」基本発問 「◎」中心発問	予想される 児童生徒の反応	

学習指導案作成用紙【B4】

作成日 平成 年 月 日 ()
 作成者 []

学年	年	主題名		資料名		出典	
ねらい							
		学習活動・主な発問	予想される児童・生徒の反応	指導上の留意点・評価			
導入							
展開							
終末							
【板書事項】							

「導入、展開、終末」それぞれの役割と工夫チェックプリント（例：中学校）

①導入

【役割】

主題に対する生徒の興味や関心を高め、学習への意欲を喚起して、生徒一人一人の意識をねらいの根底にある道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚に向けて動機付ける段階であるといわれている。

【工夫】

- 生活体験を想起させての発表
- アンケート調査の結果等の資料の提示
- 視覚的に印象付ける 資料への導入（資料に関する絵画，写真，動画や小道具）
- 聴覚的に印象付ける（疑似体験，具体物，写真，動画，場面絵）
- 資料の解説や補説（時代背景，土地や国柄，人物 など）
- 主題に関わる新聞記事，生徒作文，詩や短歌
- 地域の人々の協力
- 実験や観察など実物に触れる体験

②展開

【役割】

道徳の時間のねらいを達成するための中心となる段階であり，中心的な資料によって，生徒一人一人がねらいの根底にある道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深める段階であるといわれている。

【工夫】

- 資料提示の工夫
（資料を録音して聞かせる，実態に応じて繰り返したり部分的に見せたり聞かせたりする）
- 発問構成の工夫
（資料をよく吟味し，資料中に描かれている道徳的価値を明らかにするとともに，具体的に何について生徒に考えさせるのか，その考えを深めることができるような具体的な発問を準備する）
- 生徒が主体的に人間としての生き方を追求し，思考を深める工夫
（2人一組の対話，小集団による話し合い，自分の考えをまとめて書く活動）

③終末

【役割】

1時間の授業のまとめをする段階

【工夫】

- 自らの道徳的な成長や明日への課題などを実感でき確かめることができるような工夫
（説話，生徒の作文，保護者や地域の人のお話，詩の朗読，映像や音楽の視聴）

授業参観シート（例）

日時	平成 年 月 日 () 校時 : ~ :	学年	
資料名		授業者	
授業参観者の感想及び改善の方策について			
導入	道徳的価値の自覚に向けての動機付けや学習意欲を喚起について		
	(感想)		

(改善の方策)			
展開	ねらいの根底にある道徳的価値について自覚を深める。		
	資料提示について (感想)		

	(改善の方策)		

	発問について (感想)		

	(改善の方策)		

	話し合い活動、表現活動について (感想)		

	(改善の方策)		
終末	ねらいとする道徳的価値に対する思いや考えをまとめる。		
	(感想)		

	(改善の方策)		

目指す児童像の設定までの流れ（例）

特別活動全体に係る評価の観点と規準（例）

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
学級や学校の集団や自己の生活に関心をもち、望ましい人間関係を築きながら、積極的に集団活動や自己の生活の充実と向上に取り組もうとする。	集団の一員としての役割を自覚し、望ましい人間関係を築きながら、集団活動や自己の生活の充実と向上について考え、判断し、自己を生かして実践している。	集団活動の意義、よりよい生活を築くために集団として意見をまとめる話し合い活動の仕方、自己の健全な生活の在り方などについて理解している。

年間を通じた**学級活動(1)**の評価規準を設定します。

学級活動(1)の評価の観点と評価規準（中学年）（例）

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
学級の生活上の問題に関心をもち、他の児童と協力して意欲的に集団活動に取り組もうとしている。	楽しい学級生活をつくるために話し合い、自己の役割や集団としてよりよい方法などについて考え、判断し、協力し合って実践している。	みんなで楽しい学級生活をつくることの大切さや、学級集団としての意見をまとめる話し合い活動の計画的な進め方などについて理解している。

学級活動(1)における**目指す児童の姿**を設定します。

目指す児童の姿（中学年）（「話し合い」の場を例に）

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
司会や記録の仕事、話し合いに意欲的に取り組もうとしている。	よりよい学級の生活づくりに向けて考え、判断し、まとめようと話し合っている。	計画委員会の仕事の内容や計画的な話し合いの進め方を理解している。

「話し合い」の場における**目指す児童の姿**を設定します。

本時の「話し合い」の場で、思考・判断・実践の観点を取ることを例に

- ・学級がもっと仲良くなるための集会の内容や工夫について、学級活動ノートに自分の考えを書いたり、発言したりしている。
- ・友達の発言について、相手の思いを受け止めようという意識をもって聞いている。
- ・友達の意見を参考にして新たな意見や折衷案について発言している。
- ・集会を楽しくするための工夫や係について、これまでの集会の経験を生かして、自分の考えを発表している。

これらの目指す児童の姿を評価規準に照らし、どの児童を「十分満足できる活動の状況」と判断したのかを互いに意見交換をして教師の見取りの差を小さくし、評価する際の「教師の目」をできるだけそろえるようにする。

特別活動改善シート（記入例）

	Check 【評価】	Action 【改善】	Plan 【目標設定】	Do 【実行】
進んで学習する子	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習が十分でない。 ・発表が苦手。 ・ノートの取り方に課題がある。 ・読書がすき。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級活動（２）（又は（３））で自主学習を題材にする。 ・係活動等でノート展を開く。 ・図書委員会主催で読書集会で更に盛り上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画を見直す。 ・係活動の時間に児童（生徒）に投げかける。 ・委員会担当が提案する。 ： 	
親切で明るい子	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶の声が小さい。 ・校歌の歌声が小さい。 ・友達関係が固定化。 ・指示を待って自ら動けない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童会（生徒会）の挨拶運動の取組を工夫する。 ・全校集会で校歌を歌うようにする。 ・異年齢集団活動を取り入れ、新しい人間関係を作る。 ・学級活動（２）の題材を工夫する。 ・学級活動（２）アとエで題材を考えてみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童会（生徒会）担当から児童（生徒）に気付きを与える。 ・年間指導計画を見直す。 ： 	
元気でたくましい子	<ul style="list-style-type: none"> ・休み時間を教室内で過ごす。 ・朝食抜きで登校する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育委員会主催で外遊びを奨励する工夫を考える。 ・学級活動（２）キを全校で取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会担当が提案する。 ： 	

特別活動改善シート

	Check 【評価】	Action 【改善】	Plan 【目標設定】	Do 【実行】

平成23年1月中教審答申及び平成23年3月文科省・国研調査研究報告書にみる小・中・高等学校の発達段階におけるキャリア発達課題・発達の特徴

	小学校期	中学校期	高等学校期
中教審答申	身近な人から集団へと人とのかかわりを広げながら、みんなのために働くことの意義を理解し、自分の役割を主体的に果たそうとする態度を形成する時期。また、日常生活や学習に高い目標を立て、希望と目標を持ち努力して達成しようとしたり、自分の特徴に気づき、良いところをのぼせようとしたりする時期。	自我の目覚めや、独立の欲求が高まるとともに、人間関係も広がり、社会の一員としての自分の役割や責任の自覚が芽生えてくる時期。また、他者とかかわり、様々な葛藤や経験の中で、自らの人生や生き方への関心が高まり、自分の生き方を模索し、夢や理想を持つ時期であり、一方で、現実的に進路の選択を迫られ、自分の意志と責任で決定しなければならない時期。	中学生と比べて更に独立や自律の要求が高まるとともに、所属する集団も増え、集団の規律や社会のルールに従い、互いに協力しながら各自の様々な役割や期待にこたえて円滑な人間関係を築いていくことが求められる時期。また、自我の形成がかなり進み、人間がいかにあるべきかについて考えるとともに、自己の将来に夢や希望を抱き、その実現を目指して進んで学習に取り組む意欲を持ち、自己の個性や能力を生かす進路を自らの意志と責任で選択し、決定していく時期。
発達課題	発達段階を踏まえ、社会生活の中での自らの役割や、働くこと、夢を持つことの大切さの理解、興味・関心の幅の拡大、自己及び他者への積極的関心の形成など、社会性、自主性・自律性、関心・意欲等を養う。	発達段階を踏まえ、社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等についてしっかりと考えるとともに、目標を立てて計画的に取り組む態度の育成等について、体験を通じて理解を深め、進路を選択・決定する。	発達段階を踏まえ、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度の形成するとともに、これらの形成を通じた勤労観・職業観等の価値観を形成・確立する。
キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書	<p>自分自身を見つめ、自らの将来について目を向ける機会などを通して、自分のよさや可能性などに気づき、自分らしい生き方を実現していくこととする態度を形成する。</p> <p>【低学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学校生活に適應する。 割り当てられた仕事や役割の重要性を理解する。 身近で働く人々に対して興味や関心を持つ。 自分のことはできるだけ自分で行おうとする。 自分の好きなもの、大切なものをもつ。 <p>【中学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学校生活への適應から友達づくりや集団の結束力づくりへ移行する。 学校生活において互いの役割や役割分担の必要性を理解する。 日常生活や学習が将来の生き方と関係することに気づき、将来への夢や希望を持って生活ができる。 世の中にいろいろな職業や生き方があるということを理解する。 係活動や当番活動に積極的にかかわり、働くことの楽しさを実感する。 <p>【高学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> 集団の中での役割の自覚と中学校生活への心の準備をする。 自分の長所や短所に気づき、自分らしさをしっかり発揮できる。 異学年集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。 社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さを理解し、仕事における役割や関連性、変化に気づく。 憧れとする職業を持ち、そのために今しなければならぬことを考える。 身近な産業や職業の様子やその変化について理解し、自分に必要な情報を理解することができる。 事業所や職場見学などを通して、働くことの大切さや大変さを実感する。 学んだことや体験したことが自分の生活や将来の職業と関連があることに気づく。 自分の仕事に対して責任を持ち、自ら見つけた課題を自分で解決しようとする。 将来の夢や希望を持ち、その実現に努力できる。 	<p>自分を見つめ直し、自分と社会とのかかわりを考え、将来における多様な生き方や進路選択の可能性を理解し、自らの意思と責任において自己の生き方や進路選択ができるような能力を形成する。</p> <p>【1年】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分のよさや個性が分かる。 自己と他者の違いに気づき、尊重しようとする。 集団の一員としての役割を理解し、それを果たそうとする。 将来の職業生活との関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解しようとする。 学習の過程を振り返り、次の選択場面に生かそうとする。 将来に対する漠然とした夢や憧れを抱いている。 <p>【2年】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の言動が、他者に及ぼす影響について理解する。 社会の一員としての自覚が芽生えるとともに、社会や大人を客観的に捉えるようになる。 体験等を通して、勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かる。 よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 将来への夢を達成する上での現実の問題に直面し、模索する。 <p>【3年】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己と他者の個性を尊重し、人間関係を円滑に進めようとする。 社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。 係・委員会活動や職場体験等で得たことを、以後の学習や選択に生かそうとする。 課題に積極的に取り組み、主体的に解決していくこととする。 将来設計を達成するための困難を理解しそれを克服するための努力に向かう。 	<p>自己実現の欲求を持ちながら、自分の人生をどう生きていくか、生きることは何かといった、人間としての在り方生き方を理念的に考える一方で、就職や進学を控え、現実的な検討・対応や具体的な選択・決定が求められる。</p> <p>【前半期】</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しい環境に適應するとともに他者との望ましい人間関係を構築する。 新たな環境の中で自らの役割を自覚し、積極的に役割を果たす。 学習活動を通して自らの勤労観、職業観について価値観形成を図る。 様々な情報を収集し、それに基づいて自分の将来について暫定的に決定する。 進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し、検討する。 将来設計を立案し、今取り組むべき学習や活動を理解し実行に移す。 <p>【後半期】</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者の価値観や個性を理解し、自分との差異を認めつつ受容する。 卒業後の進路について多面的多角的に情報を集め、検討する。 自分の能力・適性を的確に判断し、自らの将来設計に基づいて、高校卒業後の進路について決定する。 進路実現のために今取り組むべき課題は何かを考え、実行に移す。 理想と現実との葛藤や経験等を通し、様々な困難を克服するスキルを身に付ける。

元文部省初等中等教育局教科調査官、現千葉商科大学教授 鹿嶋 研之助氏作成

文科省・国研調査研究報告書の「キャリア発達課題・発達の特徴」に基づく、小・中・高等学校の発達の段階において育成すべき基礎的・汎用的能力（5.2011ver.）

	平成23年 中教審答申の各能力の説明	文科省・国研調査研究報告書の「キャリア発達課題・発達の特徴」に基づく各発達段階において育成すべき基礎的・汎用的能力		
		小学校段階	中学校段階	高等学校段階
人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。	【低学年】 ・小学校生活に適應する。 ・割り当てられた仕事や役割の重要性を理解する。 【中学年】 ・小学校生活への適應から友達づくりや集団の結束力づくりへ移行する。 ・学校生活において互いの役割や役割分担の必要性を理解する。 ・係活動や当番活動に積極的ににかかわり、働くことの楽しさを実感する。 【高学年】 ・集団の中での役割の自覚と中学校生活への心の準備をする。 ・異学年集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。	【1年】 ・自己と他者の違いに気付き、尊重しようとする。 ・集団の一員としての役割を理解し、それを果たそうとする。 【2年】 ・自分の言動が、他者に及ぼす影響について理解する。 ・社会の一員としての自覚が芽生えるとともに、社会や大人を客観的に捉えるようになる。 【3年】 ・自己と他者の個性を尊重し、人間関係を円滑に進めようとする。 ・社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。	【前半期】 ・新しい環境に適應するとともに他者との望ましい人間関係を構築する。 ・新たな環境の中で自らの役割を自覚し、積極的に役割を果たす。 【後半期】 ・他者の価値観や個性を理解し、自分との差異を認めつつ受容する。
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じる」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。	【低学年】 ・自分の好きなもの、大切なものをもつ。 【中学年】 【高学年】 ・自分の長所や短所に気づき、自分らしさをしっかりと発揮できる。 ・学んだことや体験したことが自分の生活や将来の職業と関連があることに気づく。	【1年】 ・自分のよさや個性が分かる。 【2年】 ・将来設計を達成するための困難を理解しそれを克服するための努力に向かう。 【3年】 ・係・委員会活動や職場体験等で得たことを、以後の学習や選択に生かそうとする。	【前半期】 【後半期】 ・自分の能力・適性を的確に判断し、自らの将来設計に基づいて、高校卒業後の進路について決定する。
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。	【低学年】 ・自分のことはできるだけ自分で行おうとする。 【中学年】 【高学年】 ・自分の仕事に対して責任を持ち、自ら見つけた課題を自分で解決しようとする。	【1年】 ・学習の過程を振り返り、次の選択場面に生かそうとする。 【2年】 ・よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 【3年】 ・課題に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする。	【前半期】 【後半期】 ・進路実現のために今取り組むべき課題は何かを考え、実行に移す。 ・理想と現実との葛藤や経験等を通し、様々な困難を克服するスキルを身に付ける。
キャリアプランニング能力	「働くこと」を担う意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。	【低学年】 ・身近で働く人々に対して興味や関心を持つ。 【中学年】 ・日常生活や学習が将来の生き方と関係することに気づき、将来への夢や希望を持って生活ができる。 ・世の中にいろいろな職業や生き方があるということを理解する。 【高学年】 ・社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さを理解し、仕事における役割や関連性、変化に気づく。 ・憧れとする職業を持ち、そのために今しなければならぬことを考える。 ・身近な産業や職業の様子やその変化について理解し、自分に必要な情報を理解することができる。 ・事業所や職場見学などを通して、働くことの大切さや大変さを実感する。 ・将来の夢や希望を持ち、その実現に努力できる。	【1年】 ・将来の職業生活との関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解しようとする。 ・将来に対する漠然とした夢や憧れを抱いている。 【2年】 ・体験等を通して、勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かる。 【3年】 ・将来設計を達成するための困難を理解しそれを克服するための努力に向かう。	【前半期】 ・様々な情報を収集し、それに基づいて自分の将来について暫定的に決定する。 ・将来設計を立案し、今取り組むべき学習や活動を理解し実行に移す。 【後半期】 ・卒業後の進路について多面的多角的に情報を集め、検討する。 ・自分の能力・適性を的確に判断し、自らの将来設計に基づいて、高校卒業後の進路について決定する。

元文部省初等中等教育局教科調査官、現千葉商科大学教授 鹿嶋 研之助氏作成

キャリア教育の年間指導計画（ワークシート例）

キャリア教育の 重点目標				
	教科	道徳	総合的な学習の時間	特別活動
4月				
5月				
6月				
7月				
8月				
9月				
10月				
11月				
12月				
1月				
2月				
3月				

国立教育政策研究所「キャリア教育をデザインする『今ある教育活動を生かしたキャリア教育』
—小・中・高等学校における年間指導計画作成のために—」を基に作成

望ましい人間関係づくりの進め方

1 望ましい人間関係づくりの目的

現在、いじめや不登校の問題に象徴されるように、児童生徒を取り巻く生活環境や社会状況の著しい変化により、児童生徒の人間関係に深刻な問題が生じている。児童生徒自らが、進んで人間関係を構築しようとする意欲が乏しかったり、意欲はあっても、その方法・術が分からずに行動に移せない児童生徒が多くなっていることが指摘されている。

そこで、児童生徒が有意義で充実した学校生活を過ごすためには、教師と児童生徒、児童生徒相互の人間関係を深めていくことが重要である。児童生徒は、友人関係を深めていくことが大切であり、学級担任は学級内での人間関係の構築のために、具体的な指導・手立てとして何らかの働きかけをしていくことが求められる。

2 望ましい人間関係とは

望ましい人間関係は、心の糧となり、健康を維持し、人々に真の生きがいや充足感をもたらす。そしてその生きがいや充足感、特に、人と人との触れあいのなかで自己を実現するとき実感される。

そして、望ましい人間関係は、個と集団の関係であり、助け合える、協力し合える、話し合える人間関係にあるものである。さらに、自分の心を開き、何でも分かり合える関係である。

3 望ましい人間関係づくりの進め方と配慮事項

(1) 児童生徒のコミュニケーション能力の向上

児童生徒が自分の気持ちを伝えたり、人の声に耳を傾けたり、人間関係を築くスキルを育て、発揮できる場を学校生活の中でたくさん用意していくことが必要である。

ア コミュニケーションについての教員の働きかけが児童生徒の人間関係を向上させる。

イ 特別活動や各教科の授業に、本音で話し合いができる環境と活動を整える。

ウ 児童生徒は、気持ちを聞いてくれる教員、助けてくれる教員を信頼する。

エ 聞き合うことが、共感的な人間関係を形成する。

オ 家庭でのコミュニケーションの深さが、児童生徒のよりよい人間関係づくりを支える。

(2) 人間関係づくりに役立つグループアプローチ

グループアプローチとは、個人の心理治療・教育や児童生徒同士の対人関係の発展のために、グループのメンバー間の相互作用を用いる技法の総称をいう。

○構成的グループエンカウンター

○アサーショントレーニング

○グループワークトレーニング

○ソーシャルスキルトレーニング

○ライフスキルトレーニング

○学校生活スキルトレーニング 等

(3) 配慮事項

ア グループアプローチに対して担任教師は児童生徒がポジティブな感情や認知をもてるようにし、モチベーションを高める。

イ 担任教師は、目的、やり方、留意点を簡潔に説明する。

ウ グループアプローチの選択は児童生徒の学校の生活状況を把握しながら選択する。

4 構成的グループエンカウンター（SGE）とソーシャルスキルトレーニング（SST）の違い

「感情」に視点を当てるか、「行動」に視点を当てるか

(1) SGEは「感情の教育」であり、SSTは「行動の教育」である。「感情への気付き」の促進をねらうか、「立ち振る舞い」の獲得をねらうかの違いがある。

(2) エクササイズでも、ねらいのもちかたにより、SGEにもSSTにもなり得る。たとえば、アサーション（自己主張）のエクササイズを行い、「ああ、そうか。」と気付きの促進をねらえばSGE、相手をいやな気持ちにさせないような自己主張をねらえばSSTのプログラムになる。

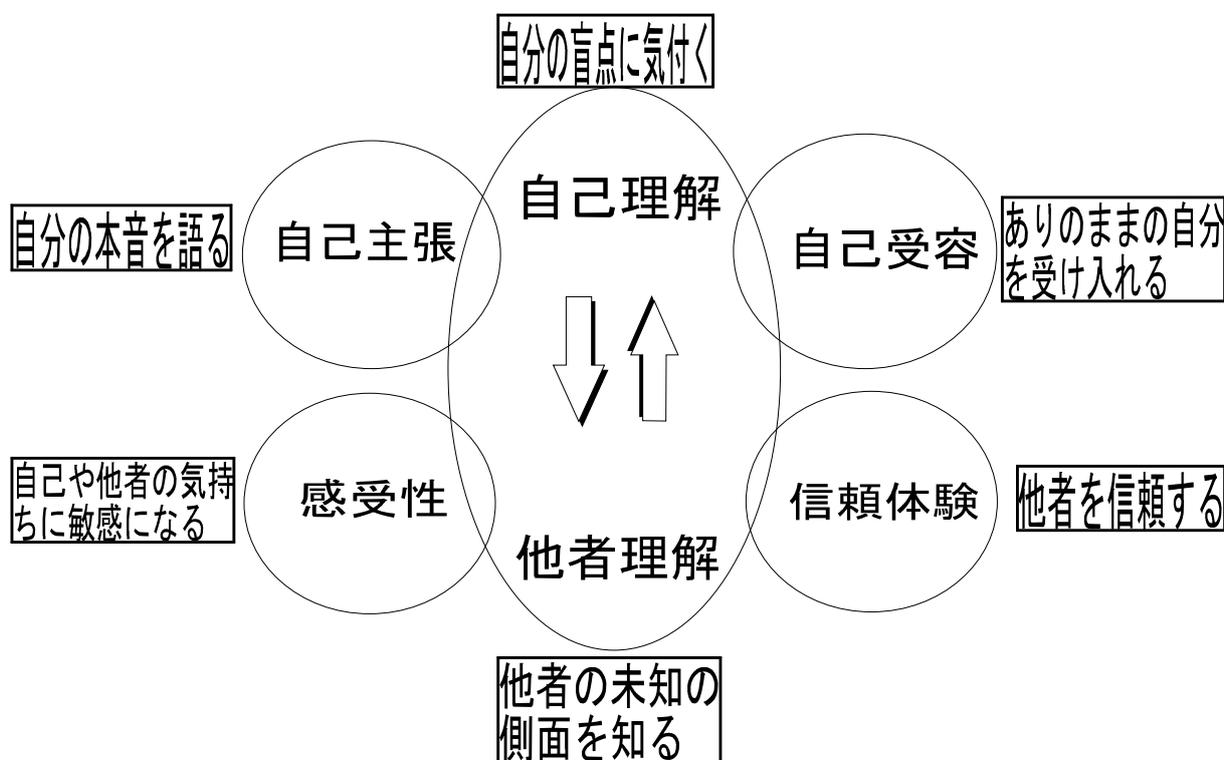
構成的グループエンカウンター

1 構成的グループエンカウンターとは（Structured Group Encounter：SGE）

「エンカウンター」とは、心と心のふれあいを深めることにより、自己の成長を図ろうとするグループ体験である。構成的グループエンカウンターは、時間・テーマ・人数・方法などが決められた各種の課題（エクササイズ）を遂行しながら、心を解放し、友達との交流を深めながら、人間的成長を目指す。

短期間で人間関係が深まること、参加者の状態（モチベーション・レディネス）に応じて計画できること、さらにはプログラムを工夫することにより、熟練者でなくとも活用できることなどの理由から、開発的・予防的なカウンセリングにふさわしい方法として、学校においても定着してきている。

2 エクササイズの六つの機能



3 エクササイズの選び方

- (1) ねらいによる選択
各エクササイズのねらいと学校の現状・実施対象の子どもの実態を考えて選ぶ。
- (2) モチベーションによる選択
初めて経験する子どもが多い場合は、モチベーションを高めるエクササイズを選ぶ。
- (3) レディネスによる選択
レディネス（エクササイズ前の状態や様子、心の準備）によって、達成の度合いが決まることが多いので、実施時期・場所・意義・アレンジの仕方などをよく考えておくことが必要となる。
- (4) 教師の経験度による選択
- (5) エクササイズの段階による選択
抵抗を配慮し、徐々に深いエンカウンターへと進むことが大切である。

4 SGE の展開

(1) インストラクション コツは簡潔明瞭！

エクササイズのねらいや内容，ルールを説明する。やり方をはっきりと分かりやすく伝える。何のために行うのかが分からなければ，不安になり活動に対する抵抗が生じることもある。やらない自由や答えたくない質問には無理に答えなくてよいことなども伝えておく。

(2) エクササイズ

内容を理解して意欲的に参加しているか，グループに入れにくい子はいないかなどを観察する。

(3) シェアリング（振り返り）

エクササイズをとおして，学んだこと，考えたこと，感じたこと，気付いたことなどを振り返り，分かち合う。振り返りカードに記入する方法もある。

エクササイズを行った小グループで行う場合と全体で行う場合がある。

- ・小グループは分かち合いやすい。
- ・全体は大勢で行うので，友達の多様な考え方にふれることができ，新たな気付きを得る機会が増える。

児童生徒がエクササイズを通して，感じたことを大切するため，教師は発言内容について評価的な態度をとらないようにする。

分かち合いをしやすくするためのルールを決めておく。

- 今ここで感じていることを話す。
- 最後まで友達の話聴く。
- 発言に同感のときは，うなずくなどの意思表示をする。
- 話の途中でそれは違うなどと否定的な発言をしない。
- 友達の発言内容を活動終了後うわさ話などにしない。

(4) まとめ

児童生徒の活動から感じたことや気付いたことを全体にフィードバックする。次回につながるように楽しく終わらせるよう配慮する。

5 SGE 展開の配慮事項

- (1) エクササイズに対して，教師は児童生徒がポジティブな感情をもてるようにし，モチベーションを高める。
- (2) エクササイズを選択するときは，学校行事や学年行事に関連させて行う。
- (3) 教師は，エクササイズをやってみて気付いたこと，感じたことを話させ，自己開示とフィードバックを促進させる。
- (4) エクササイズに参加できない児童生徒には，強制せず，計時係や準備係として参加させながら，活動を見学させる。

【共同絵画】

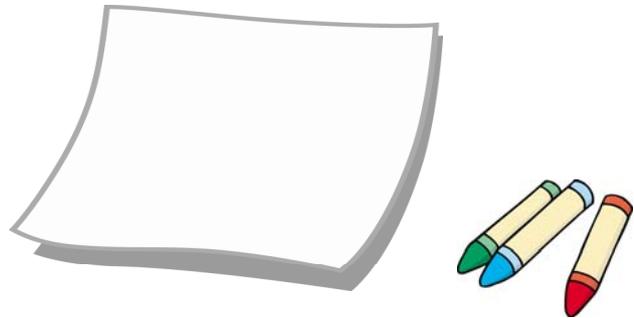
(自己表現, 自己主張, 感受性)

1 ねらい

- 一人一人が自分の役割を遂行し、協力して1枚の絵を完成させる。言葉を使わずに、相手の気持ちを察する経験をさせる。

2 準備するもの

- (1) A3判画用紙
- (2) クレヨン



3 方法

- (1) 4から5人組をつくる。
- (2) 絵の中には、必ず人、家、川、木を書く。
- (3) 声を出さずにコミュニケーションする。友達にはジェスチャーなどでアドバイスしてもよい。
- (4) 一人ずつ順番に短時間で絵を書いて回していく。
- (5) 書き終わったら、お互いに感想を話し合う。
- (6) 最後に絵のタイトルを書く。
- (7) 代表者が発表する。
- (8) 全体でシェアリングを行う。





子ども同士の望ましい人間関係づくり

構成的グループエンカウンター

茨城県教育研修センター

1 望ましい人間関係づくりの目的

- ・生活環境や社会状況の変化に対応すること。
- ・児童生徒自らが、進んで人間関係を構築すること。
- ・人間関係を深めていくこと。

2 望ましい人間関係とは

- ・心の癒
- ・生きがいや充実感
- ・助け合い、協力し合い、話し合える人間関係

3 望ましい人間関係づくりの進め方

- ・児童生徒のコミュニケーション能力の向上
- ・グループアプローチ (SGE, SST? ?)

配慮事項

- ・ポジティブな感情をもてるようにする。
- ・目的、やり方を簡潔に説明する。
- ・グループアプローチは児童生徒の生活状況を考えて選択する。

人間関係づくりに役立つグループアプローチ

- 構成的グループエンカウンター
- アサーショントレーニング
- グループワークトレーニング
- ソーシャルスキルトレーニング
- ライフスキルトレーニング
- 学校生活スキルトレーニング

4 SGEとSSTの違い

- ・ **SGE** (Structured Group Encounter)
「感情の教育」
・・・気づきの促進
- ・ **SST** (Social Skills Training)
「行動の教育」
・・・立ち振る舞いの獲得

構成的グループエンカウンターとは

SGE (Structured Group Encounter)

- ・心と心のふれあいを深め、自己の成長を図ろうとするグループ体験である。
- ・心を開放し、人間的成長を目指す。
- ・短期間で人間関係が深まる。
- ・開発的・予防的なカウンセリング



エクササイズの6つの機能

(1) 自己理解

自分の盲点や本音に気付くこと。
自己理解は他者理解へとつながっていく。

(2) 他者理解

他者の未知の側面を知ること。他者の本音を受け入れること。

(3) 信頼体験

他者を信頼すること。

(4) 感受性の促進

自己や他者の感情に敏感になるということ。

(5) 自己主張

自分の本音を語ること。

(6) 自己受容

ありのままの自分を受け入れること。
私には、短所や欠点があるけれど、結構よいところがあり、そういう私が好きであるという思い。

一人一人の児童生徒が人間として
成長していくことを目指す。

(3) レディネスによる選択

エクササイズ前の状態や様子、心の準備等によって達成の度合いが決まることが多いので、実施時期・場所・意義・アレンジの仕方などをよく考えておく。

(4) 教師の経験度による選択

(5) エクササイズの段階による選択

抵抗を配慮し、徐々に深いエンカウンターへと進むことが大切である。

エクササイズの選び方

(1) ねらいによる選択

学校の現状・実施対象の子どもの実態を考えて選ぶ。

(2) モチベーションによる選択

初めて経験する子どもが多い場合は、モチベーションを高めるエクササイズを選ぶ。

構成的グループエンカウンター(SGE)の展開



シェアリング（振り返り）のルール

- 今ここで感じていることを話す。
- 最後まで友達の話をお聴き。
- 発言に同感のときは、うなずくなどの意思表示をする。
- 話の途中でそれは違うなど、否定的な発言をしない。
- 友達の発言内容を活動終了後にうわさ話などにしない。

SGE展開の配慮事項

- ・ 児童生徒がポジティブな感情をもてるようにする。
- ・ 学校行事、学年行事に関連させて行う。
- ・ エクササイズ終了後、自己開示とフィードバックを促進させる。
- ・ エクササイズに参加できない児童生徒には、強制せず、計時係や準備係として参加させながら活動を見学させる。

「私」メッセージスキル〈デモンストレーション シナリオ例〉

場面設定

先生は、提出期限日に課題を提出しなかった生徒と、昼休みに、一対一で面談することになった。

「あなた」メッセージ

生徒：失礼します。

先生：ああ，来た，来た。

提出物なんだけど・・・

生徒：はい。

先生：いつも，課題，出さないよね。どうして，出さないの？やってないでしょ？

生徒：あ，いや，えっと，ううん・・・

先生：毎晩，ゲームばかりやってるんだろう。なんで，ちゃんとやらないの？

生徒：はい・・・

「私」メッセージ

生徒：失礼します。

先生：ああ，来た，来た。よかった，来てくれて。

提出物について，話を聞きたいんだ。10分位，いいかな？

生徒：はい。

先生：昨日締め切りの課題，出したかな？

生徒：まだです。

先生：そうだね。出てないから，先生，がっかりしたんだよ。

あれは，すごく大事だったから，絶対やってほしかったんだ。

生徒：はい。

先生：何か，提出できない理由でも，あったのかな？

生徒：プリントが・・・

先生：プリントが，どうしたの？

生徒：なくしてしまったんです。

もらいに行こうと思っていたんですが・・・ 忘れちゃって・・・

先生：そうか。気付いたときにすぐ来てくれたら，うれしかったけどなあ。

残念だなあ。

生徒：すみません。プリント，まだ，もらえますか？

先生：ああ，いいよ。一緒に職員室に行こう。

「私」メッセージのシナリオを考えてみましょう

<場面設定例>

Aさんは自己中心的で、普段から規則を守れないことがある。授業中もふざけて集中できないことがあり、まわりに対しての影響力もある。

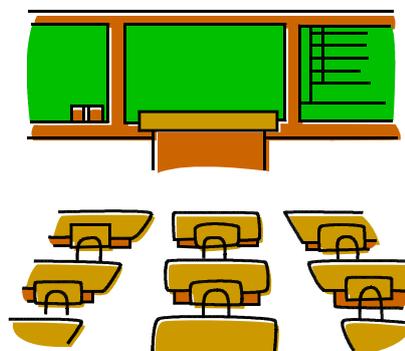
今日も授業中、学級の何人かの児童を巻き込んで話をしてしまい、学級全体が落ち着かなくなった。そのことを指導するために休み時間に担任がAさん呼んだ。

先生：

児童：

先生：

児童：



ポイント

- ・ 意味的主語が「私」
- ・ 肯定的に言う
- ・ できるだけ感情を伝える

振り返り用紙

振り返り

- 1 「あなた」メッセージと「私」メッセージについて知ることができましたか。

できた	だいたい できた	あまり できなかった	できなかった

- 2 「あなた」メッセージと「私」メッセージの違いを理解することができましたか。

できた	だいたい できた	あまり できなかった	できなかった

- 3 「私」メッセージを意識してロールプレイができましたか。

できた	だいたい できた	あまり できなかった	できなかった

- 4 自分の思いを伝える方法を学ぶことができましたか。

できた	だいたい できた	あまり できなかった	できなかった

- 5 この時間のトレーニングで、感じたことや考えたことを書きましょう。

ありがとうございました。

気になる子どもへの教育相談

1 気になる子どもの理解

(1) 気になる子どもとは・・・

今、気になっている子どもは？

(2) 望ましい人間関係づくりの必要性

現在、いじめや不登校の問題に象徴されるように、子どもを取り巻く生活環境や社会状況の著しい変化により、子どもの人間関係に深刻な問題が生じている。子ども自らが、進んで人間関係を構築しようとする意欲が乏しかったり、意欲はあっても、その方法が分からずに行動に移せなかったりする子どもが多くなっていることが指摘されている。

そこで、子どもが有意義で充実した学校生活を過ごすためには、教師と子ども、子ども相互の人間関係を深めていくことが重要である。子どもは、友達関係を深めていくことが大切であり、学級担任は学級内での人間関係の構築のために、具体的な指導・手立てとして何らかの働きかけをしていくことが求められる。



2 気になる子どものからのSOS

(1) 気になる子どもからのSOSの理解

① 子どものSOSは、その子の強さ

- ・ SOSの発信は、困難に向き合おうとする姿勢である。
- ・ 自分から心を開いて助けを求めることは、勇気のいることである。

② 子どものSOSは、大人への信頼感

- ・ 大人への信頼感があるからこそ、SOSは発信される。
- ・ 信頼されているからこそ、誠実に対応しなくてはならない。

(2) 気になる子どもからのSOSへのまづい対応例

① 叱責したり、ばかにしたりする場合

〈例〉・「嫌ならちゃんと言いなさい。」 ・「情けないなあ。」
→ “弱い子” “ダメな子” のレッテル貼りである。

② 安易な解決策で済まそうとする場合

〈例〉・「大丈夫だよ。」 ・「気にするなよ。」
→ 子どもは“不安な気持ちを分かってくれない。”，“相談する意味がない。”と捉える。

③ 無視する場合

- ・子どもは言葉でSOSを出すとは限らない。分かりにくいSOSに気付かないと結果的に無視することと同じである。

〈分かりにくいSOSの例〉・表情 ・服装 ・給食の量 ・友人関係
・教師との距離 など

④ 過剰に反応し、話がこじれる場合

- ・教師が過剰に反応し、本人の意向を考慮しないで解決に動くと、SOSを出すことに躊躇するようになる。
- ・一緒に考えて解決していこうとするスタンスで、まずは、話をよく聴くことが大切である。

⑤ SOSを出せないように誘導される場合

〈例〉・「あなたならできるよ。」「一人でできるんじゃない。」

- 子どもの力を認め、励ましているようだが、子どもの立場で考えるとSOSを出しにくくなることもある。

(3) SOSを出せない子どもの理解

① 「遠慮」によるもの

〈例〉・「忙しそうだなあ。」「担任じゃないしなあ。」

- ・オープンマインドスキルを身に付ける。
- ・全ての教師で見守っている姿勢を示す。

② 「不安・心配」によるもの

〈例〉・「こんな相談したら先生にどう思われるかな。」「家の人にも伝わっちゃうのかな。」

- ・秘密を守ることを約束し、落ち着いて話せる場所と時間を確保する。

③ これまでの経験によるもの

- ・まずい対応例で示したような経験から不信感をもつ子どもには、丁寧に聴くことを繰り返し、「この先生なら安心して話せる。」と思えるように信頼回復に努める。

(4) 子どもがSOSを出せるために

- ① 子どもがSOSを出せるには、自分が大人から“愛されている”，“大切にされている”ことを実感し，更に“自分の気持ちを真剣に受け止めようとしてくれる身近な大人が周囲にいる”ことを理解していることが必要である。そして，ありのままの自分が認められているという安心感をもてこそ，SOSは発信される。

- ② 様々な家庭環境，生育歴などの諸要因で，SOSを出せない子どもたちがいる。内向的な性格も，閉鎖的な家庭で育ってきた家庭環境も簡単には変えられるものではない。だとすれば，学校教育の中で育てていくしかない。SOSを出すスキルを獲得するために，全ての子どもを対象とした予防的・開発的な教育相談活動を行うことが必要となる。

3 相談にのるときの話の聴き方

(1) 安心して話せる環境を整える

- ① 子どもが安心して話をするためには，周囲の目を気にせず，声が漏れずに，落ち着いて話せる場所が必要である。



- ② 座る位置は、子どもの気持ちを考慮する。正面に向き合って座ると緊張感が高まることもある。
 - ③ リラックスできるように、お花や絵画などを配置することも有効である。
- (2) 心の体制を整える
- 忙しい日常を送る教師にとって、落ち着いて話を聴くことは難しいことである。まずは、聴き手側が自分の心の体制を整えることが大切である。
- (3) 「聴く」ことに徹する
- ① 相手の話に「うん」、「へえー」、「ああ、そう」、「なるほど、そうなの」などとあいづちやうなずきをしながら応答し、しっかり聴いていることが相手に伝わるように聴く。
 - ② 子どもの表情、語る言葉、抑揚、間の取り方などを丁寧に感じながら、黙って聴く。
- (4) 評価をしない
- ① 悩みをもつ子どもの心の中は、様々な気持ちが混沌としている。子どもの語る言葉や気持ちの全てを分かったつもりにならずに、丁寧に認めていく姿勢が大切である。
 - ② 子どもの気持ちを受け止めることを重視し、解決を急がない。子どもの心の言い分を、子どもと一緒に感じることを、受けとめることが大切である。
 - ③ 具体的な問題を抱え、解決方法を求める場合でも子どもの話を十分に聴き、気持ちを受けとめた後に、一緒に考えるようにする。その際には、“一緒に考える”、“あなたを守る”、“応援する”といった気持ちを伝え、「あなたは一人じゃないよ。」というメッセージを送る。
 - ④ 子どもの言葉を繰り返し話を聴く中で大切な意味をもつ言葉、子どもが強く訴えたいと考えている言葉を選んで、その言葉を返していく。「～ということなんだね。」、「～と思うんだね。」、「あなたの気持ちは～ですね。」などと繰り返すことで、自分の感情や受け取り方を客観的に見つめることができ、「はっ」と気付くことがある。そして、これが子どもの自問自答を促進し、自己理解が深まっていく。
- (5) 子どもに伝えるとき、子どもの考えを聴きたいとき
- ① 子どもに伝えたいことがあるときには“私メッセージ”で伝えるとよい。「あなたは○○だ。」というあなたメッセージより、「私は○○○と感じるんだけど・・・。」などの“私メッセージ”は、子どもが安心して大人の言葉を聴くことができる。
 - ② 基本的には、子どもが語るのを待つのだが、聴き手側で聴きたいことがあるときには、“開かれた質問”を使うとよい。子どもに質問することで面接の話題を広げ、問題を掘り下げることができる。また、質問されることで、子どもは自分に関心をもたれているという気持ちをもつ。具体的には、「～は何ですか?」、「君はこのことをどう思っているのかな?」、「もう少し具体的にあなたの気持ちを聞かせてほしいな。」というような開かれた質問をし、相手が自分の言葉で語るように配慮することが大切である。

〔演習 1〕

【ウォーミングアップ】

ねらい 演習に入る前に、なごやかな雰囲気づくりをし、活動意欲を高める。

時 間 10分間

進め方

1 「アドジャンⅠ」

- ・ 2分間いろいろな人とジャンケンをして、勝った数をカウントする。誰が一番多く勝ったか確認して、チャンピオンにみんなで拍手を送る。



2 「アドジャンⅡ」

- ・ 2分間いろいろな人と変則ジャンケンをして、指の本数が同じになった数をカウントする。誰が一番多く同じ回数になったか確認して、チャンピオンにみんなで拍手を送る。



3 「バースデー・ライン」

- ・ 全員で誕生日順の輪を作る。そのとき言葉は一切使わない。指などを使って相手に知らせる。
- ・ ラインができれば、誕生日の順番に誕生日と名前を言ってもらう。



〔演習 2〕

傾聴スキル

子どもにとってよい聴き手になろう

ねらい

子どもの気持ちや思いを引き出し、受け止めるための知識と態度を身に付ける。

【ポイント】

- ① 身体で聴く。(非言語コミュニケーション)
- ② 聴き手に徹する。

準備 スキル説明シート、ワークシート、ロールプレイカード、資料

進め方

I ねらいを説明する (2分)

私たちは、子どもたちと関わる中で、知らず知らずのうちについ偉そうな聴き方になってしまったり、指導的な要素が強くなった聴き方をしてしまったりすることがあるのではないのでしょうか。このような聴き方では、子どもの本当の気持ちや思いを聴き出すことは難しいです。今日は、子どもが自分の気持ちや思いを話したくなるような話の聴き方、姿勢・態度を身に付けるための研修です。

II スキル説明シートで、スキルを説明する (8分)

① 身体で聴く(非言語コミュニケーション)

- ア か(身体の向き):子どもに向き合う、手を伸ばすと相手に触れる位の距離
- イ め(目線):子どもと同じ高さ、視線を外さない、話題に合った表情
- ウ う(うなずく):適度なうなずき
- エ リ(リラックス):リラックスしつつ軽い前傾き、余分な動きをしない。

② 聴き手に徹する(あいづちのスキル)

- ア あいづちを打ちながら聴く。・・・「うん、うん。」「なるほど。」
- イ 途中で話を遮らない。・・・話題を取ったり、変えたり、批判したりしない。
- ウ 質問は話の区切りです。・・・「どうしてそう思ったの?」「どうなったの?」
- エ 感情を否定しない。・・・「そうだったんだ。」
- オ 何かできることがあるか尋ねる。・・・「それで何か先生にできることある?」

III 演習をする (30分)

【場面設定例】

おとなしく、自分の意見をなかなか伝えられないAさん。最近になって友だちに意地悪をされて困っている。今日も男子数人から、からかわれて嫌な気持ちになってしまった。自分では言い返せないので、先生に相談しようか迷いながら担任のところに来てきた。担任は子どもの宿題を見ているところでだった。

例 こんな聴き方をしていませんか

A : 先生, あの～・・・。
先 生: 何? (顔を見ずに, 宿題のノートに丸を付けながら)
A : あの～, みんなが私のこと・・・。
先 生: 何, 何かあったの?
A : ・・・。
先 生: 何だよ。いったい何?
A : ううん, 実は・・・。
先 生: 実は何? はっきり言わないと先生だって分かんないよ!

参考例 相手が話しやすい聴き方

児童A : 先生, あの～。
先 生: 何? どうかしたの? (ペンを置き, 身体を向け, 視線を合わせながら)
児童A : あの～, みんなが私のこと・・・。
先 生: うん, うん (うなずきながら) どうしたの?
児童A : ○○○○○○○。

①ブレインストーミングを行う

- ア 例のような聴き方をされて, どう感じたかを話し合う。
イ 例のどこを直すとよい聴き方になるか話し合い, ロールプレイで確かめる。

②ロールプレイを行う

- ア 2人組で「非言語コミュニケーション」, 「あいづちのスキル」を意識しながら話を聴く。

<テーマ> もし100万円手に入ったら 最近うれしかったこと
行ってみたい国 好きなテレビ番組 マイブームについて等

- イ 聴き手を交代しながらロールプレイを繰り返し, 傾聴の練習をする。



子どもにとってよい聴き手になろう

【ポイント】

○身体で聴く・・・かめうり

- ・か 身体の向き（子どもに向き合う，手を伸ばすと相手に触れる位の距離）
- ・め 目線（子どもと同じ高さ，視線を外さない，話題に合った表情）
- ・う うなずく（適度なうなずき）
- ・り リラックス（リラックスしつつ軽い前傾き，余分な動きをしない）

○聴き手に徹する

- ・あいづちを打ちながら聴く … 「うん，うん」，「なるほど」
- ・途中で話を遮らない … 話題を取ったり，変えたり，批判したりしない。
- ・質問は話の区切りです … 「どうしてそう思ったの？」，「どうなったの？」
- ・感情を否定しない … 「そうだったんだ。」
- ・何かできることがあるか尋ねる … 「それで何か先生にできることある？」

【今日のポイント】

○身体で聴く

<ul style="list-style-type: none">・・・・

○聴き手に徹する

[ワークシート]

傾聴スキル

子どもにとってよい聴き手になろう

【場面設定例】

おとなしく、自分の意見をなかなか伝えられないAさん。最近になって友だちに意地悪をされて困っている。今日も男子数人から、からかわれて嫌な気持ちになってしまった。自分では言い返せないので、先生に相談しようか迷いながら担任のところに来てきた。担任は子どもの宿題を見ているところだった。

- 1 例1 <こんな聴き方をしていませんか。>のどこを、どう直すと、もっとよい聴き方になるでしょうか？

- 2 <相手が話しやすい聴き方（傾聴を意識）を試してみませんか。>

児童：先生、あの～
先生：なに？ どうかしたの？（ペンを置き、身体を向け、視線を合わせながら）
児童：あの～ みんなが私のこと・・・。
先生：うん、うん（うなずきながら） どうしたの？
児童：○○○○○○○○。

- 3 今日の研修の振り返り

感想（よいと感じたこと、改善した方がよいと感じたこと等）を自由に書いてください。

（大変そう思う）（そう思う）（思わない）（全く思わない）

- 「ねらい」は、分かりやすかったですか。 A ・ B ・ C ・ D
- 「ポイント」の説明は、分かりやすかったですか。 A ・ B ・ C ・ D
- 演習の場面設定は、適切だと思いましたか。 A ・ B ・ C ・ D
- 振り返りによって、「ねらい」や「ポイント」を再確認できましたか。
A ・ B ・ C ・ D
- 今日の研修内容は、教師にとって有意義だと感じましたか。 A ・ B ・ C ・ D

〔演習 3〕

ねらい

子どもを具体的にイメージして、子どもの話を傾聴する。

- ① 話し手と聴き手の順番を決める。
- ② 事例のポイントを読み込み、面接のイメージをふくらませる。
- ③ 形式（自主来談 or 呼出し）、相談者（児童生徒）を具体的に決め、面接の打合せをする。 (①～③：5分)
- ④ ロールプレイを行う。 (10分)
 - ※ 面接を行う上での留意点を十分に意識して行う。
 - ※ 面接場面では、説得や取調べの姿勢でなく、話し手の話を心を込めて聴くことを心掛ける。
- ⑤ お互いに気付いたこと、感じたことを話し合う。 (5分)
- ⑥ ②～⑤を役割を交換して行う。

【事例のポイント】

【ケース 1】「学級集団の中で人間関係を築くことが難しい A 子」

小学 4 年生の A 子は、友だちの輪の中に入って一緒に活動することが苦手である。休み時間は 1 人で本を読んでいることが多い。自分から友だちの輪の中に入っていくことはほとんどなく、集団の中にいるとストレスを感じるようである。特に元気の良い男子が苦手で、一緒にいると頭がガンガン痛くなってくると言う。5 月になり、体調不良で欠席が目立ち始めた。(記載されていないことは類推する。)

【ケース 2】「部活動の顧問の指導に悩んでいる B 子」

中学 2 年生の B 子は、バレーボール部に所属している。練習は厳しいが、一生懸命に練習し、2 年生ながらレギュラーとして活躍している。しかし、顧問の指導にどうしても納得ができず、内心は不満で一杯だった。総体を前にした 5 月のある日、部活動終了後の顧問の指導に言い返してしまった。それ以降部活に出られなくなり、欠席も目立ち始めた。(記載されていないことは類推する。)

【ケース 3】「進路で悩んでいる C 子」

高校 3 年生の C 子は、そろそろ進学先を決めなくてはならない時期になった。保護者は県内の大学への進学を望んでいたが、C 子自身は自分の夢を叶えるため、専門学校への進学を希望している。先日の三者面談では、保護者が強く主張し、C 子は自分の意見を言えずに保護者の言いなりだった。その後、C 子は体調不良を訴え、保健室で休むことが増えている。(記載されていないことは類推する。)

気になる子どもへの教育相談

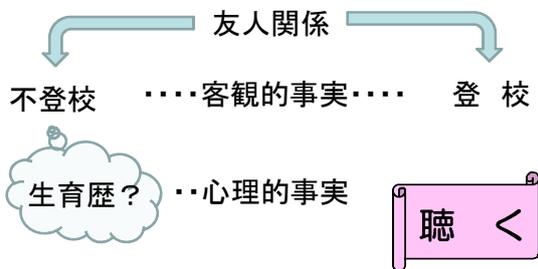
茨城県教育研修センター

今、気になっている子どもは？

- ◇不登校
 - ◇いじめ
 - ◇暴力
 - ◇学力不振
 - ◇発達障害
 - ・落ち着きがない
 - ・キレやすい
 - ・人間関係が築けない
 - …etc
- カウンセリング的手法
- グループアプローチ

気になる子どもの理解と対応

心理的事実(感情)と客観的事実(行動)



気になる子どもからのSOS

(1) 気になる子どもからのSOSの理解

- ◇SOSは弱さではない
 - ・SOSの発信は、困難に向き合おうとする姿勢である。
 - ・自分から心を開いて、他者に助けを求めることである。
- ◇SOSは大人への信頼感の証拠

気になる子どもからのSOS

(2) SOSへのまずい対応例

- ① 叱責されたり、ばかにされたりする場合
- ・「嫌ならちゃんと言いなさい。」
 - ・「情けないな。」



◇“弱い子”“ダメな子”のレッテル貼り

気になる子どもからのSOS

(2) SOSへのまずい対応例

- ② 安易な解決策で済ませようとする場合
- ・「大丈夫だよ。」
 - ・「気にするなよ。」



◇不安な気持ちを分かってくれない。
◇相談する意味がない。

気になる子どもからのSOS

(2) SOSへのまずい対応例

- ③ 無視される場合
- ・ 分かりにくいSOS
(表情, 友人関係, 服装, 給食の量 等)



◇様々なSOSに敏感になる。

気になる子どもからのSOS

(2) SOSへのまずい対応例

- ④ 過剰に反応され、話がこじれる場合
- ・ SOSを無視されたり、軽視されたりすることは嫌なことだが、過剰に反応されるとSOSを出すことに躊躇するようになる。

気になる子どもからのSOS

(2) SOSへのまずい対応例

⑤ SOSを出せないように誘導される場合

- ・「あなたならできるよ。」
- ・「一人でできるでしょう。」



◇評価しているようだが、暗にSOSを出させないように仕向けている。

気になる子どもからのSOS

(3) SOSを出せない子どもの理解

① 「遠慮」によるもの

- ・ “忙しそう”, “担任じゃない”



◇オープンマインドスキルを身に付ける。
◇すべての教師で、すべての子どもを見守っている姿勢を示す。

気になる子どもからのSOS

(3) SOSを出せない子どもの理解

② 「不安・心配」によるもの

- ・ 「先生にどう思われるかな？」
- ・ 「家の人にばれるのかな？」



◇守秘義務に配慮し、落ち着いて相談できる時間と場を提供する。

気になる子どもからのSOS

(3) SOSを出せない子どもの理解

③ これまでの経験によるもの

- ・ “まずい対応例”で示したようなことの経験から、不信感をもつ。



◇丁寧に“聴く”ことを繰り返し、信頼を回復する。

気になる子どもからのSOS

(4) 子どもがSOSを出せるために

① “愛されている”, “大切にされている”

実感を味わわせる。

② すべての子どもを対象とした予防的・開発的教育相談を実施する。

相談にのるときの話の聴き方

(1) 環境を整える

- ① 落ち着いて話せる場所を設定する。
- ② 座る位置に配慮する。
- ③ リラックスできるように環境を整える。

相談にのるときの話の聴き方

(2) 心の体制を整える

① 話をきちんと聴くために、時間と場所の確保に努める。

② 忙しい日常を引きずらないように、心を落ち着ける。

相談にのるときの話の聴き方

(3) 「聴く」ことに徹する

① しっかりと聴いていることを伝える。

- ・ あいづち, うなずき 等

② 黙って聴く。

- ・ 表情, 言葉, 抑揚, 間のととり方 等

相談にのるときの話の聴き方

(4) 評価しない

- ① すべてを分かったつもりにならない。
- ② 子どもの気持ちを受けとめ、解決を急がない。
- ③ 気持ちを受けとめた後に、一緒に考える。
- ④ 子どもの言葉を繰り返す。

相談にのるときの話の聴き方

(5) 伝えるとき、聴きたいとき

- ① 私メッセージで伝える。

※主語を“私“にして伝える方法

・「私は〇〇〇と感じるんだけど・・・。」

相談にのるときの話の聴き方

(5) 伝えるとき、聴きたいとき

- ② 開かれた質問を使う。

※イエス、ノーだけで答えられない
質問の仕方

・「どう思っているの？」

・「そのときの気持ちは？」

校内研修支援事業

気になる子どもへの教育相談

茨城県教育研修センター

国立特別支援教育総合研究所発達障害教育情報センター 研修講義一覧

	講義内容	講義時間
概論	○ちょっと気になるが出発点 ○教室の中の気になる子どもたち	15分 20分
理解と支援	○注意を集中し続けることが難しい子 ○音読が苦手な子 ○書くことが苦手な子 ○乱暴な言葉や態度を示す子 ○授業中や座っているべき時に席を離れてしまう子 ○状況に関係のない発言をする子どもの理解と支援 ○幼児期の発達障害 ○発達障害のある子どもへの指導・支援体制(1) ○発達障害のある子どもへの指導・支援体制(2) ○高機能自閉症等のある児童の国語科指導(1) ～つまずきを予想する～ ○高機能自閉症等のある児童の国語科指導(2) ～基本的な対応について～	13分 12分 14分 18分 16分 17分 17分 17分 12分 13分 13分
保護者支援	○先生と保護者の関係づくり ○幼児を養育している保護者との関わり	16分 15分
医学	○自閉症の医学 ○ADHDとは何か？	18分 18分

インシデントプロセス法によるケース会議の流れ（50分間）

各グループで事例提供者1名，司会進行1名を決めて実施

活動項目と時間	活動の内容と留意点
1 事例の提示 3分 (ワークシート②)	<ul style="list-style-type: none"> ・事例提供者は，事例を発表する。 ・参加者は，インシデント（出来事）を聞き，情報収集に必要な内容をメモする。
2 情報の収集 12分 (ワークシート③)	<ul style="list-style-type: none"> ・事例提供者の困っている事例の背景や原因，対応策の検討のために必要な情報を質問する。 ・一人一問ずつで時間内に繰り返す。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・簡潔に質問する ・具体的な質問をする ・重複した質問はしない ・発表者の推測や感想を求めない ・質問する場合は自分なりに事例の全体像を考えながら質問する </div>
3 個人ワーク 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・何が問題なのかを押さえながら，今後の対応について当事者になったつもりで，指導の方針や対応策を考える。（付箋に記入：3枚以上） ＊「自分だったらどうするか」，「自分だったらどんな協力ができるか」という視点で，アイデアをだす。 ＊自分の経験や実践していることを参考にする。
4 グループ協議 対応策の検討 25分 (ワークシート④)	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の付箋をA3用紙にはりながら，対応策の検討，活用できる人的資源，環境の調整，具体的な援助の方法など意見を出し合う。 ・個人で考えた対応策を基に話し合い，同じような意見を類型化し整理する。（小見出しを付ける） ・協議の中から新たに出てきたアイデアも追加する。
5 まとめ 5分 (ワークシート⑤)	<ul style="list-style-type: none"> ・事例提供者の振り返り（感想・何を学んだかなど） ・全体場で発表し，共通理解を図る。

○質問は，問題の解明を見出すためのものであり，事例提供者を責めるような質問は絶対にしないようにする。

※日常の忙しい中でのケース会議を想定し，できるだけ時間を意識して行う。

特別な教育的ニーズのある児童生徒のケース会議ワークシート

- <① 自分の事例（インシデント）配慮を必要とする児童生徒について >
*学習面・行動・対人関係などで気になる児童生徒を思い出してみよう
*具体的に表現しよう（キレる→大声を出して騒ぐ，物を壊す，暴れる 等）

どんな場面で	どんなことが気になる	どんな児童生徒か
(例) グループ活動の時，自分の意に沿わないと 物にあたる生徒		
		児童生徒

【インシデントプロセス法によるケース会議】

- <② 事例提供者からの報告（インシデント）事例についてメモをしよう >

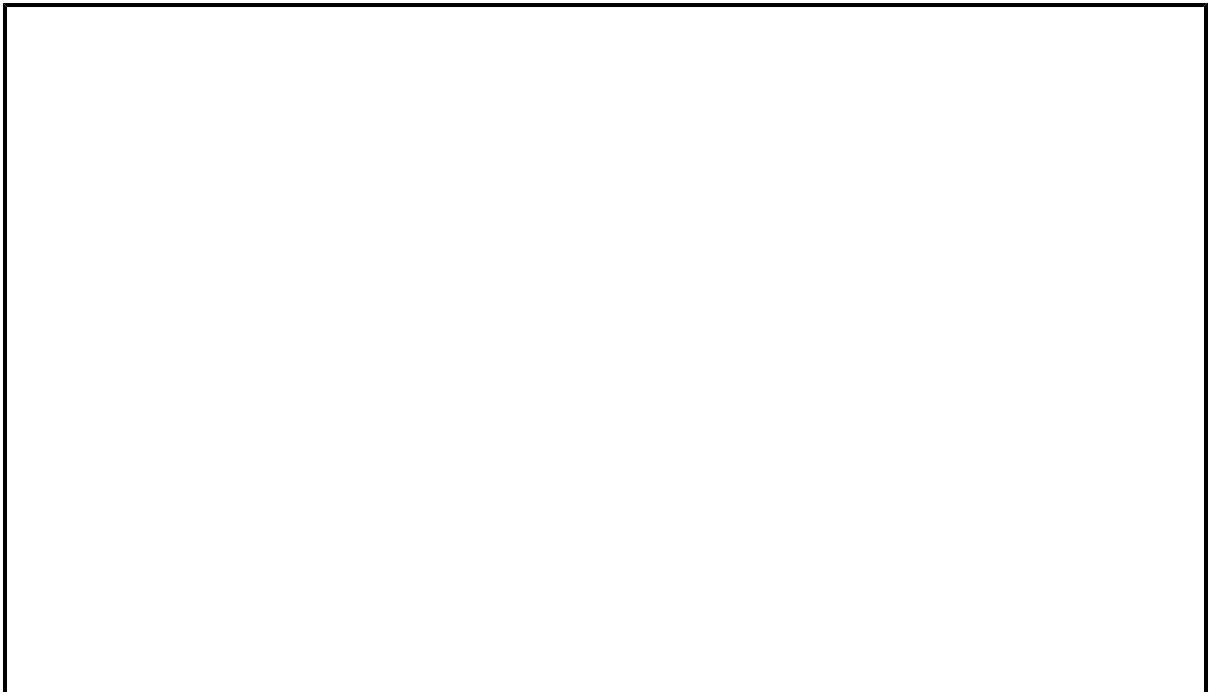
○事例についての概要

- <③ 情報の収集（事例提供者への質問－1問1答形式で）事例の背景を探る >

<④ どんな支援を行うか(対応策の検討) >



<⑤ 事例から学んだこと (事例提供者の感想及び自分自身の感想) >



特別支援教育の視点から学級経営や授業をチェックしてみよう

☆だれにも分かりやすい授業にするために

教室には、発達障害と診断されていなくても、よく似たつまずきのある子がたくさんいる。（連続体）

発達障害の子どもたちへ配慮することは、他の子どもたちにとっても分かりやすいものとなる。どの子にも分かりやすい授業を心掛けていきたい。そうした日常のちょっとした配慮により、救うことができる子どもたちは意外と多いものである。特別支援教育は、一人一人を大切にする教育である。どの子にとっても居心地のよい学級にしていきたい。

授業チェックシート（特別支援教育の視点から）

	項 目	評 価
教室の環境	・子どもたちが集中しやすいように、特に教室の前面は、すっきりしている。	
	・黒板には、授業とは関係ないことが書かれていない。	
	・子どもの気が散ってしまうような余分な掲示物は貼っていない。	
	・月、週、一日の予定が分かりやすく掲示されている。	
	・予定の変更は、あらかじめ分かりやすく伝えている。	
授業のルール	・授業の展開がある程度パターン化されている。	
	・活動内容が分かりやすく示されている。	
	・授業中のルールが決められていて、分かりやすく示されている。	
教師の話し方	・子どもたちの注目を集めてから話している。	
	・指示は、短く簡潔に伝えている。	
	・ポイントをおさえた分かりやすい話し方をしている。	
	・視覚的な手掛かり（絵や文字）を交えて伝えている。	
学習上の対応	・全体への指示では理解できない子へ、適切な支援をしている。	
	・特性に応じた説明の仕方を工夫している。	
	・特性に応じた座席の工夫をしている。	
	・子どもに応じて課題の内容や量を工夫している。	
	・その子のつまずきの様子が分かる資料を残している。	
行動上の対応	・望ましい行動を積極的に誉めている。	
	・当たり前と思われるものにも、できている場面で誉めている。	
	・望ましくない行動には、冷静な態度で対応している。	
	・望ましくない行動を起こす理由を常に考えながら接している。	
	・望ましくない行動への具体的対応が考えられている。	
	・行動面につまずきのある子どもへの支援が計画的に実行されている。	
	・他の子どもたちとの信頼関係を築くことができている。	
	・校内の応援態勢がとれている。	

< 1 : よくできている 2 : まあまあできている 3 : あまりできていない 4 : できていない >

※特別支援教育研究2010. 4月号. 東洋館出版. 岸本友宏(2010)「学級経営や授業に特別支援教育の視点を」を基に改変

「多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リスト」

授業づくりにおいて、通常の学級の担任が一人で工夫できる支援、全ての児童生徒への学習面や行動面での支援につながる支援を中心に、支援項目とそのポイントを一覧にしました。

多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リスト一覧

<p>A 基本的な 授業の計画</p>	<p>1 授業のねらいの確認・実態把握・指導の形態の工夫</p> <p>2 学習課題の複線化 ・児童生徒の学力差の実態に応じて、中心的課題に対する補充的課題、発展的課題を想定して、教材・教具や指導方法を検討する。</p>				
<p>B 安心して 参加できる 授業の工夫</p>	<p>1 一人一人の違いを認め合う集団づくりの工夫 ・賞賛的な授業の進め方 ・誰もが発言・質問しやすい(わからない、困ったといえる)雰囲気づくり ・いろいろな答えや考え方があってよいという雰囲気づくり ・一人一人が活躍できる場面の導入・子ども同士で学び合う・助け合う場面の導入</p> <p>2 わかりやすい学習環境やルールの明示 ・児童生徒が見通しをもちやすい授業の構成の工夫 ・授業の流れの明示、進行状況の板書 ・授業の準備・片付けのルールづくりと明示 ・発表や質問のルールづくりと明示</p>				
<p>C 一人一人の 違いに対応 できる授業 の工夫</p>	<p>1 授業への注意や集中を促す支援 ・黒板や教師に集中しやすい教室環境の整備(掲示物の整理、席順) ・アイコンタクトや身体接触・身体(姿勢)の意識化・声の抑揚、スピードの変化 ・具体物やフラッシュカードの提示・授業の構成の工夫(短時間のユニット) ・イメージ化しやすい言葉かけ・静かな時間の導入</p> <p>2 学習スタイルの違いへの複線的な支援</p> <table border="1" data-bbox="432 1384 1401 1646"> <thead> <tr> <th data-bbox="432 1384 901 1435">○視覚優位(●聞くことが苦手)</th> <th data-bbox="901 1384 1401 1435">□聴覚優位(■見るのが苦手)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="432 1435 901 1646"> ○授業の流れ・まとめの計画的板書 ○カード等で課題や約束等を示す ○プロジェクター・パソコン等による提示 ○動作化(空書等)、体験的な学習 ○図表や記号を使ったヒント ●簡潔な指示 ●具体的な指示 </td> <td data-bbox="901 1435 1401 1646"> □板書・教科書を音読する □一つ一つ言葉で説明する □順序立てて考えられる手順のヒント ■板書文字の大きさ・色・行間の工夫 ■計画的な板書(黒板の分割) ■板書の補助になるプリント準備 </td> </tr> </tbody> </table> <p>3 個別に対応しやすい授業構成の工夫 ・プリント学習や作業課題の導入による机間支援による個別支援 ・机間支援しやすい席順 ・選択場面の導入(内容、プリントのマス目の大きさ、ヒントカード等) ・ヒントコーナー、確認コーナー、質問コーナー等の設置 ・グループ学習(学びあい)の活用</p>	○視覚優位(●聞くことが苦手)	□聴覚優位(■見るのが苦手)	○授業の流れ・まとめの計画的板書 ○カード等で課題や約束等を示す ○プロジェクター・パソコン等による提示 ○動作化(空書等)、体験的な学習 ○図表や記号を使ったヒント ●簡潔な指示 ●具体的な指示	□板書・教科書を音読する □一つ一つ言葉で説明する □順序立てて考えられる手順のヒント ■板書文字の大きさ・色・行間の工夫 ■計画的な板書(黒板の分割) ■板書の補助になるプリント準備
○視覚優位(●聞くことが苦手)	□聴覚優位(■見るのが苦手)				
○授業の流れ・まとめの計画的板書 ○カード等で課題や約束等を示す ○プロジェクター・パソコン等による提示 ○動作化(空書等)、体験的な学習 ○図表や記号を使ったヒント ●簡潔な指示 ●具体的な指示	□板書・教科書を音読する □一つ一つ言葉で説明する □順序立てて考えられる手順のヒント ■板書文字の大きさ・色・行間の工夫 ■計画的な板書(黒板の分割) ■板書の補助になるプリント準備				
<p>D 授業の評価 の工夫</p>	<p>1 授業の評価の工夫 教師の指導方法等の評価、児童生徒の自己評価の活用、多様なつまずき方や学び方への気づき、学習形態の改善・工夫、校内外の資源の活用等の検討</p>				

A 基本的な授業の計画（授業の準備・計画）

支援項目	支援の内容とポイント	●主な対象 基本は全員対象
A-1 授業のねらいの確認・実態把握・学習指導の形態の工夫		
① 授業のねらいの確認	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導要領，教科書等を参考に，授業の中心になる課題を明らかにする。 	●全ての児童生徒
② 学級の集団の実態把握	<ul style="list-style-type: none"> チェックリストの活用や行動観察等から，学級集団の特徴や児童生徒の一人一人の特性を把握する。 既製のチェックリスト等を活用するが，専門的な判断を必要とする場合は，特別支援教育コーディネーターや特別支援学級の担任に相談する。 	●全ての児童生徒
③ 学習指導の形態の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中心的課題や集団の実態から，可能な学習指導の形態を検討する。 少人数指導，チーム・ティーチング，グループ学習，席順等の検討など。 	●全ての児童生徒
④ 教材・教具の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中心的課題について，つまずきやすいポイントをおさえ，わかりやすい教材・教具，指導方法を検討する。 これまでの授業研究等で出された改善策やアイデアを活用する。 	●全ての児童生徒
A-2 学習課題の複線化		
① 発展的な学習課題や補充的な学習課題を準備し，指導方法を検討する。	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中心的課題について，さらに深めていく方法を検討し，集団の実態から発展的な課題や補充的な課題を準備する必要とする児童生徒への課題内容を検討する。 	●全ての児童生徒

B 安心して参加できる授業の工夫（集団づくり・環境整備）

支援項目	支援の内容とポイント	●主な対象 基本は全員対象
B-1 一人一人の違いを認め合う集団づくり		
① 学級の雰囲気づくり	<ul style="list-style-type: none"> 教師が全ての児童生徒一人一人を大切に思っていることを伝えていく。 間違えることや、わからないことは、悪いこと、恥ずかしいことではない雰囲気づくり。 許可を求める表現、教えて欲しいと要求する表現を伝えていく。 物事の感じ方（感覚）や考え方は一人一人違うこと、違ってよいことを伝えていく。 	●全ての児童生徒
② 教師の表情や声	<ul style="list-style-type: none"> 教師が笑顔、穏やかな表情でいることや、落ち着いた声で話すが、安心感を与えることができる。 声の大きさだけで、叱られていると勘違いする児童生徒への配慮。 	●全ての児童生徒
③ ポジティブな表現での切り返し	<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感が低い児童生徒の否定的な表現を受けとめた上で、「〇〇はきっとできるよ」「〇〇のようないいところもあるね」とポジティブな表現で切り返す。 	●自己肯定感の低い児童生徒
④ 教師がモデルを示す	<ul style="list-style-type: none"> 特別な教育的ニーズをもつ児童生徒ができるようになったこと、努力していることを周囲の児童生徒に伝えていく。 周囲の児童生徒に、教師が、かかわり方のモデルを見せていく。 	●全ての児童生徒
⑤ 友達モデル	<ul style="list-style-type: none"> してほしい行動をする友達に気づくような支援。 モデルになる友達が、授業中に視覚に入るような席順を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●注意を受けやすい児童生徒 ●視覚優位の児童生徒
⑥ 活躍できる場面、活動の用意	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中で、活躍できる役割を与えて、賞賛する。 係活動でも一人一人に学級の役割をもたせる。 	●注意を受けやすい児童生徒
⑦ 賞賛	<ul style="list-style-type: none"> できている子を賞賛。タイミング良く賞賛する。サインや表情、声での賞賛。 賞賛はみんなの前で、注意はそっと。 できていない子を注意するより、できている子をほめる。みんなできる子になりたい。 	●注意を受けやすい児童生徒

<p>⑧ 肯定的な表現</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「××しない」ではなく「〇〇しよう」と指示する。してほしいことを言葉にする。 「××できなかつたら□□はなし」ではなく「〇〇できたら□□ができる」と、前向きになる表現で。何をすればよいか分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●イメージをもつことが苦手な児童生徒 ●注意を受けやすい児童生徒
<p>⑨ してほしい行動への対応</p>	<ul style="list-style-type: none"> してほしい行動は、さりげなく無視する。子どもを無視するのではなく、その行動を無視する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●注意を受けやすい児童生徒
<p>⑩ 落ち着ける場所、部屋の用意</p>	<ul style="list-style-type: none"> 一人で落ち着くことのできる場所（図書室・空き教室）などを用意して、興奮したとき、落ち着かないときに利用できるようにしておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ●落ち着かなくなってしまうことが多い児童生徒
<p>⑪ 宿題の工夫 家庭との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> 宿題の分量や内容を増減させる。 一人一人が違う内容、分量でもよいルールをつくる。 予定表等を用意して家庭でも事前に準備・練習をすることを願う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●個別支援が必要な児童生徒
<p>⑫ 忘れ物への準備</p>	<ul style="list-style-type: none"> 忘れ物をした場合の、ノートや消しゴム、鉛筆など、代替りの物を用意しておく（ノートはコピーでよい。線やマス目も同じ方がよい）。 「〇〇がないからできない。」が少なくなる。授業に参加できる安心感を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●忘れ物が多い児童生徒
<p>⑬ 教え合い、助け合いの場面の導入</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動の中で、積極的にグループ活動を取り入れる。 児童生徒間で、教え合ったり、助け合ったりする活動を授業の中に日常的に導入することで、自然に教え合う状況を作っていく。 グループのリーダーとなる児童生徒を育てる。 コの字型など、顔の見える座席配置の工夫。 	<ul style="list-style-type: none"> ●全ての児童生徒
<p>B-2 わかりやすい学習環境やルールの明示</p>		
<p>① 机の上の整理整頓</p>	<ul style="list-style-type: none"> イラスト等で、机の上の教科書、ノート、鉛筆等学習に必要な物の配置を明示。 どこに何を置くかが分かる。机の上の整理整頓につながる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚優位の児童生徒
<p>② ルールの設定</p>	<ul style="list-style-type: none"> 何をどのように、どのくらい、どこまで行うかを決め、わかりやすくする。学校全体に適用するとよい。 発表や質問の仕方、声の大きさ等のルールを教える。 しっかりと叱ることで、教師への信頼感、安心感を高めることもある。わかるように叱ること。 	<ul style="list-style-type: none"> ●全ての児童生徒

③ 授業のパターンをつくる。	<ul style="list-style-type: none"> 見通しをもたせることで安心感をもたせる。 集団の流れを安定させることは、何をすればよいかを視覚的にわかりやすくすることにつながっている。 	●全ての児童生徒
④ ルールや授業の流れの理解への視覚的手がかりの活用	<ul style="list-style-type: none"> ルールの視覚化 百聞は一見にしかず、一目瞭然 スケジュールや変更点を視覚化する。 一日の流れを、小黒板に貼っておく。言葉で言ったことを、視覚でも訴える。 カードや写真を使用する。 	●全ての児童生徒 ●視覚優位の児童生徒
⑤ 終わりの明確化	<ul style="list-style-type: none"> いつ、どのくらいで終わるか。何をしたら終わるのか。具体的に明示。 掃除では、誰がどこを、同のような手順で、どのくらいまできれいにするかを明示。 	●視覚優位の児童生徒
⑥ 授業の流れを掲示	<ul style="list-style-type: none"> 流れを提示することにより、今行うこと、次に行うことが分かる。安心感と見通しをもつことができる。小黒板等に明示するのがよい。 教科書のページ等の進行状況を板書しておく。 	●視覚優位の児童生徒

C 一人一人の違いに対応できる授業の工夫（授業の進め方）

支援項目	支援の内容とポイント	●主な対象 基本は全員対象
C-1 授業への注意や集中を促す支援		
① 教室正面の整理整頓	<ul style="list-style-type: none"> 黒板や正面壁面の不必要な情報を取り除く。 黒板は授業に関することのみ。正面の壁面は、授業中は無地のカーテン等で覆うなどの工夫をする。 	●注意が散漫な児童生徒
② 導入の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 前時の内容の確認。〇×クイズ、フラッシュカード等を使用する。 頭や目の体操も効果的。覚醒・集中を促し、スムーズに授業に入る。 	●授業に集中することが難しい児童生徒
③ 姿勢の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 授業に集中しやすいよい姿勢について、「背中をピンと伸ばしてみましょう」、「だれがよい姿勢だと思いますか？」など、姿勢を意識させる。 	●授業に集中することが難しい児童生徒
④ 座席の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 教師の近くや一番前の席を集中しやすい特別な席にしておいて、集中の難しい児童生徒やがんばりたい児童生徒が座れるようにしておく。 	●授業に集中することが難しい児童生徒

<p>⑤ 授業のテンポと間合い、声の抑揚</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団としての授業の流れのテンポを維持していくことで注意を持続させていく。 ・ 思考を中断させないための工夫だが、学習内容によっては、思考を促すための間合いをいれることも必要。 ・ 声の抑揚の変化で注意を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●授業に集中することが難しい児童生徒
<p>⑥ 静かな時間の導入</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 騒然とした中では、授業にならない。 ・ 教師の「黙りなさい」「静かにしなさい」もうるさい音の一つ。静かになるために、「音のない時間」をカウントダウンで始める。終わりの静かな言葉で。 	<ul style="list-style-type: none"> ●大きな声を出してしまう児童生徒
<p>⑦ 授業の流れの一定化とユニット（コーナー）化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同一教科（単元・題材）であれば、45分をいくつかのユニット（10～15分）に分け、一定の流れを作る。 <p>【例：国語】 音読→話し合い→書く→発表→まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 静と動の組み合わせも有効。 	<ul style="list-style-type: none"> ●イメージをもつことが苦手な児童生徒 ●集中力の続かない児童生徒
<p>⑧ 動ける時間の導入</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ プリント配り、〇〇係りとして、授業中に動く場面を作る。動きたくなる気持ちをリセットすることで、再び集中する事ができる。 ・ 授業途中での、気分転換。低学年であれば歌遊びや、手遊び。高学年であれば、クイズや体操。 	<ul style="list-style-type: none"> ●授業中に歩く児童生徒 ●集中力の続かない児童生徒
<p>⑨ 列指名の工夫</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指名する順番を明確にすることで、発言のルールを守ることができる。 ・ 発問は、多様な発言ができるものにする。どの列から答えさせるかを工夫する。 ・ 周囲の児童生徒や教師がヒントを与えていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ●集中力の続かない児童生徒 ●発言の順番を守りにくい児童生徒
<p>⑩ クラス全体に話をするとき（アイコンタクトや身体接触の活用）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体への話しかけは、自分に話しかけられていると思うことができない。 ・ 話すときには、「〇〇さん・・・」と始める。 ・ 話すときには、目をあわせてから。 ・ 話すときは、肩に手を置くなど、注意を喚起してから。 	<ul style="list-style-type: none"> ●聞くことが苦手な児童生徒 ●集中力の続かない児童生徒
<p>C-2 学習スタイルの違いへの複線的な支援</p>		
<p>① 板書の工夫</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ きれいな黒板。必要のない情報は発信しない。 ・ 形式を一定に。子どものノートのマス目と一行に書く字数を同じにするとよい。 ・ 板書の文字の大きさ、色、行間を全員が読みやすいように工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚優位の児童生徒 ●見るのが苦手な児童生徒

平成19・20年度 特別支援教育に関する研究より

② 授業の中での視覚的教材の活用	<ul style="list-style-type: none"> 言葉だけでは、イメージがわからない子のために。 参考作品や準備物の具体物や写真 プロジェクター、実物投影機、パソコンの活用 約束や課題の提示にカード等を書いて示す。 	●視覚優位の児童生徒
③ 授業のポイントの複線的支援	<ul style="list-style-type: none"> 重要な部分は板書して、しっかりと音読する。 大切なことは、言葉、文字、イラストを有効に使い、見る・読む・書くことで、多方面から確認する。 	●視覚優位、聴覚優位の児童生徒双方
④ 図や記号を使ったヒント	<ul style="list-style-type: none"> ことばで説明するだけでなく、問題を解く場面では、図表や矢印などの記号を使ってヒントを出す。 	●視覚優位の児童生徒
⑤ 順序を意識したマニュアルによるヒント	<ul style="list-style-type: none"> 問題を解く場面では、① ○○をする→② △△を書く→③ □□をする のような順序立てて考えられるマニュアル等を用意する。 	●聴覚優位の児童生徒
⑥ 一時一作業一文一動詞(動作)	<ul style="list-style-type: none"> ノートを取るとき、作業をしているときに、他の説明や情報を入れない。混乱のもと。 一回の指示で、二つの指示はさける。一つ目、もしくは二つ目しか入らない。 	●聞くことが苦手な児童生徒
⑦ 指示・説明は簡潔に	<ul style="list-style-type: none"> 集中時間が短いことが考えられるので、要点を絞り簡潔に短く話す。視覚的な補充もする。 	●聞くことが苦手な児童生徒
⑧ 結論を先に話す	<ul style="list-style-type: none"> 「○○について、三つすることを話します。一つめは…、二つめは…」 	●聞くことが苦手な児童生徒
⑨ 具体的に話す	<ul style="list-style-type: none"> 「あれ」「これ」「それ」「だいたい」「もう少し」「ちゃんと」を具体的に話す。量や数値、具体的な指示をする。 図形や式などの書かれているものを一つ一つことばでも説明する。 	●イメージをもつことが苦手な児童生徒 ●聴覚優位の児童生徒
⑩ 言葉のイメージカ	<ul style="list-style-type: none"> たとえを上手に使う。「○○のように○○しましょう」など、言葉だけの指示でも、イメージがふくらみ分かりやすい 	●イメージをもつことが苦手な児童生徒
⑪ 実際の動作や体験的学習の導入	<ul style="list-style-type: none"> 文字を書く前に、空書を全員で行うなど、身体を使った動作を取り入れる。 実際に具体物を操作する体験的な学習を取り入れる。 	●イメージをもつことが苦手な児童生徒
⑫ ノートやプリントの工夫	<ul style="list-style-type: none"> 本人に合ったマス目のノートや、プリントを選べるようにしておく。 板書と同じプリントの用意。 	●書くことが苦手な児童生徒

C-3 個別に対応しやすい授業構成の工夫

① 席順の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 担任が机間支援しやすい席順にする。 	●個別支援が必要な児童生徒
② プリント学習や作業的課題の導入 (同一課題の中で内容を変える)	<ul style="list-style-type: none"> ・ プリント学習や作業的な学習の場면을意図的に計画して、個別支援を行う。難易度の異なる複数の課題(プリント)を用意しておく。 ・ 自分にあった課題, プリント, ヒントカード等を選択できるようにする。 	●個別支援が必要な児童生徒
③ ヒントコーナー, 確認コーナー, 質問コーナーの設置	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の中で, プリント学習や作業的な学習の時間有的时候に, ヒントコーナー, 確認コーナー, 質問コーナー等を設置して, 自分に合った学習内容を選択することができるようにする。 	●全ての児童生徒
④ グループ学習の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒同士で教え合ったり, 助け合う場面を導入する。 ・ 適宜, 教師による個別支援も導入する。話し合いの進め方等をわかりやすく示しておくことが必要。 ・ 継続的に行う中でグループのリーダーとなる児童生徒を育てることも重要。 	●全ての児童生徒

D 授業の評価の工夫

支援項目	支援の内容とポイント	●主な対象 基本は全員対象
D-1 授業の評価の工夫		
① 評価規準による学習の到達度等の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業のねらいに基づいて評価を行う。 ・ 毎授業行うことが難しい場合は, 単元単位程度で評価を行う。 ・ 客観的なテスト, 観察, 自己評価等の多様な評価方法を組み合わせる。 ・ 個別の指導計画を作成している児童生徒については, 個人目標に対する評価を行う。 	●全ての児童生徒を対象
② 教師の指導計画及び指導方法の反省	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎回の授業でも行うが, 授業研究等を積極的に活用して, 複数の教師で評価し合う。 ・ 「基本的な授業の計画」「安心して参加できる授業の工夫」「一人一人の違いに対応できる授業の工夫」について, 有効であったこと, 改善点を評価する。 	●全ての児童生徒(特定の児童生徒に焦点化することも必要)

平成19・20年度 特別支援教育に関する研究より

<p>③ 全ての児童生徒のつまずき方や学び方の違いへの気づき</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別な教育的ニーズをもつ児童生徒やその他の児童生徒のつまずき方や学び方の特徴を観察する ・ 複数の職員（サポートティーチャーを含む）で観察することで、担任だけでは気づきにくい部分の情報を得る。 ・ 職員間で共有することで、児童生徒理解の力を高めることができる。 	<p>●全ての児童生徒（特定の児童生徒に焦点化することも必要）</p>
<p>④ グループ学習等の学び合いの様子への気づき</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒同士の学び合いの様子を観察し、コミュニケーション面についての実態について観察する。 ・ 複数の職員で観察することにより、担任だけでは気づきにくい部分の情報を得る。 ・ 学び合い、教え合いを充実させるための工夫点について検討する。 	<p>●全ての児童生徒（特定の児童生徒に焦点化することも必要）</p>
<p>⑤ 校内外の資源の活用の必要性の検討</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ティーム・ティーチングや少人数指導等の学習の形態の工夫、専門機関等との連携の必要性等について検討する。 ・ 通常の学級が一人で悩むことのないような、校内支援体制、相談体制を整備することが必要。 	<p>●全ての児童生徒（特定の児童生徒に焦点化することも必要）</p>

※ 詳細につきましては、本研修センターHP「研究」→ 「H20 研究報告書」→ 「特別支援教育における授業の実際と評価」を ご覧下さい。

<http://www.center.ibk.ed.jp/contents/kenkyuu/h20/houkokusho.htm>

引用文献・参考文献，参考資料

【引用文献・参考文献】

- 相川充著「先生のためのソーシャルスキル」（サイエンス社）平成20年6月
- 天笠茂，佐藤晴雄，堀井啓幸監修「学級経営チェックポイント」（第一法規）平成19年2月
- 有本昌弘監修 白鳥信義著「教師の意識を変える校内研修マニュアル」（学事出版）平成22年6月
- 北神正行，木原俊行，佐野享子著「学校改善と校内研修の設計」（学文社）平成22年8月
- 北神正行編著「『つながり』で創る学級経営」（ぎょうせい）平成23年10月
- 佐古秀一，曾余田浩史，武井敦史著「学校づくりの組織論」（学文社）平成23年6月
- 篠原清昭編著「スクールマネジメントー新しい学校経営の方法と実践ー」（ミネルヴァ書房）平成18年4月
- 高橋あつ子著「一から始める特別支援教育『校内研修』ハンドブック」（明治図書）平成19年11月
- 千々布敏弥編集「『授業力向上』実践レポート」（教育開発研究所）平成21年1月
- ちょんせいこ著「学校が元気になるファシリテーター入門講座」（解放出版社）平成21年4月
- 柘植雅義，堀江祐爾，清水静海編著「教科教育と特別支援教育のコラボレーションー授業研究の新たな挑戦ー」（金子書房）平成24年6月
- 栃木県総合教育センター「組織力の向上を図る校内研修の充実」平成22年11月
- 中留武昭編集「学校改善を促す校内研修」（東洋館出版社）平成6年3月
- 日本教育経営学会紀要編集委員会編「学校の組織力と教育経営」（第一法規）平成22年5月
- 浜田博文編集「『学校の組織力向上』実践レポート」（教育開発研究所）平成21年4月
- ピーター・M・センゲ著，守谷信之ほか訳「最強組織の法則」（徳間書店）平成7年6月
- ピーター・M・センゲ著，枝廣淳子ほか訳「学習する組織」（英治出版）平成23年1月
- 淵上克義，佐藤博志，北神正行，熊谷慎之輔編著「スクールリーダーの原点ー学校組織を活かす教師の力」（金子書房）平成21年2月
- 堀公俊著「ファシリテーション入門」（日本経済新聞出版社）平成16年7月
- 堀公俊著「組織変革ファシリテーター」（東洋経済新聞社）平成18年9月
- 堀公俊，加留部貴行著「教育研修ファシリテーター」（日本経済新聞出版社）平成22年10月
- 牧昌見著「学校経営の基礎・基本」（教育開発研究所）平成10年12月
- 森時彦著「ファシリテーターの道具箱」（ダイヤモンド社）平成20年3月
- 堀井啓幸，黒羽正見編集「教師の学び合いが生まれる校内研修」（教育開発研究所）平成17年8月
- 村川雅弘編著「ワークショップ型研修のすすめ」（ぎょうせい）平成17年5月
- 村川雅弘編集「ワークショップ型校内研修で学校が変わる学校を変える」（教育開発研究所）平成22年5月
- 村川雅弘編集「『ワークショップ型校内研修』充実化・活性化のための戦略&プラン43」（教育開発研究所）平成24年5月
- 横浜市教育委員会編著「教師力向上の鍵」（時事通信社）平成23年3月
- 渡部邦雄，中進士，唐澤勝敏編著「中学校 校内研修の進め方・深め方」（文京書院）平成4年11月
- Peter M. Senge著「Schools That Learn」（BANTAM DELL）平成24年7月
- 文部科学省「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」平成22年11月
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集」平成23年11月
- 文部科学省「小学校理科の観察，実験の手引き」平成23年3月
- 文部科学省「食に関する指導の手引き」平成19年3月
- 文部科学省「小学校キャリア教育の手引き<改訂版>」平成23年5月，
「中学校キャリア教育の手引き」，平成24年3月，「高等学校キャリア教育の手引き」平成24年11月
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」平成23年11月
- 独立行政法人教員研修センター「教員研修の手引きー効果的な運営のための知識・技術ー」平成24年3月

【参考資料】

＜茨城県教育研修センター作成＞

- 「教職に関する研究『次世代の教職員を育てるために～OJTの進め方～』」平成23年度（教職教育課）
- 「教育の情報化に関する研究」平成23年度（情報教育課）
- 「校内研修で使えるエクササイズ集（PDF）」（教育相談課）
- 「グループアプローチを進める上で教師が感じる不安やとまどい軽減ハンドブック（PDF）」
平成21年度第70号（教育相談課）
- 「面接の基本的な技法（PDF）」（教育相談課）
- 「個別面接の実際（PDF）」（教育相談課）
- 「個別面接の実際（動画）」（教育相談課）
- 「改訂版『特別な配慮を要する子どもの(LD・ADHD・高機能自閉症等)理解と対応 Q&A 』」（特別支援教育課）
- 「インシデントプロセス法を用いたケース会議の進め方について」（特別支援教育課）
- 「授業づくりの支援リスト」平成19,20年度（特別支援教育課）
- 「授業づくりワークシート」平成19,20年度（特別支援教育課）

＜茨城県教育委員会等作成＞

- 「学校体育指導資料」第33集「指導にすぐ生かせるワンポイント事例集」平成16年3月～
第41集「指導にすぐに生かせる体育授業のモデル集（その6）」平成24年3月（保健体育課）
- 「教育情報ネットワーク研修用テキスト」
- 「人権教育指導資料 第26集 人権に関する学習の展開事例集－授業に活用できる参加体験型人権学習－」
- 「人権教育指導資料 第33集 人権学習プログラム－人権が尊重される社会の実現をめざして－」
- 「人権教育指導資料 第34集 みんなえがお」

＜その他の教育機関等作成＞

- 文部科学省「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」
- 教育情報化推進協議会「教員のICT活用指導力向上／研修テキスト増補改訂版」平成24年3月
- 日本教育工学会（JAPET）「『情報モラル』指導実践キックオフガイド」平成19年3月
- 国立教育政策研究所「キャリア教育をデザインする『今ある教育活動を生かしたキャリア教育』
－小・中・高等学校における年間指導計画作成のために－」平成24年8月
- 国立特別支援教育総合研究所発達障害教育情報センター「研修講義」

学校の組織力を高める校内研修の展開

発行 平成25年3月
茨城県教育研修センター
〒309-1722 茨城県笠間市平町1410
TEL 0296-78-2121 FAX 0296-78-2122
URL <http://www.center.ibk.ed.jp/>